

菟道門ノ前古墳・菟道遺跡 発掘調査報告書

宇治市教育委員会



1998

序

宇治市では、現在「源氏物語のまちづくり」をテーマに総合的街づくり事業に取り組んでいます。これは、香り高い市民文化や文化遺産に恵まれたこの地の風土を生かした「ふるさと宇治」の創造をめざすものです。

この「まちづくり」は『源氏物語』の「宇治十帖」をメインイメージとしながらも、具体的には世界文化遺産に登録されました国宝の平等院や宇治上神社を代表とする、宇治に伝えられた数多くの文化遺産やその歴史性がバックボーンとなっていることは言うまでもありません。

このように、宇治といえば、近年では平安王朝関係がことに取り上げられるようになりましたが、さらに古い時代の文化財や遺跡あるいは伝承が数多く残されている土地柄であることも、広く知られているところです。例えば『古事記』や『日本書紀』に伝えられる応仁天皇の皇子、菟道稚郎子の物語は、宇治とヤマト政権との強いつながりを示すものとして有名です。ご存じのごとく菟道稚郎子皇子は宇治上神社・宇治神社の祭神となっています。このような物語成立の歴史的背景には、宇治に残される数多くの古墳や遺跡があります。

さて、ここに報告いたします菟道遺跡は、平安時代に平等院をはじめとする藤原氏関係の別業や寺院が、今の宇治市街地一帯に造られ、現在に続く宇治の中心地が出来上がる以前、「ウジ」の中心地であったと推定されている場所です。いわば「宇治のルーツ」といってよい遺跡なのです。

発掘調査の具体的な内容は本書に詳しく報告したところですが、古墳時代から室町時代に至る、この土地の歴史的変遷が明瞭に発掘され、なお不明な点が多かった宇治の古代史に、とても具体的で貴重な資料を提供してくれました。ふるさと宇治が歩んできた確かな歴史の解明は、この発掘調査によって確実に一步前進したものと確信しております。今後はこの成果を、教育・啓発活動や情報発信の中に取り入れ、豊かなふるさと文化を創造してゆかなくてはならないと考えています。

末筆になりましたが、この発掘調査の実施にあたってご理解とご協力をいただきました睦備建設株式会社をはじめ、地元町内会の皆様、また専門的なご教示ご指導をいただきました関係各位には、こころから感謝を申し上げます。

平成10年3月

宇治市教育委員会

教育長 谷口道夫

例 言

1. 本書は、宇治市教育委員会が宇治市菟道門ノ前・谷下りに所在する菟道遺跡で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本書は『宇治市文化財調査報告』第5冊にあたる。
3. 本書が収録する発掘調査に関する遺物・発掘調査記録は宇治市教育委員会が保管している。
4. 本書が用いる測量座標は平面直角座標VI系である。高さは海拔高である。
5. 本書が用いる方位は座標北を基本としている。
6. 本書の遺構表示は各遺構に番号をつけ、その前に下記の遺構性格別の略記号を付した。
SA：柵・塀、SB：建物、SD：溝、SK：土壌、SX：左記以外の性格不明遺構。
7. 遺構番号については、発掘調査時は各トレンチで遺構の性格毎に番号を付したが、本報告書では全遺構を通し番号とする個別遺構管理に変更している。これに伴う遺構番号の新旧対応については巻末の対照表にまとめた。
なお遺構番号は、菟道門ノ前古墳調査区では2桁で、その他の地区では4桁で表現した。M-IVトレンチの遺構番号は0000番台、T-Iトレンチでは1000番台、T-IIトレンチでは2000番台、T-IIIトレンチでは3000番台、T-IVトレンチでは4000・5000番台がそれぞれ付されている。
8. 各トレンチ配置図・遺構図は巻末図版にまとめ、遺構図の縮尺はM-IVトレンチを除き1/200とした。
9. 図版・本文挿図における遺物番号と写真図版の遺物番号とは対応している。
10. 遺物実測図の縮尺は、土器・円筒埴輪については1/4、形象埴輪については1/5、軒瓦については1/3を基本とした。遺物に応じて縮尺をこれ以外としたものも一部にある。また、須恵器・土師器・埴輪類の実測図断面はスミで、灰釉陶器・緑釉陶器はアミの濃淡で、陶器はスミの周囲を白ヌキで、他は斜線で器種別表示をした。
11. 本書が使用する土器・埴輪の型式・年代は下記を参考とした。
古墳時代：平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群』I 1966。
川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978。
飛鳥・奈良：奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』II 1978。
時代 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』VII 1976。
白石太一郎「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集 1982。
平安時代：小森俊寛・上村憲章・平尾政幸・堀内明博・吉村正親「土器と陶磁器」『平安京提要』1994。
12. 本書の註は第I～IV章まではIV章の末尾に、第V章については各節末尾に付した。
13. 本書が使用するカラー写真・遺物写真は寿福滋氏に撮影依頼したものである。発掘現地での各遺構写真は担当者が撮影した。
14. 本書の執筆は吹田直子・杉本宏・浜中邦弘・中井淳史・西田倫子・宮崎一弥が分担し、文責は文末に記した。
15. 本書の編集実務は吹田直子が担当した。編集作業にあたっては杉本宏、荒川史、浜中邦弘がこれを助けた。

菟道門ノ前古墳・菟道遺跡

発掘調査報告書

目 次

第 I 章 序 言

第 1 節 発掘調査の経過	1
A. 平成 6 年度の経過	1
B. 平成 7 年度の経過	2
C. 報告書刊行の経過	4
D. 発掘調査の体制	4
第 2 節 調査日誌抄	5
A. 平成 6 年度	5
B. 平成 7 年度	8

第 II 章 位置と環境

第 1 節 菟道地区の景観	11
第 2 節 菟道地区の歴史環境	13

第 III 章 門ノ前地区の調査

第 1 節 試掘調査区と発掘調査区	17
第 2 節 菟道門ノ前古墳の遺構	19
第 3 節 菟道門ノ前古墳出土遺物	23
A. 形象埴輪類	23
B. 円筒埴輪類	34
C. 陶 棺	37
D. 金属製品	40
E. 土器類	40
F. 石製品	42
G. 石器剥片・未成品	43
H. 瓦製品	43
第 4 節 菟道遺跡の遺構	44
第 5 節 菟道遺跡出土遺物	46

第 IV 章 谷下り地区の調査

第 1 節 検出遺構	49
A. I トレンチ	49
B. II トレンチ	51
C. III トレンチ	55
D. IV トレンチ	61
第 2 節 出土遺物	73
A. 古墳時代	73
B. 飛鳥・奈良・平安時代	80
C. 鎌倉時代	97
註 (第 I 章～第 IV 章)	98

第 V 章 ま と め

第 1 節 菟道門ノ前古墳の検討	99
A. 古墳の概要と評価	99
B. 形象埴輪の配置	101
C. 出土陶棺の復元	107
第 2 節 菟道遺跡群の遺構変遷	111
A. 縄文時代	111
B. 古墳時代中期の遺構	111
C. 古墳時代後期～飛鳥時代前期の遺構	112
D. 飛鳥時代後期～奈良時代前期の遺構	113
E. 奈良時代後期～平安時代中期の遺構	117
F. 鎌倉時代～室町時代の遺構	119
第 3 節 菟道遺跡群発掘の成果と課題	120
A. 古墳の造営と居住域の変動	120
B. 古代集落の成立	124
C. 古代集落と生産活動	124
D. 古代集落と古代寺院	127
E. むすびにあたって	129
新旧遺構名対照表	132

図 版 目 次

- | | | | |
|------|-----------------------|------|---------------------|
| 図版 1 | 調査地の位置 | 図版28 | 菟道遺跡谷下り地区Ⅰトレンチ遺構図 |
| 図版 2 | 調査地の位置と周辺の遺跡 | 図版29 | 菟道遺跡谷下り地区Ⅱトレンチ遺構図 |
| 図版 3 | 調査地区の位置とトレンチの配置 | 図版30 | 菟道遺跡谷下り地区Ⅲトレンチ遺構図 1 |
| 図版 4 | 菟道門ノ前古墳遺構図 | 図版31 | 菟道遺跡谷下り地区Ⅲトレンチ遺構図 2 |
| 図版 5 | 菟道門ノ前古墳SX09土層図 | 図版32 | 菟道遺跡谷下り地区Ⅳトレンチ遺構図 |
| 図版 6 | 菟道門ノ前古墳遺物実測図 1 | 図版33 | 菟道遺跡谷下り地区遺物実測図 1 |
| 図版 7 | 菟道門ノ前古墳遺物実測図 2 | 図版34 | 菟道遺跡谷下り地区遺物実測図 2 |
| 図版 8 | 菟道門ノ前古墳遺物実測図 3 | 図版35 | 菟道遺跡谷下り地区遺物実測図 3 |
| 図版 9 | 菟道門ノ前古墳遺物実測図 4 | 図版36 | 菟道遺跡谷下り地区遺物実測図 4 |
| 図版10 | 菟道門ノ前古墳遺物実測図 5 | 図版37 | 菟道遺跡谷下り地区遺物実測図 5 |
| 図版11 | 菟道門ノ前古墳遺物実測図 6 | 図版38 | 菟道遺跡谷下り地区遺物実測図 6 |
| 図版12 | 菟道門ノ前古墳遺物実測図 7 | 図版39 | 菟道遺跡谷下り地区遺物実測図 7 |
| 図版13 | 菟道門ノ前古墳遺物実測図 8 | 図版40 | 菟道遺跡谷下り地区遺物実測図 8 |
| 図版14 | 菟道門ノ前古墳遺物実測図 9 | 図版41 | 菟道遺跡谷下り地区遺物実測図 9 |
| 図版15 | 菟道門ノ前古墳遺物実測図10 | 図版42 | 菟道遺跡谷下り地区遺物実測図10 |
| 図版16 | 菟道門ノ前古墳遺物実測図11 | 図版43 | 菟道遺跡谷下り地区遺物実測図11 |
| 図版17 | 菟道門ノ前古墳遺物実測図12 | 図版44 | 菟道遺跡谷下り地区遺物実測図12 |
| 図版18 | 菟道門ノ前古墳遺物実測図13 | 図版45 | 菟道遺跡谷下り地区遺物実測図13 |
| 図版19 | 菟道門ノ前古墳遺物実測図14 | 図版46 | 菟道遺跡谷下り地区遺物実測図14 |
| 図版20 | 菟道門ノ前古墳遺物実測図15 | 図版47 | 菟道遺跡谷下り地区遺物実測図15 |
| 図版21 | 菟道門ノ前古墳遺物実測図16 | 図版48 | 菟道遺跡谷下り地区遺物実測図16 |
| 図版22 | 菟道門ノ前古墳遺物実測図17 | 図版49 | 菟道遺跡谷下り地区遺物実測図17 |
| 図版23 | 菟道門ノ前古墳遺物実測図18 | 図版50 | 菟道遺跡谷下り地区遺物実測図18 |
| 図版24 | 菟道門ノ前古墳遺物実測図19 | 図版51 | 菟道遺跡谷下り地区遺物実測図19 |
| 図版25 | 菟道遺跡門ノ前地区（M-Ⅳトレンチ）遺構図 | | |
| 図版26 | 菟道遺跡門ノ前地区遺物実測図 | | |
| 図版27 | 菟道遺跡谷下り地区トレンチ配置図 | | |

写真図版目次

- | | | | |
|--------|--------|--------|-------------|
| 写真図版 1 | 上空写真 1 | 写真図版 3 | 上空写真 3 |
| 写真図版 2 | 上空写真 2 | 写真図版 4 | 菟道門ノ前古墳遺構 1 |

- 写真図版5 菟道門ノ前古墳遺構2
- 写真図版6 菟道門ノ前古墳遺構3
- 写真図版7 菟道門ノ前古墳遺物1
- 写真図版8 菟道門ノ前古墳遺物2
- 写真図版9 菟道門ノ前古墳遺物3
- 写真図版10 菟道門ノ前古墳遺物4
- 写真図版11 菟道門ノ前古墳遺物5
- 写真図版12 菟道門ノ前古墳遺物6
- 写真図版13 菟道門ノ前古墳遺物7
- 写真図版14 菟道門ノ前古墳遺物8
- 写真図版15 菟道門ノ前古墳遺物9
- 写真図版16 菟道門ノ前古墳遺物10
- 写真図版17 菟道門ノ前古墳遺物11
- 写真図版18 菟道門ノ前古墳遺物12
- 写真図版19 菟道門ノ前古墳遺物13
- 写真図版20 菟道門ノ前古墳遺物14
- 写真図版21 菟道門ノ前古墳遺物15
- 写真図版22 菟道門ノ前古墳遺物16
- 写真図版23 菟道門ノ前古墳遺物17
- 写真図版24 菟道門ノ前古墳遺物18
- 写真図版25 菟道門ノ前古墳遺物19
- 写真図版26 菟道門ノ前古墳遺物20
- 写真図版27 菟道門ノ前古墳遺物21
- 写真図版28 菟道遺跡門ノ前地区IVトレンチ遺構
- 写真図版29 菟道遺跡門ノ前地区遺物
- 写真図版30 菟道遺跡谷下り地区Iトレンチ遺構1
- 写真図版31 菟道遺跡谷下り地区Iトレンチ遺構2
- 写真図版32 菟道遺跡谷下り地区IIトレンチ遺構1
- 写真図版33 菟道遺跡谷下り地区IIトレンチ遺構2
- 写真図版34 菟道遺跡谷下り地区IIトレンチ遺構3
- 写真図版35 菟道遺跡谷下り地区IIIトレンチ遺構1
- 写真図版36 菟道遺跡谷下り地区IIIトレンチ遺構2
- 写真図版37 菟道遺跡谷下り地区IIIトレンチ遺構3
- 写真図版38 菟道遺跡谷下り地区IIIトレンチ遺構4
- 写真図版39 菟道遺跡谷下り地区IIIトレンチ遺構5
- 写真図版40 菟道遺跡谷下り地区IIIトレンチ遺構6
- 写真図版41 菟道遺跡谷下り地区IVトレンチ遺構1
- 写真図版42 菟道遺跡谷下り地区IVトレンチ遺構2
- 写真図版43 菟道遺跡谷下り地区IVトレンチ遺構3
- 写真図版44 菟道遺跡谷下り地区IVトレンチ遺構4
- 写真図版45 菟道遺跡谷下り地区IVトレンチ遺構5
- 写真図版46 菟道遺跡谷下り地区IVトレンチ遺構6
- 写真図版47 菟道遺跡谷下り地区IVトレンチ遺構7
- 写真図版48 菟道遺跡谷下り地区IVトレンチ遺構8
- 写真図版49 菟道遺跡谷下り地区IVトレンチ遺構9
- 写真図版50 菟道遺跡谷下り地区IVトレンチ遺構10
- 写真図版51 菟道遺跡谷下り地区遺物1
- 写真図版52 菟道遺跡谷下り地区遺物2
- 写真図版53 菟道遺跡谷下り地区遺物3
- 写真図版54 菟道遺跡谷下り地区遺物4

写真図版55 菟道遺跡谷下り地区遺物 5
写真図版56 菟道遺跡谷下り地区遺物 6
写真図版57 菟道遺跡谷下り地区遺物 7
写真図版58 菟道遺跡谷下り地区遺物 8
写真図版59 菟道遺跡谷下り地区遺物 9

写真図版60 菟道遺跡谷下り地区遺物10
写真図版61 菟道遺跡谷下り地区遺物11
写真図版62 菟道遺跡谷下り地区遺物12
写真図版63 菟道遺跡谷下り地区遺物13
写真図版64 菟道遺跡谷下り地区遺物14

挿 図 目 次

- 第1図 開発の位置と範囲
第2図 1号墳の移築保存状況
第3図 昭和43年の菟道遺跡遠景
(二子山古墳より北西を望む)
第4図 古代の地形と主要遺跡概略図
第5図 宇治橋碑(橋寺)
第6図 三室戸寺
第7図 二子山古墳測量図
第8図 隼上り3号墳石室図
第9図 大鳳寺金堂跡
第10図 隼上り1号窯
第11図 乙方遺跡の発掘状況
第12図 昭和43年の菟道の景観
第13図 試掘1トレンチ平面図
第14図 周濠内の地区割
第15図 周濠埋土土層図1
第16図 周濠埋土土層図2
第17図 形象埴輪片写真1
第18図 形象埴輪片写真2
第19図 形象埴輪片写真3
第20図 ヘラ記号拓本
第21図 金環実測図
第22図 石器剥片・未成品実測図
第23図 SK0009土層図
第24図 SK0012土層図
第25図 出土土器実測図
第26図 SB2001実測図
第27図 SB2002・2003実測図
第28図 SD2008・2009土層図
第29図 SK2005検出状況
第30図 SK2005土層図
第31図 SB3002実測図
第32図 SB3003実測図
第33図 SD3006・3007土層図
第34図 SD3008・3009土層図
第35図 SD3009実測図
第36図 菟道谷下り1号墳石室実測図
第37図 菟道谷下り1号墳墳丘土層図
第38図 菟道谷下り2号墳石室実測図
第39図 菟道谷下り3号墳石室実測図
第40図 SB4014実測図
第41図 SD4011・4005合流点, SD4012土層図
第42図 SX5005実測図と鉄釘出土高表
第43図 SK2005・SB2001・2002出土土器実測図
第44図 SB3002・4014出土土器実測図
第45図 菟道谷下り1号墳石室・前庭部出土土器実測図
第46図 菟道谷下り1号墳盛り土内出土土器実測図
第47図 菟道谷下り1号墳石室・周濠内出土遺物実測図
第48図 2号墳金環実測図
第49図 菟道谷下り3号墳石室内出土土器実測図

- | | | | |
|------|-------------------------|------|------------------------|
| 第50図 | SX4024出土土器実測図 | 第63図 | 陶棺の類例 |
| 第51図 | 須恵器の細部形態分類図 | 第64図 | 菟道門ノ前古墳陶棺A復元図 |
| 第52図 | 土師器器種分類表・分類図 | 第65図 | 遺構変遷図1 |
| 第53図 | 須恵器器種分類表・分類図 | 第66図 | 遺構変遷図2 |
| 第54図 | 施釉手法分類図 | 第67図 | 遺構変遷図3 |
| 第55図 | SB3003出土土器実測図 | 第68図 | 東西溝の変遷過程 |
| 第56図 | 溝出土土器実測図 | 第69図 | 遺構変遷図4 |
| 第57図 | 土壙出土土器実測図 | 第70図 | 遺構変遷図5 |
| 第58図 | 金属製品実測図 | 第71図 | ウジの首長墳とその眺望 |
| 第59図 | 隆平永寶拓本 | 第72図 | 南山城における地域大首長の変動
模式図 |
| 第60図 | 大鳳寺跡出土軒丸瓦と菟道遺跡出
土軒丸瓦 | 第73図 | 菟道地区の遺跡の消長 |
| 第61図 | 磚実測図 | 第74図 | 大鳳寺付近地形図 |
| 第62図 | 形象埴輪の出土状況 | 第75図 | かげろう石 |

第I章 序 言

第1節 発掘調査の経過

この報告書は、平成6・7年度に宇治市教育委員会が睦備建設株式会社より委託を受け実施した、^{とどうもん}菟道門ノ前古墳と菟道遺跡の発掘調査成果を収録したものである。発掘調査は、平成6年度に門ノ前地区、平成7年度は^{たにさか}谷下り地区において実施した。

菟道遺跡は、大字菟道一带に広がる集落遺跡で、行政的には現在、東西約500m、南北約800mの範囲を埋蔵文化財包蔵地としている。¹⁾ 現在まで、菟道遺跡の本格的な発掘調査は行われておらず具体的な内容には不明な点が多いが、遺跡範囲に展開する水田・畑等の耕作地において古墳時代から奈良時代の土器が採集されており、概ね当該期の集落跡として理解されてきた。

また、菟道門ノ前古墳は、平成6年度の菟道遺跡発掘調査で初めて確認された古墳であり、字名をとってこのように命名した。

従来、集落跡として認識されてきた菟道遺跡は、今回の発掘調査が示すように、実体としては集落跡のみならず、前方後円墳や後期古墳群あるいは中世墓など多様な種類の遺跡が累積しているものであることが理解されるようになった。したがって、これら菟道地区の平野部に重層的に展開する遺跡群を総称する場合は「菟道遺跡群」と呼ぶこととしたい。

A. 平成6年度の経過

調査に至る経過 本件の発掘調査は、睦備建設株式会社より平成6年2月21日付で提出された、宇治市菟道門ノ前28-1・29-1・30-1・28-6・31-1・41・37-1・39・40・42・42-3に計画された宅地造成・共同住宅建設に伴う文化財保護法第52条2の届出に対応するものである。当該計画地は菟道遺跡に該当し、工事計画上、発掘調査の対象となる遺跡の現状変更部分は、開発予定面積7939.90㎡のうち、マンション建設用地5037㎡、新設道路部分921.49㎡、道路拡張部分463.17㎡であった(第1図)。発掘調査の手続きとしては、まず試掘調査により当該計画地での遺構の有無・粗密を確認した後、効果的に発掘調査を行うこととした。

試掘調査の経過 試掘調査は対象地内に4か所(計500㎡)の試掘トレンチを設定した。図版3に示したように西から順に試掘1から4トレンチまでとし、平成6年4月18日から重機掘削による表土除去を開始した。その後、試掘2トレンチで埴輪類の出土を確認した。さらに5m東側の試掘3トレンチにおいても埴輪類が出土し、古墳周濠らしき輪郭も検出された。この段階で、当該部分に削平された古墳が埋没していることが確定的となり、試掘4トレンチからは奈良・鎌倉時代の遺物が検出され、同時代の集落が存在することも判明した。

この結果に基づき、4月下旬段階で面的な発掘調査へ移ることとした。まず埋没した古墳が発見された試掘2・3トレンチについては、古墳の全容が確認できる範囲までの拡張を実施すること、古代から中世の集落が確認された試掘4トレンチでは、トレンチを設定した畑部範囲まで発

第1節 発掘調査の経過

掘面積を拡張して遺跡の保護を図ることとした。なお、試掘1トレンチでは顕著な遺構を検出できなかったため、試掘段階で調査を終了した。

発掘調査の経過と実施方法 発掘調査地の名称は、試掘2・3トレンチを拡張して一本化した部分を古墳調査区、試掘4トレンチが拡大し発掘調査地となった部分をM-IVトレンチとした。発掘調査は試掘から継続して行った。作業手順は、重機による表土排除の後、人力による遺構検出と遺構掘削を行い、完掘後に写真測量を実施した。発掘面積は計1856㎡である。

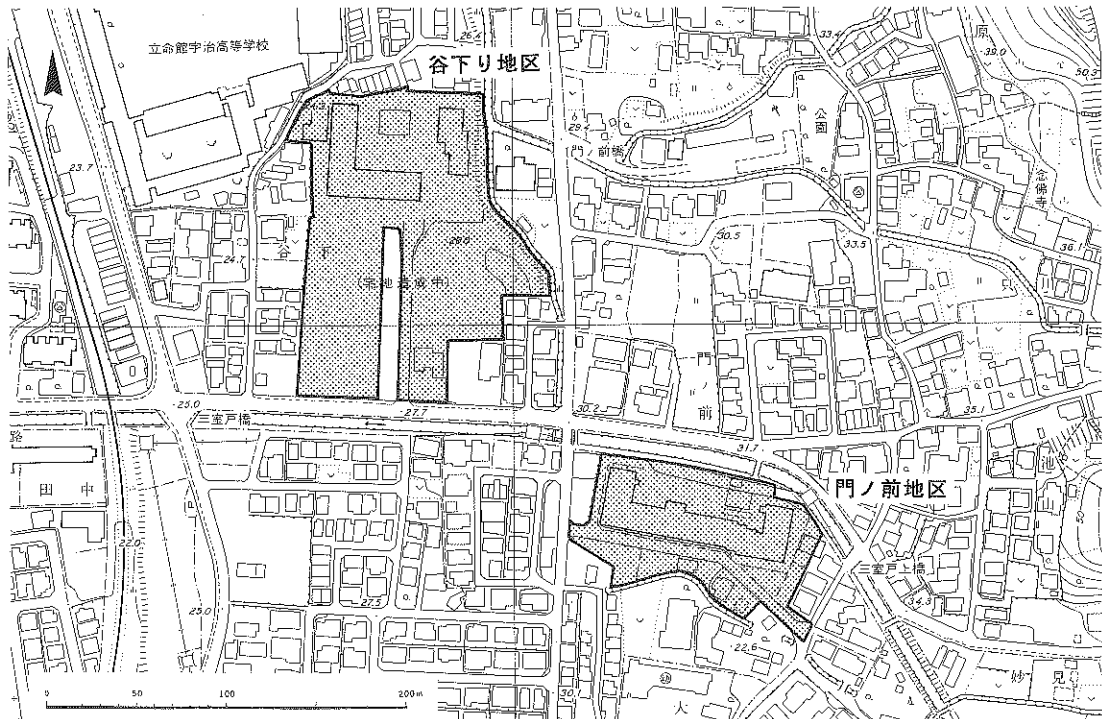
発掘調査実施に伴う作業の委託については、土砂除去作業を発掘建設リンクへ委託し、発掘調査遺構の国土座標に基づく写真測量については日開調査設計コンサルタントへ委託した。測量成果品の縮尺は50分の1とした。なお遺構の実測と土層断面の作図については、主に担当者と調査補助員がこれにあたった。写真撮影については、中判のリバーサル、35ミリでは白黒・リバーサル・カラーの各フィルムを使用した。

発掘調査が概ね終了に近付いた9月20日に、報道各紙に発掘調査成果の公表を行い、9月23日に一般市民に対して現地での発掘調査説明会を開催した。その後、測量・断ち割りなどの補足作業を行い、10月4日に現地での発掘調査作業を完了した。

新発見古墳の名称 この発掘調査で新たに発見された前方後円墳については、地域での通称字名²⁾を採用し、「菟道門ノ前古墳」と呼ぶこととした。ただし「門ノ前古墳」と呼ぶことも特に妨げない。

B. 平成7年度の経過

調査経過と実施方法 本件の発掘調査は、睦備建設株式会社が平成7年2月21日付で文化財保護法第52条2の規定に基づき届け出た、宇治市菟道谷下り22-1他2筆、19-1他22筆における宅地



第1図 開発の位置と範囲

造成・共同住宅建設計画に伴うものである。大枠としては前年からの一連の開発計画である。

開発予定面積15620.05㎡のうち、マンション建設用地13414.75㎡、新設道路部分706㎡を遺跡の現状変更に伴う対象地と判断し、当該計画に合わせて4か所のトレンチを設定した。なお、工事計画上、遺跡が温存される現状変更を伴わない範囲については特に発掘調査を実施しておらず、将来、この部分で掘削工事が計画された場合は文化財保護法による届出が必要である。

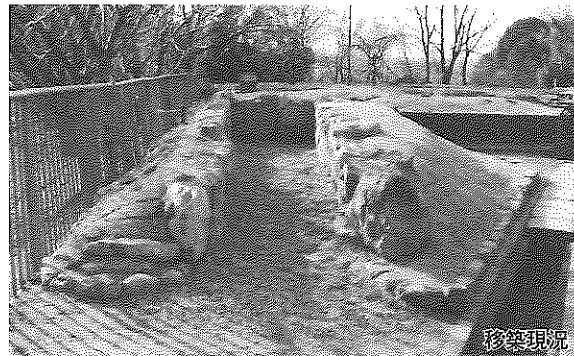
発掘調査は平成7年4月11日から開始した。作業手順は、重機による表土排除の後、人力による遺構検出と遺構掘削を行い、完掘後に写真測量を実施した。調査終盤の平成7年10月13日に報道発表を行い、10月15日に現地説明会を開催した。その後、測量・断ち割りなどの補足作業を終え、11月20日現地調査を完了した。発掘調査面積は5600㎡である。

遺構測量については国土座標に基づく写真測量と100分の1および50分の1平面図作成を株式会社アイシーに業務委託し、個別の遺構実測・土層断面図等の作図と中判のリバーサル、35ミリの白黒・リバーサル・カラーの発掘遺構写真撮影については担当者と調査補助員が行った。なお、発掘調査に係る土砂除去作業については事業者よりの直接提供を受けた。

新発見古墳の名称 本調査で新たに確認した古墳群は「菟道谷下り古墳群」と呼ぶこととした。なお「谷下り古墳群」と略称することも特に妨げない。

菟道谷下り1号墳の移築保存 今回発見した3基のうち遺存状態が良い菟道谷下り1号墳石室については、市立三室戸小学校へ移築した。

三室戸小学校は、当該調査地一帯を校区としており、学校当局・教育委員会施設課・学校教育課と協議する中で、菟道谷下り1号墳石室を校内に移築し郷土学習教材として活用することとなった。移築場所は正門前通路に沿った一角である。移築方法は、石室石材に実測図に基づき番号を付した後、現地で慎重に解体し、移築場所へ搬入の後に再現した。安全のため石室石材はコンクリートで固定し周囲には盛り土を行い芝張りとした。また、移築工事完成後の11月1日には、5・6年生110名を対象とした課外授業を移築古墳で開催した。なお翌年3月に、古墳の概要を説明したステンレス製の説明板を設置した。



第2図 1号墳の移築保存状況

C. 報告書刊行の経過

整理作業については発掘調査と併行しつつ一部実施したが、基本的には平成8・9年度で一括して整理・報告書作成作業を実施した。前述のとおり、門ノ前地区と谷下り地区の発掘調査は、形式上別々の届出に基づくものであるが、実際上は一連の開発行為に対応した発掘調査となっており、これらの成果をまとめて一冊の報告書として刊行することとしたものである。また、本書収録の遺物写真に関しては寿福滋氏に記録用大判撮影を委託した。

D. 発掘調査の体制

発掘調査の体制は以下の通りである。

(発掘主体者) 宇治市教育委員会

(発掘責任者) 宇治市教育委員会 教育長 岩本 昭造 (平成6年4月～平成9年10月)
同 谷口 道夫 (平成9年10月～)

(発掘担当者)

同 社会教育課 文化財保護係 杉本 宏
同 荒川 史
同 浜中 邦弘
同 吹田 直子 (平成7年4月～)

(発掘事務局)

同 参 事 池田 正彦 (平成6年4月～平成8年3月)
同 岡本 茂樹 (平成8年4月～)
同 社会教育課 課 長 堀井 健一 (平成6年4月～平成7年3月)
同 細川 芳郎 (平成7年4月～平成8年3月)
同 小西 吉治 (平成8年4月～平成9年10月)
同 文化財保護係長 吉水 利明
同 主 任 加藤きみ江 (平成6年4月～平成7年3月)
同 日原 洋子 (平成7年4月～)

(調査参加者) 福島孝行、堀大介、西村恵祥、宮崎一弥、新井朋哉、時実奈歩、小林俊之、坂本浩一、駒山陽子、河村亜由美、中井淳史、内田真雄、藤井幸司、小川裕紀、中村幸代、西田倫子、畑陽子、久保千恵子、志村みどり、山下由香、足立千春、水口典子、坪井啓子、佐野和恵、宮川千代実、今西礼子、和田妙子、安井麻里、桑原智子、北沢英子。

(ご協力いただいた方々) 本発掘調査中に下記の方々から専門的なご指導・ご教示ならびにご協力をいただきました。記して感謝を表します。敬称・ご所属は略させていただきます。

赤松一秀、浅見恵理、安藤信策、伊野近富、上原真人、内田好昭、大沢伸啓、鐘方正樹、河内一浩、小泉裕司、古閑正浩、柴明彦、杉原和雄、杉山晋作、鷹野一太郎、高橋美久二、高橋克壽、辰己和弘、西山良平、橋本清一、菱田哲郎、丸川義広、森下衛、森下章司、山本雅和、和田晴吾、京都府立山城郷土資料館、菟道自治会、三室戸小学校。 (吹田)

第2節 調査日誌抄

A. 平成6年度

- 4/18 調査地西側道路に面する部分にフェンスバリケードを立てる。トレンチ設定。調査区内で比較的広い田畑に4カ所設定した。西から1、2、3、4トレンチとする。1～4トレンチは、東西5m×南北30mとした。
- 4/19 重機により1トレンチから表土除去。耕作土(灰褐色土)・床土(黄褐色土)の下で、地山(淡黄色土)を検出。
- 4 2トレンチ：重機掘削。ピット・溝を地山上で検出。溝内からは少量の埴輪片が出土した。そこでトレンチ東側を約2m拡張すると、大量に埴輪が出土した。さらに溝に沿って、東側に拡張することとする。
- 4 3トレンチ：重機掘削。トレンチ北側で古墳くびれ部と考えられる輪郭を検出。その周囲から多量の形象埴輪が出土した。これにより削平古墳が存在する事が確定的となった。
- 4 4トレンチ：重機掘削。もう1基古墳が存在する事も予想に入れ掘削を開始した。しかしここでは、飛鳥時代から中世を中心とした時期の遺物・遺構を検出した。引き続き、トレンチを東西9m南北20mの範囲で拡張した。
- 5/2 1トレンチ：落ち込み状の遺構を検出。遺物が無いため時期不明。
- 3トレンチ：古墳くびれ部の南側を掘削。大量の埴輪・土器片が出土する。少量の鉄器も出土した。鉄鏃のようである。また、周濠内に人頭大の角礫の集合あり。横穴式石室で使用されたものか。埴輪はその上に落ち込んでいる様子で出土。トレンチ南半分では、壁立て・遺構面精査。トレンチの北側に平板測量用の仮杭を打つ。
- 5/6 1トレンチ：壁立て・精査及び、遺構掘削。
- 3トレンチ：くびれ部南側掘削。遺物出土状況を写真撮影。また、古墳及びトレンチ内を平板実測(1/100)。
- 5/17 1トレンチ：遺構面精査及び、トレンチ全景と部分写真撮影。
- 2トレンチ：先の表土除去で、トレンチ東側に古墳の周濠部分が延長するものと考えられたため、重機による拡張を開始する。古墳北側の埴輪を検出、円弧を描く輪郭のため前方後円墳と分かる。
- 5/18 3トレンチ：トレンチを中心に、古墳の南側輪郭を検出するため西側・東側へと重機による拡張を開始する。
- 4トレンチ：壁立て・遺構面精査作業。
- 5/19 4トレンチ：遺構の掘削開始。
- 5/24 4トレンチ：途中経過を写真撮影。後円部中央の杭を基準杭として、東西に10m間隔で測量杭を打つ。
- 5/25 1～4トレンチにかけて、測量杭を打つ。
- 1トレンチ：平板実測(1/50)開始。
- 5/31 4トレンチ：平板実測(1/50)開始。
- 6/3 古墳周辺のトレンチ配置を平板実測(1/200)。
- 6/7 4トレンチ：SX0001の輪郭を検出するため、北側を拡張。
- 6/15 4トレンチ：SX0001の北東部で輪郭を検出。
- 6/16 1トレンチ：平板実測(1/50)終了。
- 4トレンチ：SK0012の輪郭を検出するため、西側をさらに拡張。
- 古墳東側の壁立て。
- 6/17 古墳の遺構面精査作業を行う。埴輪肩と思われる輪郭を検出。
- 4トレンチ：SK0012から、飛鳥時代の杯蓋5点以上、杯身1点が一括投棄された状況で出土。完形のものが多く含まれている。瓦器



門ノ前古墳発掘風景



石見形埴輪出土風景

第2節 調査日誌抄

- も出土するが、これは攪乱による混在と考えられる。後に、上層遺構に伴う遺物であることがわかる。
- 6/22 1トレンチ：トレンチ全体の標高を入れる。
4トレンチ：遺構の写真撮影。SX0001の南側を掘削。
3トレンチ：東側拡張区に排水溝を掘る。
- 6/23 4トレンチ：SX0001の南側の不明遺構を掘削したところ、溝であることが判明する。円礫配石遺構SX0010の南側の溝は、SX0001に先行して、直行する流路であることが判明する。
- 6/24 4トレンチ：SX0001、SX0001の南側大溝は、繋がったため両者をSX0001にした。
トレンチ全体を精査し、写真撮影。
- 6/27 1トレンチ：平安時代の遺物が少量出土した。しかし、他のトレンチとの関連が無いと、古墳の調査と4トレンチの調査に重点を置くため、このトレンチの調査は終了する。
古墳全形をだすために、全面精査を行う。
墳丘後円部の輪郭を検出できたが、前方部は三本の溝により明確に輪郭を検出できない。
前方部北西周濠内を一部精査する。
- 6/29 墳丘上を南北に走る溝を掘削する。
4トレンチ：4m間隔の割り付けを行う。
- 7/1 古墳北側の周濠の輪郭を明確に検出するために、精査し、順次掘削を行う。
- 7/5 古墳周濠を地区割りしていく。周濠北東部よりⅠ区東・西、Ⅱ区東・くびれ・中央・西、Ⅲ区、Ⅳ区、Ⅴ区西・くびれ・東、Ⅵ区、Ⅶ区として、設定する。
1トレンチの調査は終了し、2・3トレンチは古墳の範囲に取り込まれたため、以後は設定された地区割りを中心に記述していく。
周濠Ⅰ区西、Ⅱ区東の掘削を行う。
- 7/7 4トレンチ：SK0012の平面実測(1/20)。
- 7/8 周濠Ⅱ区東、精査作業及び写真撮影。
- 7/11 4トレンチ：SK0012土層断面図(1/10)を作成。周濠Ⅱ区東～くびれ内で検出の円筒埴輪片を取り上げる。形象埴輪片の位置を平板図に落とす(1/100)。
- 7/12 4トレンチ：SK0012遺物取り上げ。
周濠Ⅱ区東～くびれの形象埴輪片に標高を入れて、取り上げ。
- 7/13 4トレンチ：SK0012完掘。トレンチ全体の精査作業をし、測量のための空撮を行う。
周濠Ⅰ区東を掘削。
- 7/15 4トレンチ：各遺構実測、遺物取り上げ。
周濠Ⅰ区～Ⅱ区の掘削。
- 7/18 周濠Ⅰ区東を掘削。近世の遺物が出土した。溜め池か。そこから、北に伸びる溝を検出。しかし、調査区外になるので、性格は不明。
- 7/19 4トレンチ：SX0001南側土層断面を実測。
再び重機によりトレンチ北側を拡張する。土壌を一つ検出。
- 7/20 周濠Ⅰ区東部分を重機掘削。
周濠Ⅱ区くびれ部を中心に多量の円筒・形象埴輪片及び須恵器片が出土。
周濠Ⅱ区西～中央の輪郭を精査にて確認し、午後から掘削を開始。
- 7/21 多量の埴輪片が出土したため、当初予定していた写真撮影を延期。
- 7/22 埴輪片出土地点を平板測量し、それぞれの標高を入れる。午後から精査を行い、夕方に写真撮影を行う。
- 7/25 周濠Ⅲ区精査作業及び掘削。プレハブ設置。
- 7/26 周濠Ⅱ区くびれ部の埴輪・須恵器のうちNo6～19までを取り上げる。
- 7/28 周濠Ⅱ区くびれ部～西側の遺物検出を行う。
周濠Ⅱ区中央部の掘削・精査を行う。
周濠Ⅲ区北側・南側の精査を行う。
- 8/1 周濠Ⅱ区中央部の埴輪片の標高を入れ、取



門ノ前古墳発掘風景



馬形古墳出土風景

- り上げる(No32まで)。
- 8/3 周濠II区、前方部の輪郭を検出し、掘削。
周濠II区西部を掘削。
周濠III区～IV区の近世の溝を掘削。
- 8/4 周濠I区からIV区間の平板実測(1/100)。
- 8/5 周濠II区写真撮影。遺物の取り上げを行う(No34,39,40,41)。
- 8/8 周濠II区中央・III区・IV区、底を確認。
周濠II区西部、遺物取り上げ。
- 8/9 周濠II区西・中央部完掘。
周濠VII区精査。
- 8/10 周濠II・III区、土層断面図(1/20)が完成。
- 8/11 周濠VII区掘削。ここでは周濠は考えていたより浅く、30cm～40cmで底に達した。削平されているようである。
- 8/12 周濠VII区、墳丘側に1m間隔でピット検出。
スクレーパー・フレイク出土。
- 8/13 先日のスクレーパー・フレイクの位置を平板実測し取り上げる。
- 8/19 周濠VII区の遺物(No46～48)を平板実測し、標高を入れて取り上げる。
周濠VI区掘削。
- 8/22 周濠V区掘削。V区～VI区セクション東壁に沿ってサブトレンチを設定。
- 8/23 周濠V区東掘削。赤色の土師器片出土。
- 8/24 周濠I区・V区～VII区まで、遺物の位置を平板実測。
- 8/31 周濠V区くびれ部掘削。周濠V区西部掘削。原形を比較的保つ形象埴輪が出土。周濠V区東部の遺物を平板実測(1/100)し、標高を入れた後、取り上げ(No52～56)。
- 9/1 周濠V区東部・くびれ部掘削。馬形埴輪頭部出土。精査作業し、写真撮影。
周濠V区西部掘削。サヌカイトらしきチップ・棒状不明鉄製品・中世の土師皿出土。
- 9/2 周濠V区くびれ部、遺物の平板実測、標高を入れた後、取り上げを開始。
- 9/5 周濠V区くびれ部より、馬形埴輪脚部・人物埴輪顔部出土。
周濠IV区南・北部掘削。
- 9/7 周濠III区の遺物を平板実測し、標高を入れた後、取り上げ。
周濠V区西部掘削及び、写真撮影。
- 9/8 周濠V区西部の遺物を平板実測し、標高を入れた後、取り上げ。
- 9/9 古墳後円部上面、精査作業。
- 9/13 古墳前方部上面を精査し、遺構の掘削を始める。平板実測も行う。
- 9/14 周濠V区～VII区までの、周濠土層断面を実測。周濠VI区の遺物を平板実測する。前方部西部の遺構掘削及び精査作業。
- 9/19 前方部全面精査、遺構掘削。写真撮影。
- 9/20 午前中、古墳全区精査作業し、午後から墳丘上の遺構掘削。SK01より、金環・鉄刀片出土。前方部前面の周濠の輪郭を検出。
午後、記者発表を行う。
- 9/21 マンション建設に伴う地鎮祭が行われる。
- 9/22 周濠内の各あぜを除去。遺物取り上げ。
- 9/23 現地説明会を開催。
- 9/27 墳丘上SK01の土層(1/20)実測。写真撮影。
- 9/28 墳丘上SK02の土層(1/20)実測。
- 9/30 墳丘上に東西南北の断ち割りを入れる。SX01・03のあぜを除去。
周濠I区西部の溝を掘る。
- 10/3 周濠I区西の溝を完掘。平板実測(1/50)。
墳丘上の南北の断ち割り壁の実測(1/10)。
- 10/4 墳丘上の東西の断ち割り壁の写真撮影。SX02の土層断面の写真撮影。
墳丘上の遺構を掘削し、続いて平板実測(1/100)を行う。調査完了。



現地説明会風景



記念スナップ

第2節 調査日誌抄

B. 平成7年度

4/11 調査開始

4/13 Iトレンチ：昨日に続き、重機により床土の除去作業を行う。東側広範囲にわたって、黒褐色土（SK1001）を確認。ここには人頭大の礫が詰まっており、その下層からは土師器片と須恵器片が出土する。

IIトレンチ：昨日に続いて遺構面精査作業を行う。トレンチ北側より多数の柱穴と東西に走る溝を確認。

4/17 Iトレンチ：西側は東側に比べて1m程低くなっている。また、西側より近世陶器片が出土。東側には集礫を確認。

IIトレンチ：南側より遺構面精査作業開始。トレンチ中央の溝を掘削し始める。

4/18 Iトレンチ：重機掘削終了。トレンチ東側の集礫遺構掘削。西側より遺構面精査作業開始。トレンチの北東部分は青灰色粘土層になっていて、ここから近世陶器が1点出土。

4/20 Iトレンチ：東側を遺構面精査。トレンチ中央のあたりから、南北と東西に伸びる黒褐色土（溝）を検出。また、トレンチ北中央より土壌を検出。この辺りは黒褐色系と青灰色系の粘質土が混ざっており、土壌内部から杭を検出した。木製の桶と思われる物の底部が出土。トレンチ北東部分より元祐通寶が出土。

4/21 地区設定杭の設置。Iトレンチ内に10m間隔で測量杭を打った。

Iトレンチ：北壁附近の土壌を掘削。土壌の中央を南北に伸びる溝が入っていて、この片側には木杭が、溝と平行に並んでいる。トレンチ東側は、精査作業を行う。東側中央の断ち割りより西の部分は、多量のマンガンを含む黒褐色土である。また、北西部より柱穴・ピットを含む遺構を検出。

4/24 Iトレンチ：東側を1段下げて掘削、精査。

4/25 Iトレンチ：東側の赤褐色土層を掘削するが、さらに下層の灰色砂質土も掘削する。この部分は、北西に下がる地形であることが判明。

4/27 Iトレンチ：10m間隔の地区割りを行った。東西にA、B、C…南北に1、2、3…と設定する。H-4区の暗褐色土層（SK1001）の掘削を行う。ここからは、人頭大の礫に混じり軒平瓦・土師皿・完形の緑釉皿が出土。

4/28 Iトレンチ：H-4区の礫群横の暗褐色土層を昨日に引き続き掘削。層中より、土師皿出土。しかし、遺構の性格は不明である。また、新たに礫群を検出。H-3区の南側の木杭群（青灰色砂質土層）の部分掘削。青灰色の砂の上層（暗灰色粘質土層）は掘れると思われる。また、青灰色の砂は北へ向かって伸びており、恐らく北側の青灰色粘質土層と、同一の層と思われる。

5/8 Iトレンチ：H-3区の暗褐色の下層から礫群（SX1002）を検出し、北側に広がりを見せている。庭園遺構か？礫群の下層は青灰色土層である。I-3区の北側にある溝を掘削。この中に、西に向かってもう一本の溝があり、この溝はH-3区南西付近で直角に曲がり、北へ流れている。

5/9 Iトレンチ：先日の直角に曲がっている溝の上層から、礫に混じって木片が出土。また、トレンチ北側の礫群下層から、大鳳寺と同範とみられる軒平瓦が出土。

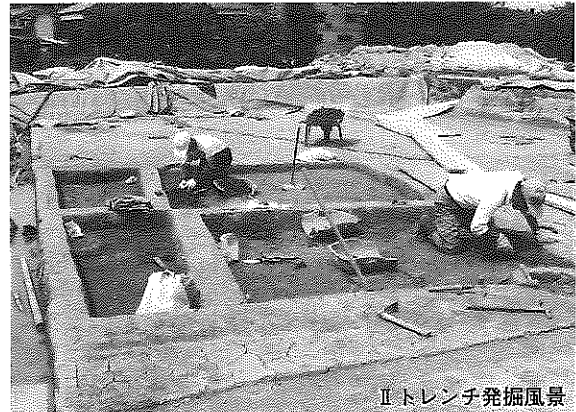
5/18 Iトレンチ：H-4区東側の土壌を掘削。写真撮影・平板実測(1/100)を行う。

5/20 Iトレンチ：H-4区の黒褐色土と礫、遺物の集中している所をSK1001とする。墓か。昼から掘削を行う。

5/22 Iトレンチ：H-3区～J-3区にかけての溝の平板実測(1/50)を行う。SK1001内北東



Iトレンチ発掘風景

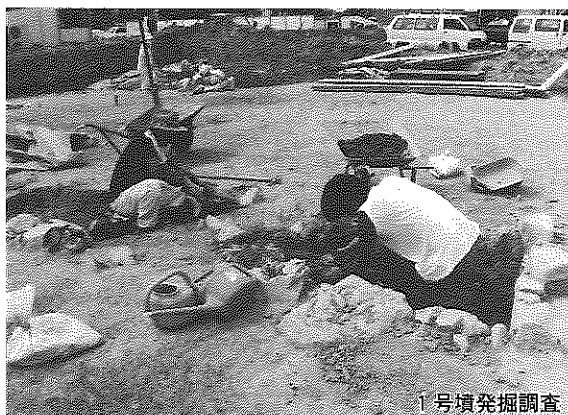


IIトレンチ発掘風景

- 側暗褐色土上層から古銭（隆平永寶）数枚が出土。また、南側からは木炭の塊が出土。
- 5/23 Iトレンチ：SK1001内の古銭を写真撮影。
下層は暗褐色の砂礫層となっている。
IIトレンチ：北側より遺構面精査を行う。
- 5/25 Iトレンチ：SK1001北側の礫群中から、石斧・骨が出土。
IIトレンチ：遺構の掘削を始める。
- 5/26 IIトレンチ：北側に2棟の竪穴式住居を検出。掘削開始。西側の住居は、周辺に溝がある。
- 5/29 IIトレンチ：SB2001は、15cm掘削した所で、床面を検出。また、中心にはほぼ正円形の炉らしき遺構を検出した。この上層には多量の炭を含んでいる。SB2002は、一辺が6m程で、5cm掘削したところで床面を検出。また、南壁付近で土器片が出土。
- 6/2 IIトレンチ：SB2001北壁にカマドを検出。周辺は焼土である。トレンチ中央のSD2006・2007を掘削し始める。大量の土器片が出土。また、トレンチ内に10m間隔の杭を打つ。
- 6/6 IIトレンチ：SD2007内西側より、ほぼ完形の須恵器甕が出土。平板実測(1/100)。
- 6/7 IIトレンチ：SD2008・2009を掘削し始める。SD2006中層より下から、完形の長胴甕が出土。
- 6/14 雨天のため、遺物洗浄作業をする。
IIトレンチ：SK2005を掘削。
- 6/19 Iトレンチ：写真撮影の準備のため、精査。
IIトレンチ：中央部の礫群・黒褐色土の部分に断ち割りをいれて、底部を検出する。SK2005の土層断面図を作成。
- 6/20 IIトレンチ：SB2001の土層断面図を作成。
- 6/21 IIトレンチ：SB2001のあぜの除去と、SB2002の土層断面図を作成。
- 6/26 午前中は、空撮の準備。昼過ぎから、ラジコンヘリを使って、撮影を行う。
- 6/28 IIトレンチ：中央部、北部を1m間隔で釘

を打ち、平面実測(1/20)開始。

- 7/7 IIIトレンチ：重機掘削開始。遺構面精査作業をし、竪穴式住居跡2棟、溝数本を検出。
- 7/10 IIトレンチ：SB2001・2002の標高を入れる作業を行い、終了する。
IIIトレンチ：掘立柱建物跡1棟検出。
- 7/24 IIIトレンチ：平板実測(1/100)を行う。中央部の溝2本、掘削し始める。IIトレンチの溝と、対応するようである。
IVトレンチ：重機掘削開始。
- 7/25 Iトレンチ：再び重機により、北側を拡張する。20cm程の礫が敷かれている様子で検出。川原寺系軒丸瓦出土。精査し写真撮影を行う。
- 7/26 Iトレンチ：重機による埋め戻し。
IIIトレンチ：遺構を掘削し始める。
IVトレンチ：壁面精査を行う。
- 7/28 IIIトレンチ：SB3002・SD3006掘削開始。
- 7/31 IIIトレンチ：SD3008・3009・ピット掘削。遺物は、多量に出土している。特に、SD3009からは、移動式竈などが出土している。
- 8/1 宇治高校前の公園にある水準点から、D-12までレベル移動を行う。
- 8/9 IIIトレンチ：SD3006・3007、写真撮影。SD3006からは、ほぼ完形の須恵器長頸壺が出土。SB3002、平面実測(1/20)。
- 8/11 IIIトレンチ：SD3006、土層断面図作成。
- 8/17 IIIトレンチ：SB3002土層断面図(1/10)を作成し、写真撮影。トレンチ北側に検出されたピット群を掘削開始。建物跡は、まだまとまらず。SD3008・3009、平板実測。
- 8/23 IIIトレンチ：SB3003掘削。少量の炭検出。
- 8/24 IIIトレンチ：SK3019と、ピットの平板実測。
- 8/25 IIIトレンチ：SK3019の断ち割りをを行う。
- 8/29 IIIトレンチ：SK3019から礫出土。性格不明。
- 8/30 IIIトレンチ：SD3009東部拡張。写真撮影。
IVトレンチ：猛暑。作業用テントを張る。



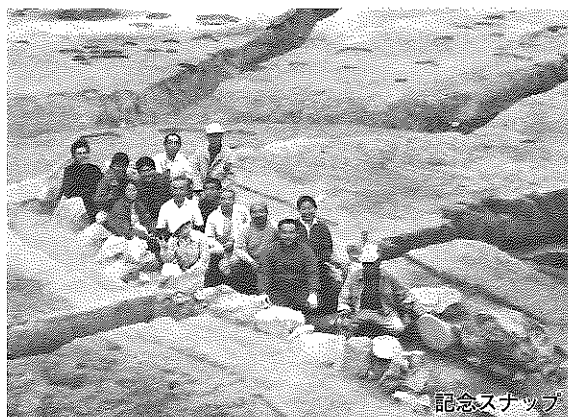
1号墳発掘調査



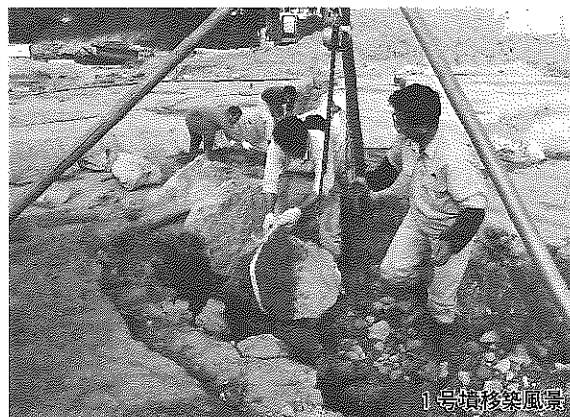
IVトレンチ発掘風景

第2節 調査日誌抄

- 8/31 IVトレンチ：遺構面精査と、排水溝を掘る。
- 9/4 IIIトレンチ：SB3003を1m間隔で平面実測(1/20)。トレンチ北側の柱穴群まとまってくる。全部で掘立柱建物跡を7棟以上検出した。
- 9/6 IIIトレンチ：SB3003の標高を入れる。
IVトレンチ：南側の1段高い所に、30~50cmの石が並んで出土。古墳の石室である。
- 9/7 IIIトレンチ：SB3003の土層図(1/20)作成。
- 9/11 IVトレンチ：3基の古墳がある事が判明。掘削開始。2号墳より、金環出土。1号墳羨道部に20×40cmの断ち割りをいれる。須恵器杯蓋1点出土。
- 9/13 IIIトレンチ：SB3002平板実測。
- 9/14 IVトレンチ：3号墳周濠有無確認のための精査。1号墳石室内15cm掘削した時点で、写真撮影。玄室の中の礫だまりから、白鳳期の瓦出土。また少量の鉄製品(刀子?)も出土。
- 9/21 IIIトレンチ：全面精査作業し、写真撮影。
- 9/26 IIIトレンチ：ラジコンヘリによる、空撮。
IVトレンチ：1号墳石室内の浮いている石を取り除き、写真撮影を行う。トレンチ北側は、重機掘削を行う。平板実測(1/100)開始。
- 9/28 IVトレンチ北側に、ピット群検出。掘削していくが、建物としてまとまらず。1号墳前庭部掘削。SX5001掘削。
- 9/29 IVトレンチ西側に、包含層検出。30cm前後の礫が帯状に集積している。写真撮影。SX5001付近を拡張するが、水が湧いてくるため、顕著に輪郭が現れない。
- 10/2 IVトレンチ：SD4012掘削。
- 10/3 IVトレンチ：SD4012内より帯金具出土。
- 10/5 IVトレンチ：SD4012土層図作成。
- 10/9 IVトレンチ：1号墳の周濠検出。
- 10/11 IVトレンチ：SD4011・4013掘削。
- 10/12 IIIトレンチ：全体を精査する。
IVトレンチ：1号墳周濠を重機にて掘削を
行う。大量の須恵器(甕・平瓶・長頸壺)群
出土。この周濠より、西に伸びる溝を検出。
明日の記者発表の準備。
- 10/13 IVトレンチ：1号墳周濠内に出土した、須
恵器群の位置を平板図に落とす。
午後から記者発表を行う。
- 10/15 現地説明会。1部・午前10時30分、2部・
午後2時から開始。総計220人の参加を得る。
- 10/17 IVトレンチ：1号墳周濠土層図(1/10)作成。
トレンチ北側を部分的に写真撮影。
- 10/18 IVトレンチ：2号墳周濠検出。掘削開始。
SX5001、東壁土層断面図作成。1号墳周濠1
区須恵器群平面実測(1/10)。
- 10/19 IVトレンチ：SD4011、4005の合流点の土
層断面図作成。SD4002より、金環出土。
- 10/20 IVトレンチ：1~3号墳平面実測のため、
1m間隔で糸を張る。順次実測(1/20)開始。
- 10/26 IVトレンチ：重機により1号墳周濠掘削。
墳丘土層断面図作成。また40cm程下層から、
竪穴住居(SB4014)を検出。土器片や焼土が
出土。1号墳前庭部より碧玉の管玉1点出土。
- 10/30 IVトレンチ：1~3号墳の石室立面図作成。
- 10/31 IVトレンチ：SD4009掘削。1号墳周濠から、
西に伸びている溝を合計4本検出。2・3ト
レンチの溝に繋がりそうである。排水路か。
- 11/1 IVトレンチ：SD4005掘削開始。全面精査。
- 11/7 IVトレンチ：ラジコンヘリによる写真撮影。
- 11/8 IVトレンチ：1号墳墳丘上に、中世墓SX50
05の輪郭を検出し、掘削開始。写真撮影した
後平面実測(1/10)。内部に釘が残存している。
また、ほぼ完形の白磁碗と土師皿5枚出土。
- 11/9 IVトレンチ：SD4008より土馬が出土。
- 11/10 IVトレンチ：1号墳床面下の土層図作成。
- 11/13 IVトレンチ：1号墳石室を、三室戸小学校
へ移築する作業を行う。
- 11/20 調査終了。 (宮崎)



記念スナップ



1号墳移築風景

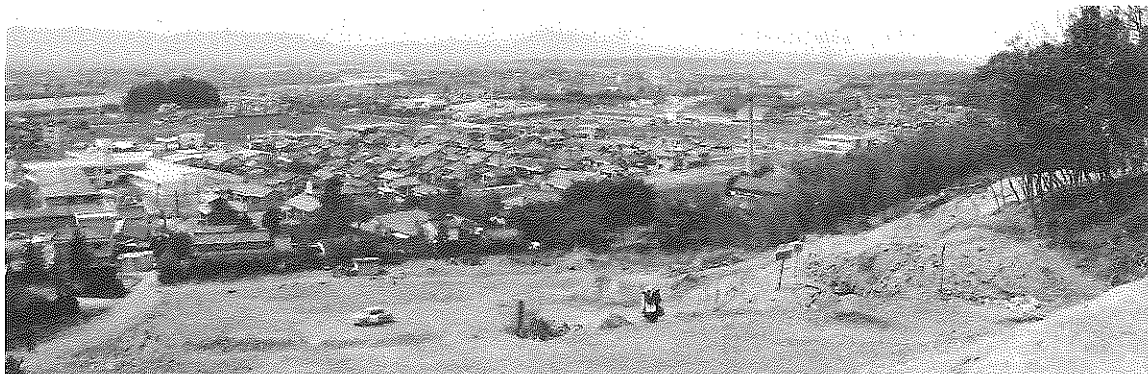
第Ⅱ章 位置と環境

第1節 菟道地区の景観

うちの故地 ^{とどろ}菟道地区は宇治市街地からすれば宇治川の対岸にあたり、西国三十三か所十番札所三室戸寺の存在や、京阪電鉄宇治線の駅名が三室戸駅があることから、一部は「三室戸」^{みむろと}とも通称されている。ウジの漢字表記については、現在「宇治」を用いるが、古くはむしろ「菟道」とすることが多かった。「菟道」を今はトドウと読ませるが本来は「うち」であり、明治8年にここに成立したウジムラは「菟道村」と表記していた。また、宇治の始祖王的存在として記紀に登場する応仁天皇の皇子ウジノワキノイラツコは「菟道稚郎子」と書き表され、宇治神社・宇治上神社の祭神として地元で篤く崇敬されている。すなわち菟道地区とは「うち」の古い表記を伝える土地であり、遺跡のあり方からしても、平安時代以降、今の市街地付近に宇治の中心域が移る以前の、古きウジの中心域であったと考えられる。

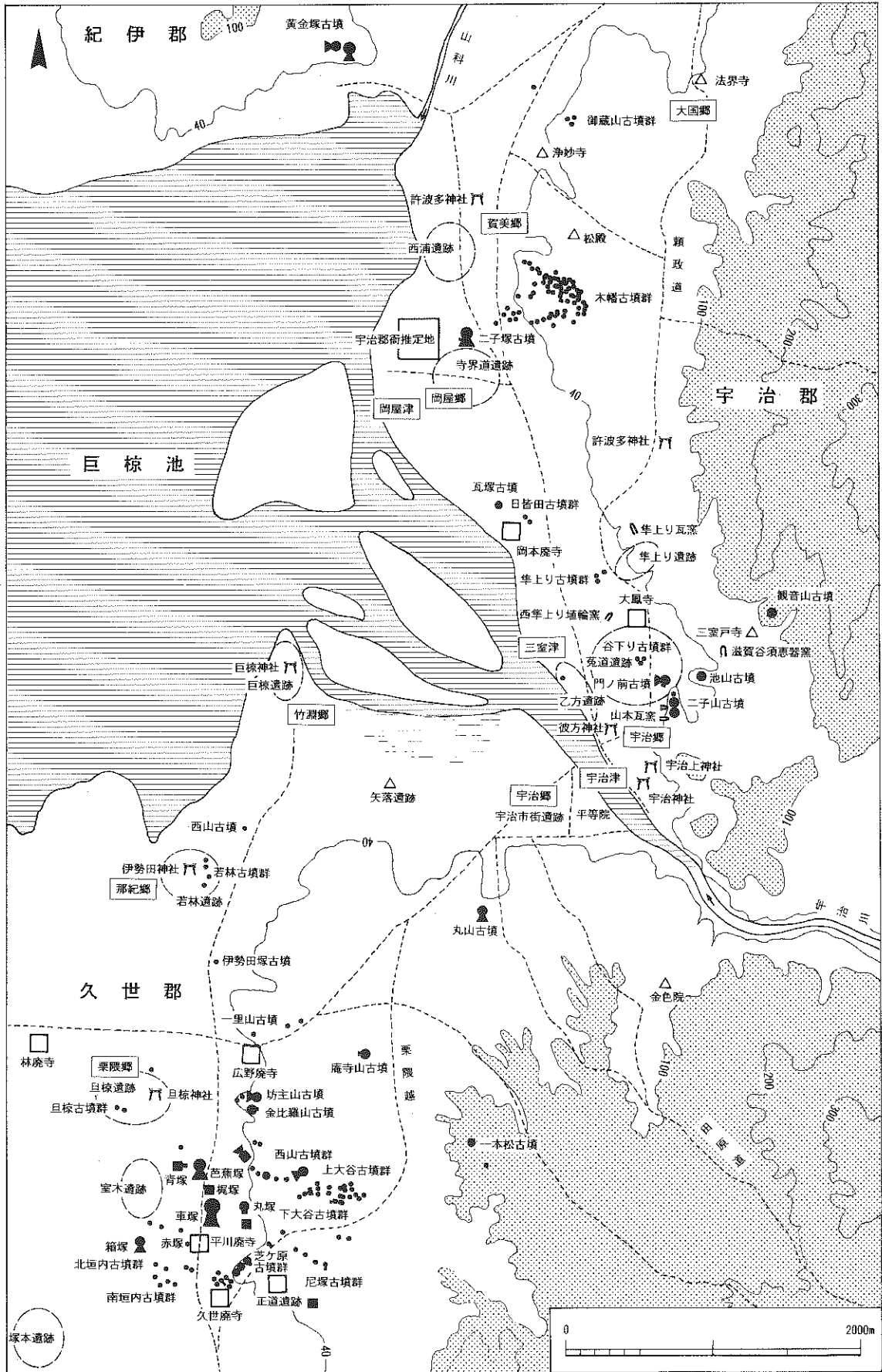
地 形 地形的に見ると、菟道地区は宇治川谷口部右岸となり、扇状地性地形を中心に地理的にまとまった観のある場所である。人々の生活の舞台は南北約1.8km、東西約1 km程度の範囲に広がる平地であり、東は標高300m程の山丘と派生する低丘陵、西は宇治川によって限られている。少し細かく地形を見ると、菟道平地部は中央部を南北にはしる段丘によって、上下の2面に分けられている。ちょうどJR奈良線と府道京都宇治線の間段差がそうである。また東部山丘から流れ出す戦川^{たたこかわ}¹⁾によって南北にも分けうる。つまり今回の発掘調査地は、菟道平地部の中でも上位段丘上の戦川南岸部という位置付けとなる。

近年の変貌 菟道地区の土地利用状況は、昭和30年代後半までは平地部に旧宇治郡条里の二・三里に属する短冊形の水田が展開しており、村落としては近世以来の集落が大鳳寺跡周辺と三室戸寺門前に営まれていた程度であった。しかし、昭和40年代に入ると三室戸駅を中心に宅地開発が急速に始まり、本市が専門職員を配置し埋蔵文化財保護体制を整備する前の昭和50年頃には、多くの水田は埋め立てられ、整然とした住宅地へと変貌をとげている。



第3図 昭和43年の菟道遺跡遠景（二子山古墳より北西を望む）

第1節 菟道地区の景観



第4図 古代の地形と主要遺跡概略図

第2節 菟道地区の歴史環境

郡郷 当地区は旧国郡制では宇治郡宇治郷に含まれる。山城国八郡の名は、史料的には8世紀中葉までには確認され、これらの数・名称は近世でのあり方と変化はない。したがって郡界は、古代以来概ね踏襲されていると考えられている。宇治郡は宇治市域の宇治川東部域と京都市域の山科盆地を含んだ範囲であり、八郷を有す中郡である。

宇治郷は郡の南端にあり、菟道地区のみならずその南の宇治川右岸域宇治地区、また菟道地区の東側の志津川地区を含む範囲と想定されている。南は久世郡と宇治川を介して接し、西は紀伊郡と巨椋池（昭和16年干拓）を介して接している。なお、宇治川を挟んだ対岸は久世郡宇治郷である。

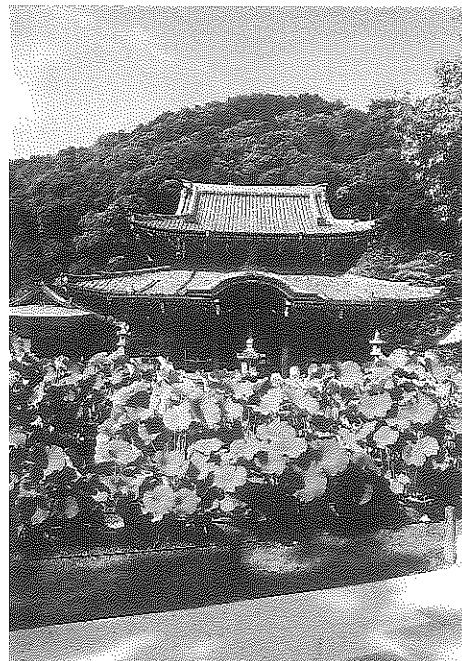
渡・橋 現在の宇治橋辺りは、宇治川の渡河点として古くは渡わたであった。ここに橋が架けられたのは7世紀のことで、その造橋経緯を刻したものが宇治橋東詰の橋寺境内に建つ宇治橋碑（重要文化財）である。高さ146cmの石碑であり、原碑は上三分の一、碑文は『歴代帝王編年集成』に基づいて補刻されている。碑には僧道登によって大化二年（646）に宇治橋が初めて架けられたことが刻まれている。この大化二年架橋を巡っては様々な見解が出されているが、672年に橋が存在したことは『日本書紀』天武元年五月条から確認でき、橋守が置かれていたこともわかる。宇治橋の位置については、概ね平安後期以降は現在位置とさほど変わらない場所で架け替えられてきたと考えられるが、それより古い時代については、もう少し上流ではなかったかと推定している。

神社 宇治郡宇治郷の『延喜式』所載社として、まず産土神の宇治神社と宇治上神社を挙げねばならない。

『延喜式』は宇治神社二座と記す。この両社は、もとは離宮八幡などと呼ばれ一体的な社であったが、明治になって分離し今に至る。祭神は宇治神社が菟道稚郎子命（うじのわきのいらつこのみこと、宇治上神社が菟道稚郎子命と父の応仁天皇、弟の仁徳天皇の三柱を祭る。宇治神社本殿は鎌倉建築で重要文化財に指定され、宇治上神社拜殿は鎌倉初期の建築で国宝、本殿は平安後期の建築で同じく国宝に指定されている。なお、宇治上神社は世界文化遺産に登録されている。



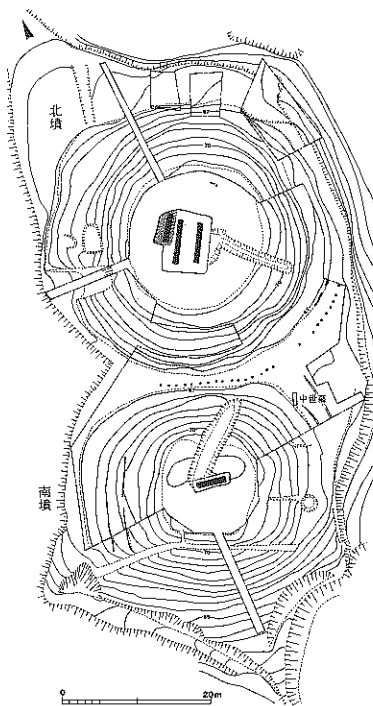
第5図 宇治橋碑（橋寺）



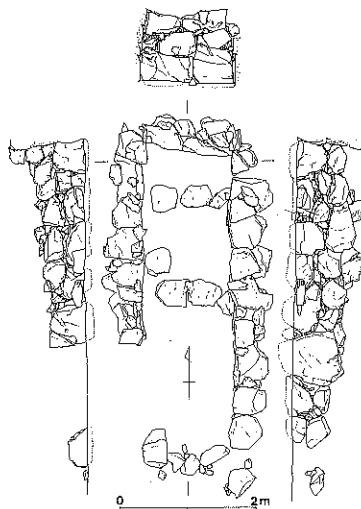
第6図 三室戸寺

また、宇治川東詰に鎮座する小社の^{おちかた}彼方神社も式内社である。ただし本来の鎮座地について現在地ではなく旧大鳳寺村であると『山城名勝誌』は記載する。

寺院 付近の主要寺院として三室戸寺と平等院がある。三室戸寺は観音山の麓に位置する聖護院系本山修験派の寺院であり、もとは天台宗寺門派に属していた。西国三十三か所巡礼十番札所である。平安期に始まった巡礼も15世紀に入ると庶民層にまで普及し、門前に近世三室村の原形となる集落が形成されていったと思われる。創立の具体的な年代は明らかではない。康和元年(1099)に三井寺の僧隆明によって伽藍が修造されたといい、15世紀後半に荒廃していた伽藍が土御門天皇勅願により再興されて今日に至っている。現在の本堂以下の建物は江戸期のものであり、中世以前の状況は不明であるが、周囲に広がる子院群跡の発掘調査では、平等院と同範の平安後期河内産瓦などの遺物や中世期の園池・遣水や建物遺構が見つかる。



第7図 二子山古墳測量図



第8図 集上り3号墳石室図

平安後期河内産瓦などの遺物や中世期の園池・遣水や建物遺構が見つかる。

平等院は川の対岸久世郡域に位置し、永承七年(1052)に藤原頼通によって創建された。国宝の鳳凰堂は翌年に建立されている。近年の庭園整備に伴う発掘調査で、12世紀前葉に大規模な修造が行われたことが判明している。鳳凰堂もこの時に総瓦葺となっている。この修造瓦には河内産が用いられており、同範・同文瓦は市内でしばしば出土する。

刻線仏 二子山古墳の西麓の古道沿いに「かげろう石」と呼ばれる刻線仏がある。これは高さ2m程の自然石の三面に阿弥陀三尊が線刻されているもので、勢至菩薩の前に女房装束の往生者が描かれている。平安末頃のもと考えられる。この刻線仏は庶民の浄土信仰による単独造立品と言われるが、付近の発掘で平安期の瓦が発見されていることを考えると、寺院あるいは平安期別業等との関係を考慮する必要がある。

古墳 菟道地域の首長墳と見なされる古墳として、観音山古墳・二子山古墳・池山古墳がある。観音山古墳は、三室戸寺本堂背後の観音山の頂に築造された直径45mほどの円墳である。埋葬施設は竪穴式石室であり、鉄剣片が採集されている。4世紀代の築造であることは間違いないだろう。

二子山古墳は低丘陵上に築造された2基の古墳の総称で、北墳が5世紀前半期の直径40mの円墳、南墳が5世紀後半の34mほどの方墳もしくは円墳である。北墳からは三角板革綴衝角付冑・長方板革綴短甲・鏡をはじめ多くの武器類、農工具類、装身具が出土し、南墳からは2領の横矧板鋌留式の甲冑・胴丸式挂甲をはじめ多くの武器類が出土している。また二子山古墳の

丘陵の先端に直径7～8m、高さ1mほどの円墳状隆起が存在したが未調査のまま消滅した。

池山古墳は、観音山古墳と二子山古墳の中間の低丘陵先端に築造された古墳で、直径40mほどの円墳と考えられるが、詳細は不明である。また、宇治川沿いの宮内庁管理菟道稚郎子墓は、明治中頃に前方後円形に造陵されている。ただしそれ以前の地図にはここに小さい円墳状隆起が表現されており、陵墓比定はこの隆起を目安として行われたものと考えられる。

後期群集墳は、菟道を北に離れた木幡地区に集中的に形成されている。菟道地区での後期群集墳は、地区の北辺丘陵斜面部に築造された3基の横穴式石室墳からなる隼上り古墳群と今回発見された谷下り古墳群程度である。また「三室戸寺境内古図」の横穴式石室と思しき書き込みを踏まえると、かつては境内域にも小規模な後期古墳が存在していたものと思われる。宇治川沿いの^{おちかた}乙方遺跡では、6世紀後半の土壙墓群が発掘されている。

寺院跡 戦川北岸部に^{たいほうじ}大鳳寺跡がある。この寺跡名は遺跡地が明治まで存在した大鳳寺村と重なっていることによる。発掘調査の結果、瓦積基壇の金堂跡や推定塔跡が発見され、法起寺式伽藍配置の白鳳寺院であると理解されている。創建瓦は川原寺式であり、焼成瓦窯は山本瓦窯である。改修瓦として平城宮式と平安前期の西賀茂製品が認められる。仁平二年（1152）の「東寺御影供菓子支配状」に見える「大鳳寺」はこの寺のこととされる。

また菟道の北、宇治川沿いの五ヶ庄岡本地区に岡本廃寺がある。掘立柱建物の講堂を持つ法隆寺式伽藍配置の白鳳寺院で、法隆寺西院伽藍式を創建瓦としている。宇治川東岸域での古代寺院は現在この2寺跡である。

窯跡 当地区では生産規模はさほど大きくないものの、各種の窯業遺跡が古墳時代後期以降に認められる。まず埴輪窯として^{はやもが}西隼上り埴輪窯がある。この窯跡は大鳳寺跡の西で発掘された5世紀後葉の小規模な埴輪窯で、円筒埴輪や動物埴輪などが出土している。

須恵器窯には二子山古墳西麓にあった山本須恵器窯と三室戸寺登り口で発掘された滋賀谷須恵器窯がある。山本須恵器窯では陶邑TK217型式の須恵器片が採取されており、昭和41年に未調査のまま土採りで消滅した。滋賀谷須恵器窯は7世紀後半から8世紀中頃にかけて操業された単独窯である。

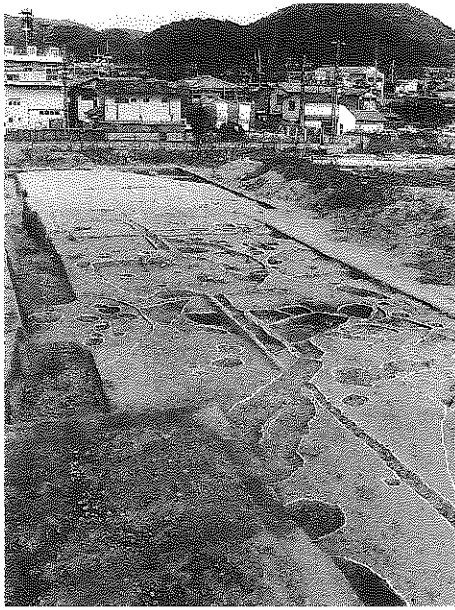
瓦窯には飛鳥豊浦寺に瓦を供給した隼上り瓦窯をはじ



第9図 大鳳寺金堂跡



第10図 隼上り1号窯



第11図 乙方遺跡の発掘状況

め、池山古墳の南麓には隼上り瓦窯と同範の瓦を焼成した池山瓦窯、二子山古墳西麓には大鳳寺の創建瓦窯である山本瓦窯が築窯されている。また三室戸寺境内には、中世に比定できる三室戸寺瓦窯がある。

集落跡 当地区では北から隼上り遺跡・西隼上り遺跡・羽戸山遺跡・東中遺跡・菟道遺跡・乙方遺跡などの集落遺跡が、平地あるいは台地上に隣接して密集している。この中で弥生後期の高地性集落である羽戸山遺跡、隼上り瓦窯と関係する隼上り遺跡以外は、文化財行政上、字毎に便宜的に区分し把握していると考えた方が実情に近く、実体的な遺跡状況の反映ではない。すなわち、菟道地区の平地・台地などの生活可能な場所では、時代と遺構の性格を問わなければ、どこでも何らかの遺構・遺物が

検出可能である。いわば、当地区の広範な平地・台地部は、すべて「うち」という土地に生きた人々の生活痕跡の累積地であると認識した方が、歴史的事実に適っているのである。その意味においては、広く「菟道遺跡」として統一的に把握すべきなのかもしれない。

現在までの当該地区での集落遺跡の発掘状況について、時代別に概観しておこう。まず弥生時代については、川沿いの乙方遺跡で中期の竪穴住居と土器棺が発掘されており、前述の羽戸山遺跡では高地性集落と墓地・祭祀遺構が見つかった。古墳時代では西隼上り遺跡で前期の竪穴住居が数棟発掘されている。歴史時代になるともう少し検出例が増加し、隼上り遺跡・西隼上り遺跡・東中遺跡などで7～8世紀の掘立柱建物群が発掘されている。

ただ、これらの中でも比較的広面積の発掘が行われたのは、京滋バイパス工事に伴って発掘された隼上り遺跡と住宅都市整備公団の住宅開発によって発掘された羽戸山遺跡など、昭和50年代中頃の当該地区北部での大規模土地開発工事に伴ってのものだけであり、他は比較的小面積での発掘調査である。

当該地区の集落遺跡の実体に不明な点が多いのは、このような大規模発掘が少ないこともさることながら、前述したように当該地区の開発が早くに行われ、埋蔵文化財保護行政上の対応が至



第12図 昭和43年の菟道の景観

らなかつたことが大きい。しかし翻ってみれば、初期開発の多くは水田埋め立てによる木造住宅地開発を主体としており、埋蔵されている遺跡は大きな破壊なく地下に温存されている可能性は高いのである。今後の再開発にあたっては、この点を十分に考慮の上、対応する必要がある。 (杉本)

第Ⅲ章 門ノ前地区の調査

第1節 試掘調査区と発掘調査区

本章で報告する門ノ前地区は、東西約120m×南北約70mを調査対象とする範囲である。調査前は畑および雑地であったが、近年までは田圃として利用されていた土地である。

地区周辺の地形 門ノ前地区近辺の現在の地形は、畑の区画ごとに西に向けて少しずつ低くなるもののほぼ平坦地である。地区南北での比高差は約2mある。この地形は旧地形を踏襲している可能性が高いとみられる。付近は、市域東の山丘から派生する丘陵端部にあたり、谷下り地区よりも西に向けての傾斜度はやや高くなっている。なお、M-IVトレンチ付近で土地の高まりがみられたが、棚田状に開墾された名残りであった。

調査地東側の道路は、宇治上神社方面から京都市の日野方面へと至る道で、中世では宇治川東岸域を南北に貫く主要な道の一つとなっている。この道沿いには平安後期の線刻仏である「かげろう石」が存在することを考慮すれば、この道はさらに古くに溯る可能性がある。

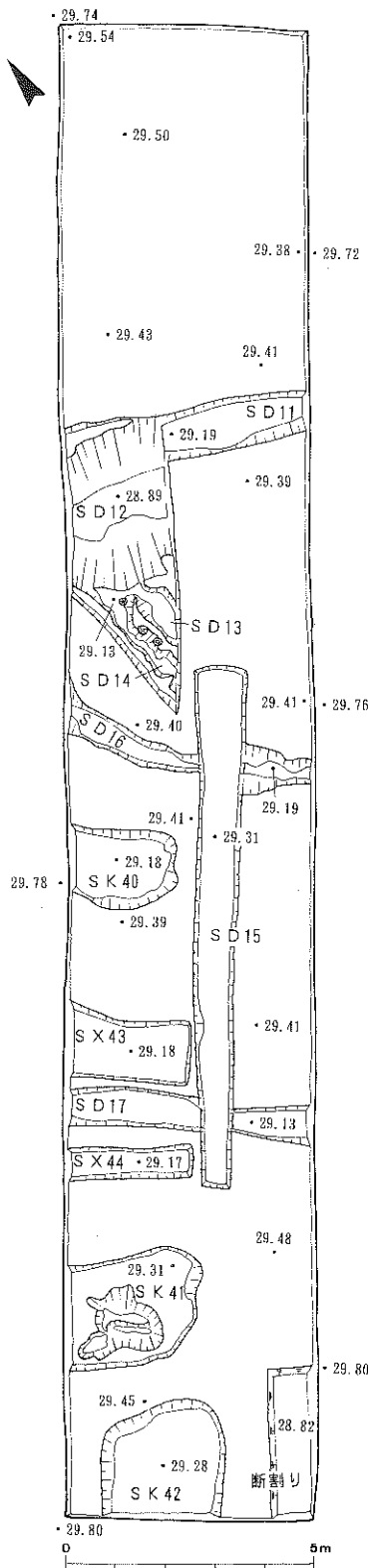
また、地区のすぐ北側を流れている河道は関西電力宇治発電所の放水路である。調査地西側の住宅街は、昭和30年代末から40年代初頭の開発である。

層序 場所によって差があるものの、表土から地山上までに約30～60cmの土層が堆積しているが、ほとんどの遺構を地山で検出している。層序は、まず畑耕作土の表土（灰褐色土：10～30cm厚）、水田床土（灰色シルト：10～20cm厚）、つぎに部分的に存在する遺物包含層（茶褐色砂質土）、そして地山（黄色粘質土～灰褐色砂質土）の順である。包含層上層の水田に伴う土層は下限時期を特定することは難しいが、古墳の周濠からは中世の遺物が出土していることから、概ね近世以降のものと考えられる。

試掘調査と発掘調査 門ノ前地区では、遺跡の包蔵内容を確認するため試掘調査から開始した。当初の計画では、開発予定地内に南北に長い30×5mのトレンチを3か所、同じく10×5mの1か所の計4か所の約500㎡にトレンチを設定することとした（図版3）。各トレンチは、調査地内の全体的な状況を把握するため、概ね均等距離になるよう配置した。

試掘調査の成果を受け、発掘調査時には地区内に2か所の調査区を設定した。1か所は地区中央東寄りの菟道門ノ前古墳調査区、もう1か所は東端のM-IVトレンチである。調査面積はそれぞれ1300㎡と180㎡である。菟道門ノ前古墳は、今回の調査で初めて存在が明らかになった前方後円墳である。削平のため墳丘は失われていたが、周濠から形象埴輪がまとまって出土している。M-IVトレンチでは、奈良時代・鎌倉～室町時代の集落を検出している。また、M-IVトレンチ出土遺物の中には少ないものの平安時代の土器も含まれているため、付近に同時代の遺構が展開している可能性が窺われた。

試掘調査の成果 調査開始直後より、2・3トレンチから古墳周濠の一部（菟道門ノ前古墳）



第13図 試掘1トレンチ平面図

と、4トレンチでは奈良・中世の集落の存在を確認した。事業者との協議結果、そのまま発掘調査へと移行したため、2・3トレンチについては、後述する菟道門ノ前古墳調査区に、4トレンチはM-IVトレンチに組み込まれることとなった。そこで本節では、1トレンチと、本調査へ移行する以前の2～4トレンチの状況を中心に説明を行うこととする。

1トレンチは、地区内では最も西に設定したトレンチで、標高29.4～29.5m（地表下40cm）で遺構面を検出した。遺構面は地山である。溝、土壇、方形土壇などを検出したが、全体的に遺構密度は低い状況にあり、どの遺構についても深度は浅かった。また、各遺構にはほとんど遺物は含まれていなかったため、時期や機能を確定することが困難であった。なお、包含層には平安時代の土器が少量含まれていた。

SD11・16・17は西北西方向へ向かう、ほぼ平行する溝で、概ね幅0.3m、深さ0.3mである。SD15は南北方向の溝で、近現代に掘削された可能性が高い。SK40・41・42は西側がトレンチ外に延長する。土壇とみられる。SK41の規模が最も大きく0.8×0.9m以上、深さは0.15mである。

2トレンチは、地区内中央北寄りのトレンチである。重機掘削開始直後、溝埋土とみられる暗褐色土から形象・円筒埴輪片が出土しはじめた。検出面の標高は31.0m（地表下40cm）である。遺物の密度が高い東側へ2m拡張したところ、さらに多くの埴輪片が出土した。この溝は、状況的に古墳周濠である可能性が高いと判断できた。以後の調査は、古墳全体の規模まで調査区を拡張しつつ進めることとなった。

3トレンチでも2トレンチ同様に、重機掘削直後から形象・円筒埴輪片が出土しはじめた。さらにこのトレンチでは、古墳墳丘～周濠にあたりと見られる溝の傾斜面を検出し、古墳くびれ部と見られる輪郭線が確認できたため、削平古墳が埋没していることが確定的となった。これ以後、2・3トレンチ間を中心とした地点にトレンチ範囲を拡張し、調査を継続した。

4トレンチは、地区東端のトレンチである。4トレンチでも、重機掘削直後から包含層に奈良時代・中世遺物が含まれていることが確認できた。さらに調査を進めた結果、標高31.9mの地山上で中世遺構が高い密度で検出された。そのため、当初の範囲を南北20m、東西9mに拡張し、この地点についても発掘調査を行うこととなった。（吹田）

第2節 菟道門ノ前古墳の遺構

菟道門ノ前古墳調査区は、当該開発予定地の中央東寄りに設定した東西約48m、南北約18mの調査区で、古墳時代後期の前方後円墳1基（菟道門ノ前古墳）を検出している。墳丘は中世以降の開墾時に削平を受けたようで、主体部を含め盛り土部分はほとんど失われていた。本墳発見の端緒となったのは、先述の試掘3トレンチでくびれ状の墳丘輪郭を検出したため、本調査では、この地点より東西に調査区を拡張しつつ古墳の全体を検出した。

a. 菟道門ノ前古墳（図版4・5・写真図版4～6）

主軸を東西に置く前方後円墳である。標高30.3～30.6mのほぼ平坦地に築造されており、周囲には古墳輪郭に沿った周濠がめぐっている。墳丘は、地山地盤まで削平されていたが、周濠が遺存していたため、平面規模が明らかとなった。なお、前方部前端付近にめぐる土留石垣の痕跡は、段畑を区画する近世頃のものである。この石垣を境に約0.5mの段差があり、西側での削平度が高い。同じく後円部東端では、近世期と思われる溜池の掘削によって周濠の一部が失われている。

墳丘 墳丘規模は、全長35.0m、前方部長14.5m、前方部幅19m、後円部直径20.5m、くびれ部の幅12.5mを測る。後円部南側のくびれ部付近には、幅6m、奥行き2.7m規模の造出を持つ。平面形状は、前方部幅と後円部径がほぼ等しく、後円部径が前方部長を上回る。そのため、後円部が比較的大きい印象を受ける。後円部は東西にやや長い不正円形を呈する。全体としてやや非対称であり、後円部最大径中心・くびれ部幅中心・前方部幅中心は直線で通らない。また、造出が前方部ではなく後円部側に付設されることは特徴的である。周濠内からまとまった量の礫の検出はなく、葺石は施設されていなかったとみてよい。

墳丘の築造は、周濠の掘削によって削り出された高さ以上は、ほぼ盛り土によって造成されたと推測される。地山検出面の比高差は東西端で15cmしかなく、周辺に比べて古墳周囲には平坦面が比較的広面積で確保されている状況からは、築造に先行して整地が行われたと推測される。

埋葬施設 主体部は削平によって全く遺存していない。ただし、前方部にある不整形土壌SK01～03は、埋葬施設に関係する可能性がある。各土壌の埋土からは、金環とともに十数片の埴輪片が出土していることから、この土壌自体が埋葬施設ということではないものの、前方部にも埋葬施設を持っていた可能性を指摘できる点で注目しておきたい。

SK01～03は、前方部中央付近に位置する不定形の土壌群である。調査時、このように独立した遺構として把握したが、土壌間には黒褐色土が認められるため、本来は一体の遺構である可能性が高い。土壌群の全体規模は、概ね長さ7.7m以上、幅7.0mで、主軸方向である東西に長い。前端部方向に延びる。深さは0.3～0.4mである。両長辺側の底部では中央部よりも一段へこむように深くなっている。中央の中心部はさらに深く掘り込まれている。埋土からは金環1点、埴輪片が出土している。また、割れた10～20cmの礫を含んでいた。

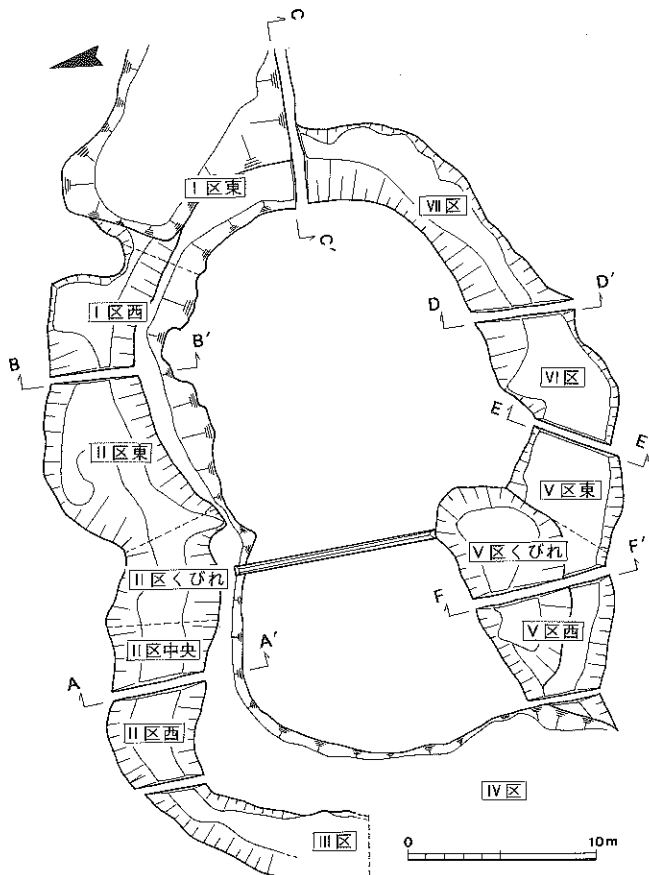
墳丘内の溝 墳丘上で、くびれ部から前方部にかけて弧を描く溝SX09を確認した。この溝は、後円部輪郭の延長線でラインを描き、後円部が円形となるように掘られたものである。幅は約3.5

m、深さ約0.6~0.9mである。土層観察畔を設定し掘削を行ったところ、黒褐色土と黄褐色土とが互層状になって埋没している状況(図版5)が確認できた。埋土から全く遺物が出土しなかったこと、埋土下層に有機質層が形成されていないこと、埋土は地山と同様の硬度であったことなどの特色が指摘できる。このような点から、掘削から埋没までの時間は短く、かつ人為的に埋め立てられた遺構であると考えられる。

周濠 削平によって南西の一部が失われているが、概ね墳丘外形に沿って全周するものと判断してよい。上面幅は4~9.5m、深さは0.3~1.3mを測り、不均一である。幅が最も広いのは南側くびれ部付近で、狭いのは前方部端である。深さは全体で見れば北側で深く、南側では浅くなっている。東側での周濠底部標高は高く、西側では低くなっているのは、旧地形の高低差によるものと推測される。およそ0.4mの差がある。

底部には土壌状のくぼみが数か所みられる。これは、周濠掘削における作業単位の痕跡と思われる。おそらく周濠は、いくつもの掘削部が連結して一連の濠へと形づくられたのであろう。周濠外形輪郭に凹凸が目立つことや、底部高・側面傾斜角が不均一であることは、この掘削作業方に起因しよう。なお、最も深い部分は北側くびれ部付近で、遺物の遺存状況も良かった。

また、造出の正面部分では、土師器甕底部が3個体並んだような状態で出土した。掘方を伴うものではない。甕は、体部径約20cmほどといずれも小型で丸底であった。周囲からは同一個体とみられる破片が出土しているが、口縁部片は含まれていなかった。

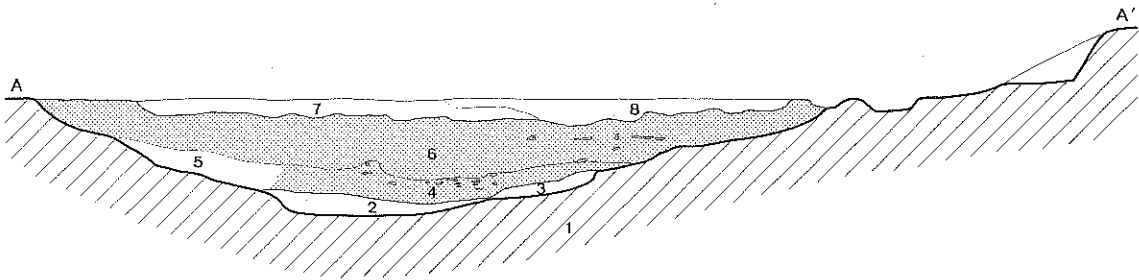


第14図 周濠内の地区割

周濠の土層堆積 第14図に示したように、周濠内には8か所の土層観察畔を設定し、そのままこの畔を地区境とした。各土層の状況は第15・16図のとおりである。西端の2か所については削平が著しかったため図化していない。各壁に付けた土色は厳密には対応していないが、全体的には黄褐色である地山上に、遺物を顕著に含まない淡黄褐色~黒褐色土、遺物を大量に含む暗黄褐色~黒褐色土、全体を覆う遺物包含層の順で堆積している。

底部には、顕著な有機質や砂層の堆積はみられなかったため、周濠掘削後、滞水や流れのある状況にはなかったことが推測される。また、削平を被るまでの土砂堆積も多くはないため、付近での耕作あるいは生活はあまり活発で

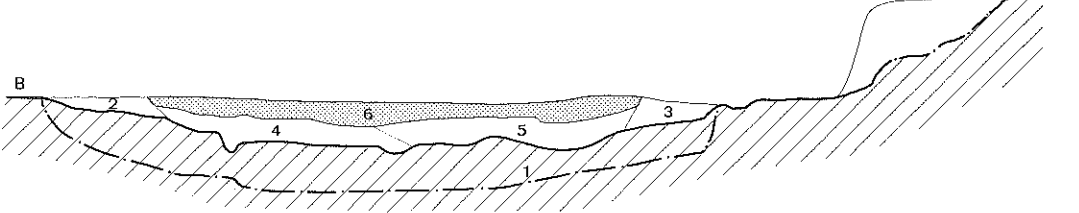
L=31.10m



Ⅱ区中央・Ⅱ区西間壁土層

1：黄褐色土（地 山） 2：淡灰色粘質土（細砂含む） 3：暗褐色砂礫土 4：暗灰褐色土（埴輪片多く、大粒マンガン斑まばらに含む） 5：暗黄褐色土 6：暗黄褐色土（埴輪片まばらに含む） 7：黄褐色土 8：明黄褐色土（須恵器片含む）

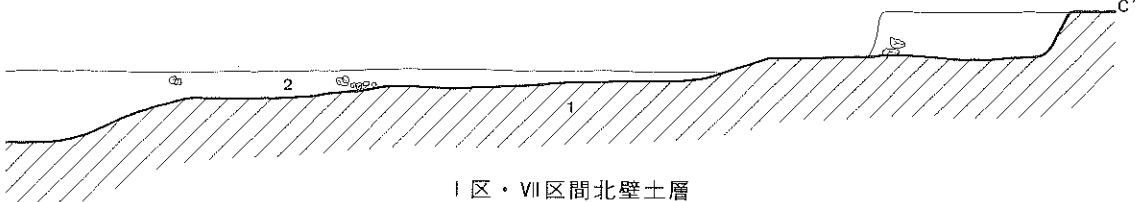
L=31.10m



Ⅰ区・Ⅱ区間西壁土層

1：黄褐色土（地 山） 2：黄褐色土（マンガン斑まばらに含む、固化強） 3：淡黄褐色土 4：黄褐色土（マンガン斑まばらに含む） 5：褐色土 6：暗黄褐色土（埴輪片まばらに、マンガン斑多く含む） 7：暗黄褐色土（小礫含む）

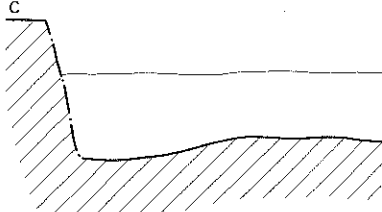
L=31.10m



Ⅰ区・Ⅶ区間北壁土層

1：黄褐色土（地 山） 2：黒灰色砂礫土（小礫多量に含む）

L=31.10m



0 2m

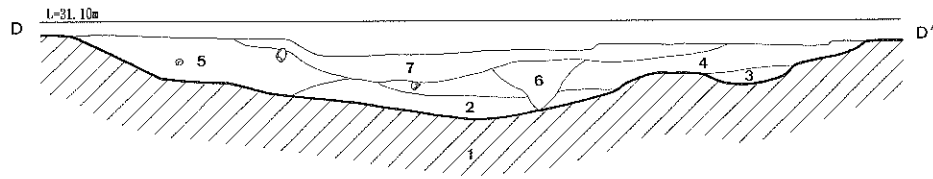
第15図 周濠埋土土層図1

あったとは思われない。周濠内からは、奈良時代から中世に至る土器類が出土していることを踏まえると、この間、古墳は周濠を含め一応の姿をとどめていたものと考えられる。

埴輪片を主体とする遺物群は、底部より約20cm上層付近に最も多く出土しており、底部際のは少ない。状況的には、多くが墳丘削平時と同時に破壊され、墳丘盛り土とともに埋没したものとみられる。以後は水田として平坦地化したらしい。

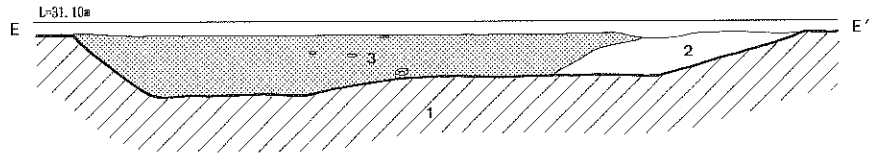
Ⅱ区中央・Ⅱ区西間土層（第15図）は最も多くの埴輪片の集中する部分の土層である。地山上（1）に15cmほどの淡黄褐色土（2・3）、遺物を集中的に含む暗灰褐色土（4）、遺物がまばらな暗灰褐色土（6）、黄褐色土（7・8）が堆積している。4・5はともに墳丘削平時の流入土で

第2節 菟道門ノ前古墳の遺構



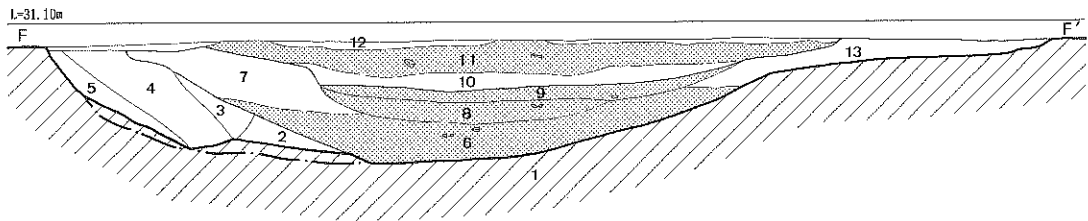
VI区・VII区間西壁土層

- 1：黄褐色土（地 山） 2：淡灰色砂質土（マンガン斑多量に含む） 3：淡白灰色土（柱穴埋土）
 4：暗灰色土（上面にマンガン斑沈着） 5：黒褐色土（マンガン斑多く含む） 6：淡灰色土
 （大粒のマンガン斑少量含む） 7：暗黄褐色土



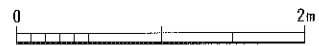
VI区・V区東間西壁土層

- 1：黄褐色土（地 山） 2：黄褐色土 3：黒褐色土（埴輪片含む、マンガン斑多く含む）



V区くびれ・V区西間西壁土層

- 1：黄褐色土（地 山） 2：黄褐色土（礫含む） 3：明黄褐色土 4：黄褐色土（礫含む）
 5：暗黄褐色土 6：黒褐色土（埴輪片、礫含む） 7：明黒褐色土 8：暗褐色土（埴輪片含む）
 9：黒褐色土（埴輪片、炭含む） 10：暗黒褐色土 11：黒灰色土（埴輪片、礫含む） 12：黄灰褐色土
 （近世耕作土） 13：黄褐色土（礫含む）



第16図 周濠埋土土層図2

ある。遺物の分布状況が異なるのは、先に埴輪を含む埴丘土が削られたためであろう。

V区くびれ・V区西間も、埴輪が集中する部分の土層である。ここでは削平以前の流入土がほとんどみられず、埴輪を含む埴丘削平土によって埋没している状況が認められた。

b. 土壌・溝

SK04・05 埴丘上の土壌で、小礫を含む。時期不明。

SK06~08 埴丘削平後に掘削されたとみられる小土壌である。埴輪片を含んでいる。

溜め池 古墳の周濠を破壊して穿たれている。掘削時期は遺物を含まないため不明である。

SD11 後円部北側周濠部から、北へと延びる溝状の遺構。幅6.0mで、深さは0.2mを測る。溝底は周濠底の高さとほぼ等しい。周濠との直接的な前後関係は確認されていない。周濠に関係する溝であると考えられるが、古墳造営時まで遡るか否か、確認ができていない。

(吹田)

第3節 菟道門ノ前古墳出土遺物

今回の調査で検出した遺物は整理箱に約110箱である。このうちの約100箱が菟道門ノ前古墳に関係する遺物であり、埴輪類が大半を占める。それ以外にも陶棺、土器類（須恵器・土師器）、金環がある。埴輪類は、すべて破損し周濠内に埋没したものであり、本来立てられていた位置を保つものはない。陶棺・土器類・金環など、主体部に伴うと考えられる遺物についても同様である。また、周濠内にはこれらの他にも奈良時代から室町時代に至る遺物や、古墳の築造前の遺物も含まれていた。以下に、その概要を報告したい。

A. 形象埴輪類

形象埴輪の種類と個体数は、石見形埴輪が8個体以上、靱形埴輪が1、盾形埴輪が2、太刀形埴輪が1、家形埴輪が1、人物埴輪が5以上、馬形埴輪が4、猪形埴輪が1、蓋形埴輪が1、鳥形埴輪が1、不明動物が2以上、その他不明埴輪が8以上あり、墳丘には10種類35個体以上の形象埴輪が樹立されていたことが理解できる。

各個体は出土時には、かなり細片化した状態にあったため、接合しない破片間では個体同定が困難な状況であった。それらについては、形態や調整および法量の類似性、焼成の硬軟と色調、出土地点のまとまりを基準に、同一個体と認められるもの、同一個体である可能性の高いものを選び出し、残りの破片を認定のできないものとして分類した。

本節では、同一個体間の重複を避けた数量を提示するため、同一個体はそれぞれの個体ごとに、同一個体の可能性が高いものは、複数個体をまとめている可能性があるが1個体ごとに計上した。なお、認定のできないものの個体数については、同一種類の破片が複数含まれる場合はまとめて1個体として計上した。なお、分類後の整理作業は、前者の多くについては石膏復元作業を行い、破片はそのまま保管している。

また、すべての個体の胎土には4～10mm大の砂粒が多く含まれており、個体間での顕著な違いは観察できなかった。大粒砂粒は概ねチャート・長石で、他に1mmほどの石英などが含まれている。焼成度合いについては、硬・やや硬・良・やや軟・軟の5段階で示した。多くの個体は橙色に発色する軟質のもので、硬質のものや須恵質化したものは少ない。

a. 石見形埴輪

石見A（図版6・写真図版7；1）有文の石見形埴輪である。形象部の高さは43.0cm、最大幅43.0cm、円筒部の直径は約18.6cmである。埴輪そのものは、円筒埴輪の左右および上部に粘土板を貼り付けるヒレ付円筒状を呈しており、表裏ともに円筒部である中央が粘土板より突出している。上辺中央には1対の角状突起を持つ。正面文様は中央帯によって2分割されているが、中央帯は線刻によって表現されているのみで表面に凹凸はない。粘土帯などによって文様が4分割され中央帯がくびれるものと比べると、かなり形骸化が進んでいることがわかる

正面には1条1単位のヘラ描き線刻による直弧文がヒレ・円筒部に、直線文と斜線文帯がヒレ上端および下端に施されている。下端の文様帯は、ヒレと円筒部とでは連続していない。円筒部

では同じ文様帯で段差を持つか、もしくは直線文のみが施されているとみられる。直弧文は形骸化が著しく、円弧状の単純な線刻が散漫に配されている。中央帯は2条の直線文間に鋸歯文を配して表現しており、ここではヒレから円筒部にかけて連続している。また、円孔が左右のヒレに各3か所、上部中央に1か所の計7か所に穿たれている。円孔は裏面まで貫通している。

裏面では円筒部がかなり残っている。円筒部のタガは、ヒレ下端のものを含め2条以上であることが確認できる。また、正面には全面にハケ調整が施されているが、裏面に認められない。なお有文の石見形埴輪は、すべて円筒埴輪を逆転させて左右のヒレを付け、正面側の円筒部上端部に粘土を継ぎ足しつつ上部のヒレをつけている。淡橙褐色、焼成良。周濠Ⅱ区出土。

石見B（図版6・写真図版7；2）有文の石見形埴輪である。形態的な特徴は石見Aとほぼ同様で、法量も形象部の高さ45.8cm以上、最大幅39.5cm以上、円筒部の直径が約20.2cmと概ね等しい。文様構成も基本的に同じで、中央帯によって正面文様が2分割されている。ただし、ヒレ下端には直線文と斜線文による文様帯が巡らない点が異なる。また、直弧文の位置や数も一致しない。円筒部は高さ20.4cm、タガ2条が残存している。淡橙褐色、焼成はやや軟。周濠Ⅱ区・V区より出土したものが接合している。

石見C（図版7・写真図版9；3）有文で、石見Aとほぼ同じ規格である。上端部のみ残存していた。最大幅は、中央で反転させると概ね39.2cmとなる。上辺の突起は石見Dと比べやや低目である。淡橙褐色、焼成は軟。周濠Ⅱ区東出土。

石見D（図版7・写真図版9；4）有文で、石見Aとほぼ同じ規格である。上端部のみ残存していた。淡橙褐色、焼成はやや軟。周濠Ⅵ区出土。

石見E（図版7；5・6）5と6は同一個体の可能性が高い有文の石見形埴輪である。他にも同一個体片が10片ほどある。石見C・Dとは図化していないが右上端片が重複しており、焼成度や色調も異なっているため別個体であると推測される。石見Aと同様、直線文と斜線文がヒレ上端、下端に、その間には直弧文が施されている。淡橙黄色、焼成はやや軟。周濠Ⅱ区西出土。

石見F（図版7・写真図版9；7）有文の石見形埴輪の右上方片である。他にも2点の同一個体片があり施文構成は石見A～Eとほぼ同一である。淡橙褐色、焼成は軟。周濠Ⅱ区中央出土。

石見G（図版7・写真図版8；10）無文の石見形埴輪である。有文の個体と比べて円筒部とヒレとの接合部に粘土が厚く付加されており、ヒレが剥離することなく残存していた。焼成はかなり軟質で、調整は観察できない。赤橙色を呈する。焼成軟。周濠Ⅴ区くびれ出土。

石見H（図版7・写真図版7；11）石見Aとほぼ同様有文で、中央帯によって正面が2分割されている。淡橙褐色、焼成はやや軟。周濠Ⅵ区・Ⅶ区出土。

石見底部片（図版7・写真図版9；8・9）端部に突帯がめぐる円筒部片である。円筒埴輪とするには直径が20.0cmと小さいこと、端部はナデによって両端が盛り上がるはずが押されて平滑になっていること、整理箱3箱分はある口縁部片中にわずか15片しか確認できないことから形象埴輪底部片であることは間違いなく、類例的に石見形埴輪に相当すると考えられる。突帯は幅2.5cmで、突出度は低い。ハケ調整の後に付加されている。ハケはほぼ同方向・同角度で施されている。

る。破片は、淡橙褐色から淡橙黄色、焼成はやや軟から軟質を呈する。周濠Ⅱ区東から2片、周濠Ⅱ区くびれから6片、周濠Ⅱ区中央から4片、周濠Ⅱ区西から1片、周濠Ⅰ区東から2片出土している。どの石見形埴輪に伴うかは不明である。

b. 靱形埴輪（図版8・写真図版8；12）

上部に突出する方形板に鏃を表現する、奴舩形の靱形埴輪である。高さ64.6cm以上、靱部の高さは52.8cm、最大幅38.0cm、方形板の幅は12.5cm、高さは7.0cm、円筒部の直径は約17.0cmである。埴輪そのものは、円筒埴輪の左右に粘土板を貼り付けるヒレ付円筒状を呈しているが、唯一前面側の円筒上端が開口している個体である。方形板は、円筒開口部の中央にソケット状に差し込んだ後に、奴舩形ヒレと接合されるという方法で付加されている。また、奴舩形のヒレの下方には、三角形のヒレが付されている。

鏃は3本がへら描きで表現されている。鏃の形状は、柄の先端を矢印状に尖らせる表現をするのみで写実的でない。また、本来矢筒に納まっていて、見えないはずの矢羽根が表現されている特徴がある。矢羽根は滴水形である。また、靱部の中心よりやや下方中央には、2か所の楕円形の剥離痕跡が認められる。形状や位置から、粘土紐による結び紐表現の痕跡であると考えられる。奴舩形部分には紐表現は認められないが、奴舩形ヒレと三角形ヒレの境目に突帯状の剥離痕が存在するため、このくびれに紐が結わえられていたと想定しておく。

靱が表現されている面には、2条を1単位とするへら描き線刻によって、直弧文や円形文や直線文、および直線文と斜線文による文様帯が施されている。ヒレの周囲には、方形板上端部を除き直線文が巡っており、円筒部上端とヒレ下端には直線文と斜線文が施されている。ただし、左ヒレにはこの線刻は連続しておらず、円筒部と右ヒレ部分のみに施されている。また、円筒部上端中央には半円形の抉りがあり、この抉りに沿い施文も湾曲している。両奴舩形ヒレの中央には、円形文がほぼ対称に施されている。この円形文は靱形埴輪にのみ認められる表現であるため、直弧文の一部ではなく、別文様であると考えられる。

靱部以下の円筒部分については残存部分が少なく、調整も確認できない。三角形ヒレ下約8.0cmにタガの剥離痕が認められる。淡褐色、焼成は良である。周濠Ⅱ区くびれ出土。

c. 盾形埴輪

盾A（図版8・写真図版8；13）上辺が弧を描き山形に盛り上がる盾形埴輪である。盾面の4隅が突出するため、両側面とも中央がややくびれている。盾部の高さは約54.0cm、最大幅約43.3cmである。盾形埴輪も、石見形や靱形と同じく、円筒埴輪の左右に粘土板を貼り付けるヒレ付円筒状を呈すると考えられるが、円筒部についてはまったく選り出すことができなかった。円筒部には施文がなかったために、円筒埴輪として分別されている可能性はある。

正面には2条1単位のへら描き線刻による、直弧文・直線文・刻目文・鋸歯文が施されている。加えて、下端部を除く外周には直線文と刻目文の文様帯が巡る。ただし、右側面上部では、刻目文が直線文の外側に施されている。また、盾面中央にも同じ施文帯が横方向に1条表現されている。下端部には直線文と鋸歯文による文様帯が施されているが、左ヒレにのみ認められ、右ヒレ

には及んでいない。また、直弧文は石見形に比べて密に施されているが、1か所で施文単位が1条になっている。正面にはハケ調整が認められる。淡橙褐色、焼成はやや軟。周濠Ⅱ区くびれより出土。

盾B（図版11・第17図；25）盾Aとほぼ同形・同規格である。盾部の高さは53.5cm前後に復元できる。施文方法もほぼ盾Aと同じであるが、刻目文はすべて直線文間に収まっている。円筒部はほとんど選び出すことができなかった。淡橙褐色、焼成はやや軟。周濠Ⅱ区東・くびれ出土。

d. 太刀形埴輪（図版9・写真図版10；14）

勾金に三輪玉を飾る太刀形埴輪である。把部・鞘部（刀身部）からなる太刀部と円筒部からなり、鞘部両側には台形あるいは三角形のヒレが付されている。円筒部直径は17.0cm、鞘部直径は15.6cm、高さは鞘部中央、把頭を欠くため不明である。把部は、鞘部より一回り小さい直径10.0cmの円筒形であり、無文である可能性が高い。ほとんどが失われている。

勾金は幅5.0cmの板状の粘土板で表現されており、4個以上の三輪玉が等間隔に付加されている。端部は把頭に接していたものと考えられ、緩やかな弧を描きつつ把縁に接合する。剥離痕からは、鞘部に沿ってさらに長さ3.0cm以上は延長するとみられる。なお、半円形の端部片が1片あるが、ここでは先端部として図化した。三輪玉の大きさは長さ5.0cm、幅2.0cmで、中央部と両端が突出しており立体的に表現されている。実物に比較的近い形状を呈する。中央には円形浮文が付されている。また、把部・鞘部の境は突出度の高い1条の突帯で表わされており、この直下には、鹿角を表現したとみられる突起物の貫入が認められる。中空であり、先端部の切口は尖るように斜めになっている。直径4.0cm。

鞘部では、ヒレを境として両面に線刻文様が施されていた。勾金が取り付く側には、2条ないし1条を1単位とする直弧文が、もう一方には2条を1単位とする直線文と鋸歯文が認められる。なお円筒形の器材で表裏に文様を持つ埴輪は、太刀形埴輪のみである。

太刀部と円筒部の境には、突帯が巡る。ヒレはこの突帯下部まで及んでいる。突帯の形状は、普通円筒埴輪と大差ないが、右下がりの刻目を多数施してから接合していることが異なっている。同様の刻目は、朝顔形埴輪の複合口縁接合時に認められる。円筒部は、長さ17.0cmと残存部分が少ない。なお、太刀形埴輪全体に縦方向のハケ調整が認められる。淡橙褐色、焼成は良である。周濠Ⅱ区くびれ及び西出土。

e. 家形埴輪（図版9・写真図版11；15）

複数階の家形埴輪である。身舎部分は隅丸気味の長方形であり、長辺側（平行）は47.2cm、短辺側（妻行）は32.5cm、高さは63.4cm以上、身舎部分の高さは45.0cm以上である。屋根構造は、入母屋造りと考えられる。なお、上屋根部分のほとんどと身舎部分の半分は失われている。

下屋根上方四周には6.2cm幅の剥離痕が残っており、上屋根を備えていたことがわかる。また下屋根部分には、2条を1単位とする線刻が施されている。線刻は、棟から軒先にかけて縦方向の直線文を巡らせ、その間を横方向の直線文でつなぎ、さらに縦方向の直線文を互い違いになるように横直線文の上下に施している。構造表現なのか、埴輪装飾としての装飾的要素であるかは

不明である。また軒先には、線刻後に押縁表現の突帯を巡らせている。なお、直径3.5～2.7cm×長さ11.27cmの棒状土製品（第17図；46）が2点以上あり、剥離痕を持つことから堅魚木ではないかと考えられる。

身舎部分は、三階建様であり、二・三階床部分に突帯を巡らせて上中下階を区分している。各階の高さは14.6cm、14.8cm、16.0cmと最下段がやや高い。壁体には柱表現を持たない。また、長辺側には、窓と考えられる表現が2か所で認められる。一つは3階左寄りに5.6×9.6cmの方形透しによって表現されているものである。上方には2条の、両側には1条の線刻によって縁取りが施されている。もう一つは2階右寄りに表現されている透し孔である。この透し孔は上方がM字状に、両側面下方は突出したように切り込まれており、特異な形状をしている。上方には2条の線刻が施されている。

器台部分短辺側には半円形のえぐりがある。また、短辺側突帯には、空気抜きのためのものとみられる小さな円孔が穿たれている。なお、最下層部分には入口や窓の表現がなく、円形透し孔が認められることから、二階建式で最下層部分は器台に含めるという理解もできる。しかし、上方の2突帯が突出幅0.7cmであるのに対し、最下段突帯は突出幅3.0cmと明らかに区別されていることから、三階建が表現されているのではないかと考えられる。

この埴輪で特徴的であるのは、身舎部分から下屋根部分までは粘土紐巻き上げにより一体で造られていることである。身舎には全面に右下方から左上方へのハケ調整が施されている。屋根部分には、ハケ調整は認められない。内面はナデ。軒先は粘土帯を付加することで作りだしている。淡橙黄色、焼成は良。周濠Ⅱ区東・くびれ・中央・西出土。

f. 蓋形埴輪（図版11・写真図版18；22～24）

傘部と立ち飾りの一部が出土しているが、破片数が少なく全体の形状および個体数は不明である。机上で復元すれば、傘部の最大径は50cmとなる。

傘部片は2片(23・24)あり、いずれも2条を1単位とする直弧文と直線文が表面に線刻されている。先端部には押縁状の突帯が巡っており、ここには直線文が施されている。肋木を持つかどうかは不明である。また、円筒部からの傘部の突出は3cmと短いため、比較的直径の大きな円筒部を基部にしていたとみられる。

立ち飾りと推定できる破片は1点(22)で、中心軸との接合部下端に相当する部分と考えられる。両面に2条を1単位とする線刻があり、片面には直線文と鋸歯文が、一方には直線文のみが施されている。また、赤色顔料が塗布されていた痕跡がかすかに認められる。淡橙黄色、焼成はやや軟である。周濠Ⅱ区くびれ、周濠北の2か所から出土している。

g. 人物埴輪

人物A（図版10・写真図版15・16；16）右手を上方に上げている男子像である。後頭部には垂髪、頭側部には振分け髪の表現がある。

垂髪は横幅6.0cm、長さ17.6cm以上の粘土帯で表現されている。線刻によって毛髪が表現されている。振分け髪は横幅4.5～6.0cmほどの薄い長方形粘土帯で表現されており、束ねていない

ことから、みずらではないと考えられる。毛髪は表現されていない。

着衣表現は認められないが、頸部に円形の剥離痕があり首飾りを装着していたとみられる。また、ちょうど腰付近に相当する部分に、幅2.8cm以上の剥離痕が認められる。突帯がはずれた痕跡ではないかと考えられる。右腕は中実で、先端は拳状に丸く収められている。体部の両側面には透し孔を穿つ。橙褐色、焼成は良。周濠V区くびれ出土。

人物B（図版10・写真図版15・16；17） 目の上下に入れ墨を施した男子像である。同じく男子像である人物A・Cに比べて頸部が短く怒り肩様であり、目と目が比較的近接している。意識的に屈強さを表現したものか。また、器壁は平均1.3cmと厚い。A・Cとは制作者が異なる可能性がある。淡黄褐色、焼成はやや軟。周濠V区くびれ出土。

人物C（図版10・写真図版15・17；18） 左頬に振分け髪の痕跡とみられる剥離痕があるため男子像であると考えられる。片手は前方に突き出して、何かを捧げ持つような所作をしている。他の個体に比べて小振りである。淡黄褐色、焼成はやや軟。周濠V区くびれ出土。

人物D（図版12・写真図版16；30） 飾り（帽子の鍔か？）を頭部に装着し、振分け髪表現のある男子像である。頭部の飾りは鍔が歯車状を呈するもので、おそらく頭部を全周していたとみられる。鍔の上面には頭部に沿って円形に1条を単位とする線刻があり、ここから各歯車へ放射状に直線文が施されている。また、粘土帯によってみずらが表現されており、ここには線刻で毛髪が表現されている。なお、頭径が12.8cmと人物埴輪中で一番大きい。淡橙黄色、焼成はやや軟。周濠II区くびれ出土。

人物E（図版12・第17図；31） 目から口にかけての顔面の部分のみが残存していた。性別不明。鼻の表現は人物Aでは方形で高く表現されているのに対し、人物Eでは三角形で表されていたとみられる。淡橙褐色、焼成はやや軟である。周濠II区くびれ出土。

他の人物埴輪片 比較的多くの破片がある。特に、頸部片から肩部にあたる破片が3点あるため、上記の5体の他に2ないし3個体は存在していた可能性がある。

1点（第18図；47）は側頭部下部の破片であり、粘土帯と線刻によって髪形が表現されている。淡橙褐色、焼成はやや軟。周濠II区中央出土。もう1点（第18図；48）は、頸部から肩付近にあたる破片であるが、焼成が良く淡橙色を示しており、他の人物とは全くの別個体であることがわかる。外面には粘土接合痕や、方向の一定しない刷毛調整が残っており雑な造りである印象を受ける。この個体にも着衣や装飾品は認められない。また同一個体片として、肩と腕の接合部片や、足の一部とみられる径3.2cmの円筒状の破片がある。もう1点（第18図；49）は、前頭部もしくは後頭部の下半部の破片であり、頸部から肩付近までが残存している。着衣の表現はない。淡橙褐色、焼成はやや軟。周濠V区くびれ出土。

また、どの像と組み合うか不明な人物腕片が2点、人物持ち物片（刀？）が1点ある。

腕片の1点（図版12・写真図版17；32）は、腕半ばから先端までであり、先端は拳状に丸められて表現されている。橙褐色、焼成はやや軟。周濠II区くびれ出土。もう1点（図版12・写真図版17；33）は肩との接合部から半ば位までのもので、製作者の人差し指もしくは中指を軸として、

その周囲に粘土を巻き付けて作られている。先端は中実である。淡橙褐色、焼成は良。周濠Ⅱ区くびれ出土。人物持ちもの片（写真図版17；54）は、鞞部と考えられる直径1.5cm、長さ5.0cmの棒状粘土に、粘土帯を巻き付け、先端が把頭状に方形に収められているものである。剥離の状況から左側面に装着していたと考えられる。淡橙褐色、焼成は良。周濠Ⅱ区くびれ出土。

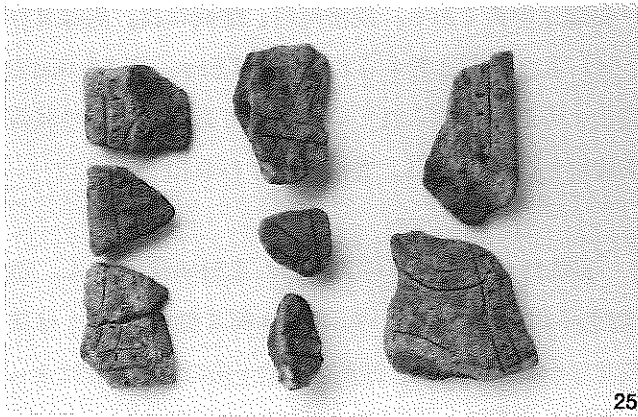
i. 馬形埴輪

馬A（図版10・写真図版11・12・13；20） 装飾性のある馬具を装着した馬形埴輪である。体長90.6cm、高さ70.4cm以上、頭部長23.0cm、脚部長約20cmを測る。頸部・体部片側面の多くは失われていたが、頭部、体部上面、腹部での残存率は比較的高い。頭部は、粘土紐の巻き上げによって成形されており、端部を開口させてそのまま口の表現としている。端面には鼻孔が彫られている。目はやや斜めの透し孔で表現されている。立て髪はほぼ欠損しているが、剥離痕跡により存在が確認できる。脚部は、腹部とのつながりから径の大きな円筒状脚は当てはまらない状況であったため、中空の筒状脚を同一個体とした。ただし、接合部分はない。尾は芯棒に粘土を巻き付け中空につくっている。摩滅が著しいが、表面に凹凸が認められるため、巻紐が表現されていた可能性がある。

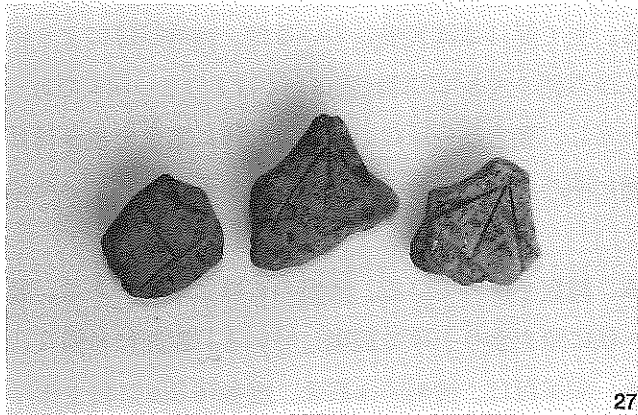
馬具類は、鞍、障泥板、面繫、尻繫、雲珠、鏡板を備えている。胸繫の有無は不明である。鞍部分は、体部上面に粘土を付加して逆アーチ状にやや盛り上げて表現している。側面には弧文、刻目文が施されている。前輪・後輪を備える。障泥板は、横幅23cm前後、縦幅16.8cmの粘土板で表現されており、鞍とは尻繫と同じ表現の突帯によって画されている。板の周囲にも尻繫と同表現の突帯が巡り、板には線刻による同様の文様帯が縦方向に施されている。この施文は中央横方向の直線文まで収まっている可能性が高い。鏡の有無は不明である。雲珠は、直径7.0cm、高さ3.4cmの半球形の粘土塊で、上面には鋳表現と推測される1+5の竹管文が施されている。雲珠からは綱が四方に伸び、前方向2本は後輪に、後方向2本は尻繫にそれぞれつながっている。綱には刻目は施されない。また側面2方には偏平な半円径の突起が表されている。杏葉をつなぐ爪形足金具が表現されていると考えられる。長さ1.8cm、幅1.2cm。杏葉の有無は不明。面繫は残存部が少ないが、剥離痕から頬繫、額繫、項繫を備えていたことがわかる。辻金具は、剥離痕の状態から環状であった可能性が高い。淡橙褐色、焼成はやや軟。周濠Ⅱ区くびれ・中央、古墳北出土。

馬B（図版11・写真図版11・12・13；21） 装飾性のある馬具を装着しない、騎乗用の馬形埴輪である。頭部及び体部が残存している。頭部の形態や表情が馬Aとは異なっており、別工人によって製作された可能性が高い。頭部は長さ20.8cm以上で、粘土紐の巻き上げによって作られているが、端部が閉塞され、線刻によって鼻と口が表現されている。目は横方向に切り込まれた透し穴である。脚部に、円筒状のものが用いられていることがわかるが、馬Dよりも径が小さく別個体であることがわかる。また、面繫の表現があることから、騎乗に必要な馬具は備えているとみられるが、鞍は装着していない可能性が高い。淡黄褐色、焼成はやや軟。周濠Ⅴ区出土。

馬C（写真図版14；45・第18図；50） 装飾性のある馬具を装着した馬形埴輪である。顔の一



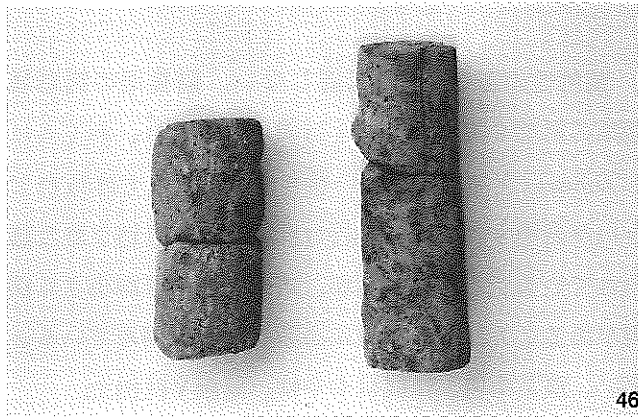
25



27



31



46

第17図 形象埴輪片写真1

部、脚部・体部片、および馬具の一部が出土している。淡橙褐色、焼成は軟で、馬具の表現も異なることから馬Aとは別個体である。周濠Ⅱ区くびれ出土。

馬D (図版12・写真図版14; 43・44)

脚部のみ残存している最も大型の馬形埴輪である。ほぼ完形のもものが2本あり、直径12.0cm、長さ15.2cmで、中央付近には1条のタガが巡る。外面はハケ、内面はナデ調整である。形態的には小型円筒埴輪といてよい。44には、胴の一部が残存しており、胴部にはハケは施されないこと、体側に透し孔を持つことがわかる。円筒状脚部は、ほぼ全長同径であるがタガ付近で最大径となる胴張気味を呈し、付近内面には顕著な接合痕が認められる。また、外面のハケ調整は顕著に方向を違えることはないが、タガ下端部に切り合いが集中している傾向が認められる。また、端部の器壁が一番薄い。タガは水平ではなく、やや波打つように付けられている。なお、体部は脚部頂内面に接合している。橙褐色から淡橙褐色、焼成は硬く良で、断面は須恵質化している部分がある。周濠Ⅱ区西、V区出土。

馬脚 (図版12・写真図版14; 42) 大型であるが、馬A～Dと組み合わない馬脚部が4片以上ある。外面に顕著なハケを施し、中央にはタガをもつ。

h. 猪形埴輪 (図版10・写真図版11・13; 19)

猪と推定される動物埴輪である。頭頂部両耳間には、立て髪とみられる剥離痕があるため、猪である可能性が高い。体長48.6cm、高さ38.5cmと馬形よりもかな

り小さい。頭部長10.0cm、足の長さは15.2cm。目は斜めに切り込む透し孔で表現されている。口にあたる先端は開口しておらず、切り込みを入れて口が表現されている。また、足部先端には蹄表現はなく単純に収まっている。体部側面にはそれぞれ2か所に透し孔を穿つ。焼成が軟であるため、調整は観察できない。黄褐色。多くが周濠Ⅱ区くびれから、脚1本がV区くびれから出土している。

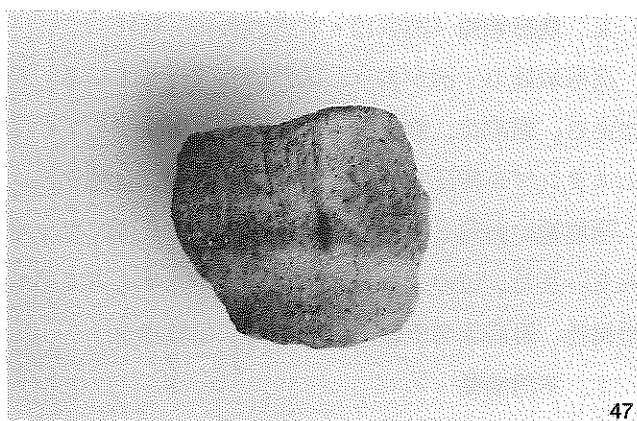
j. 不明動物埴輪 (図版12・写真図版15; 36~39)

動物脚部片が6片あり、2から3個体分に相当すると考えられる。すべて中空で、大きさには大小の2規格がある。

大規格は先端部の直径が4.0~4.5cmのもので、猪形埴輪とほぼ同じ大きさである。これらはさらに中空部の直径差で2者に区分できる。中空部の広いものは、36・37が相当する。内面は平滑に仕上げられている。36は体部側面部で、対面部には隣の足との接合部が残っている。淡橙褐色、焼成はやや軟。周濠Ⅱ区出土。37は長さ18.2cm。周濠Ⅱ区くびれ出土。この他にも2片ある。いずれも周濠Ⅱ区くびれ出土。

中空部の狭いものは38で、他に1片ある。先端部内面は軸芯の痕跡をそのまま残している。橙褐色、焼成は良。いずれも周濠Ⅳ区くびれ出土。

小規格のものは先端部直径3.3cmで、39がこれにあてはまる。中空部が大きく器壁が薄い。先端に向けて径がすぼまる形状で、内面は平滑に仕上げられている。橙褐色、焼成はやや軟。周濠Ⅲ区出土。



47



48



49



50

第18図 形象埴輪片写真2

k. 鳥形埴輪 (図版12・写真図版17; 41)

鳥形埴輪の一部があり、頭部のみ残存している。長さ6.0cm、長径4.3cmで、横断面はやや扁平である。頭部は、直上からみると三角形を呈している。鶏冠や肉垂は認められない。目は竹管状のスタンプの押圧で表現されている。他には線刻による表現は施されていない。頭部の作り方は人物埴輪の肩部と同様で、指を軸として周囲に粘土を巻き付けた先端中実・後方中空の粘土筒である。また、口の先端には空気抜きのためと考えられる直径0.2cmほどの穴が穿たれている。淡橙褐色、焼成はやや軟。周濠Ⅱ区くびれ出土。

l. 不明埴輪

不明埴輪A (図版12・写真図版17; 40) 三角錐形の破片であり、先端が横方向の切り込みによってくちばし状に表現されている。動物形もしくは鳥形の頭部先端片に類似するが、大きさが直径2.7cmと小さいことや、先述の鳥形とは表現が異なることから、その可能性は否定できる。魚形埴輪の頭部の可能性があるのではないかと考えている。

破片は、頭部の先端から半分までが残存している。上部には線刻による3条の直線文が施されているが、何が表現されているかは不明である。また、残存部分の中実であるが、これより後方は中空で、両者の接合部付近で割れているのではないかと推測される。くちばし状の切り込みの最深部には、直径0.2cmほどの針穴が穿たれている。淡橙褐色、焼成は良。周濠Ⅱ区くびれ出土。

不明埴輪B (図版12・写真図版18; 26) 方形で板状の破片である。表面には鋸歯文と直線文を交互に配した線刻があり、交点には小円盤が付されている。三角板と鋏が表現されている可能性が考えられるが、埴輪の全体像は不明である。破片は、底辺11.6cm×高さ9.8cm以上を測る、裾広がりの台形で、厚みは0.9cmである。上半部は欠損している。裏一面に剥離痕がある。右端面は横方向の直線文がさらに延長する様相からは、分割式の冑鍔ではないかと考えられる。なお、両側辺が端部であるため、草摺の一部ではない。三角板状の文様は、2条を1単位とする線刻で、2条の縦方向の直線文を施した後、その左右・中間に縦方向の鋸歯文を施している。鋏は直径2cmの円形で、中心を盛り上げて立体感を出す。淡橙褐色、焼成はやや軟。周濠Ⅶ区出土。

不明埴輪C (図版12・第18図; 27) 板状で三角形の同形同大破片が3点ある。表面には、直径の大きな円弧の外側に、放射状に三角形が表現されている。このような表現から、鬚形埴輪の一部ではないかと考えている。三角形の外形は一辺約3.2cmの大きさであり、10個前後配されていたのではないかと推測される。また、各三角形は6mm以上離れて配置されている。線刻は1条を単位とするもので、三角形の中央には円弧と直線が描かれている。淡橙褐色、焼成は良。3点とも周濠Ⅱ区くびれ出土。

不明埴輪D (図版12・写真図版18; 28) ヒレ状の破片であるが、片側辺が端部である。裏面に剥離痕があり、何らかの器材形埴輪に接着していたらしい。種類は不明である。破片は、幅7.5cm、長さ16.3cm以上を測る長方形であるが、全体的に右側に向かって緩やかに弧を描く。厚みは1cm。円弧内側の側面端部は、表面側へ肥厚し頂部には波状の凹凸を持たせている。外側側面端部は単純に収められている。裏面の約3分の2の面積が剥離痕で、肥厚しない端部側寄りに、縦

方向に痕跡が残っている。橙褐色、焼成は軟。周濠Ⅶ区出土。

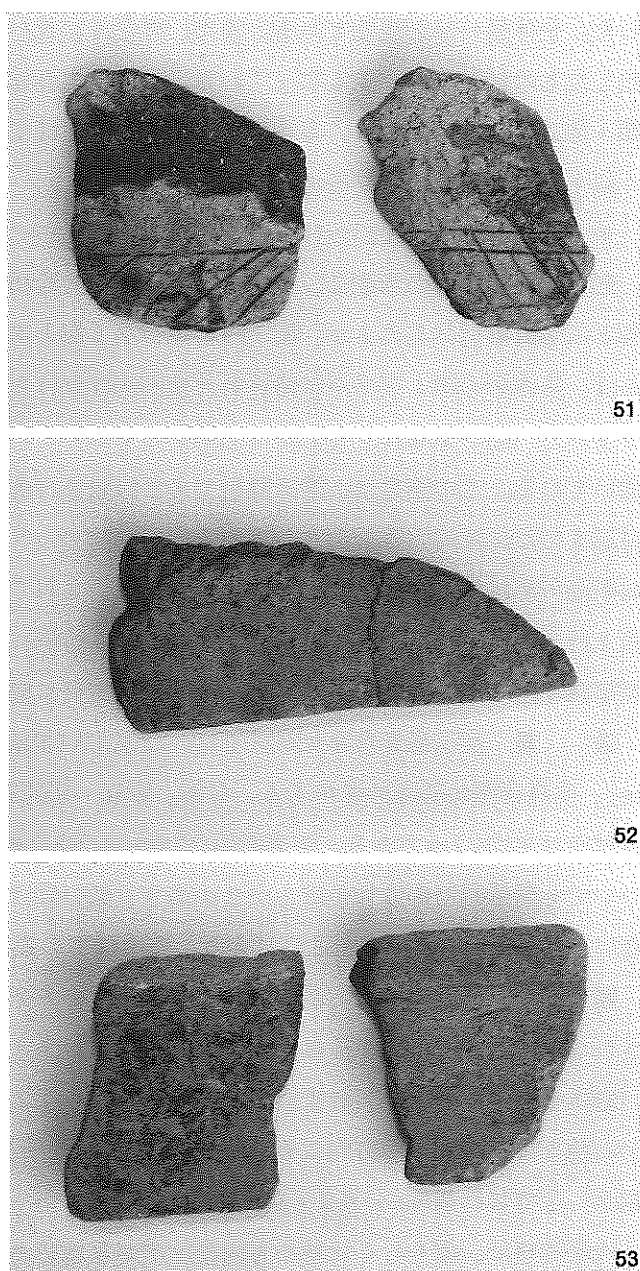
不明埴輪 E (図版12・写真図版18; 29) 円筒形器材形埴輪の一部である。破片はヒレ状で、円筒部との接合部左下端部分にあたる。外面には直線文と刻目文からなる文様帯によって鋸歯文が表現されている。文様帯の構成は盾形に同じものがあるが、文様そのものには同一のものはない。また、表面には赤彩の痕跡が残る。淡橙褐色、焼成は良。周濠Ⅱ区くびれ出土。

不明埴輪 F (図版12・写真図版18; 34) 結び紐状の表現がある破片である。ただし、焼成が硬く須恵質化しているため靱形埴輪(12)の一部ではなく、他にも同一個体片が認められないことから種類は不明である。器壁に円弧を持つため、円筒部もしくは傘部などの一部と考えられる。結び紐状の表現はリボン部分の一方とみられ、粘土紐を貼り付けた後、表面には外形両側に沿って線刻が施されている。また、円筒部にも2条を1単位とする直線文が縦横に施されている。橙色、焼成は硬。周濠Ⅱ区くびれ出土。

不明埴輪 G (図版12・写真図版18; 35)

器材形埴輪の一部である。ヒレ状で、円筒部などとの接合部にあたる破片であるが、横幅が7.0cmと短かく、円筒形の器材片ではない可能性が高い。押縁状の突帯や、同じ文様構成は蓋傘部に認められるが、円筒部との剥離痕と突帯が平行しないため、該当しない。外端辺端部には突帯が付加され、上面には2条を1単位とする直線文が、ヒレ部には直弧文が施されている。裏面は無文。淡橙褐色、焼成は軟。周濠Ⅱ区くびれ出土。

不明埴輪 H (第19図; 51) 器材形埴輪の円筒部である。側面のヒレの剥離痕から円筒形の器材であることがわかるが、ヒレの前後面に施文があることや、同じ文様構成を持つものがないことから種類は不明である。両面とも、2条を1単位とする直線文間に1条を単位とする斜行文の文様帯が施されている。破片は5片あるが接合しない。これらは同一個体片であり、数列にわたって同文様帯が施さ



第19図 形象埴輪片写真3

れていた可能性がある。淡橙色～橙色を呈し、焼成はやや硬である。いずれも周濠Ⅱ区中央出土。

その他の不明埴輪（第19図；52・53） 無文の器材形が3片以上ある。（吹田）

B. 円筒埴輪類

円筒埴輪類には、円筒埴輪と朝顔形埴輪がある。これらは、周濠内のほぼ全域から出土しており、整理箱に約70箱ある。このうち、朝顔形埴輪は2ないし3個体分であり、他はすべて円筒埴輪であった。円筒埴輪は川西氏編年Ⅴ期に比定できるものである。

円筒埴輪類も総じて破片化しかつ分散した状態で出土したため、接合作業が容易ではなかった。そのため全体を復元できたものは1点のみと少なく、さらに作業を進める余地を残している。

なお、図化に際しては、各部位の円周6分の1以上残存しているもの、特徴的なものを基本とした。全体量の25%程度である。また、底部片に比べて口縁部片の破片化が進んでいたため、図化したものは底部片が多くなっている。各部位は個体の重複を極力避けるように析出したが、底部・体部・口縁部間では、必ずしも個体識別が可能なものばかりではなかった。

以下、属性ごとに概要を述べる。

a. 円筒埴輪（図版13～17・写真図版21～24；1～21・25～44）

形態 全体の形態は、4条の突帯をもつ5段構成のものが基本である。4のような突帯3条とみられる個体もあるが、第1段の幅が第2段と第3段を加えた幅とほぼ等しいことを考慮すれば、基本形の第1突帯が省略された変則的な個体と考えることができる。プロポーションは、やや外方へ開き気味に立ち上がる形態をしており、口径と底径比が13：10程度と上方へ向かって開いている。この開きは、第5段目である口縁部付近で顕著になるもので、底部から第4段突帯付近までは比較的直線的に立ち上がる傾向が認められる。また、焼成時に歪んだものを除いて概ね断面円形に作られており、楕円形のものはいない。透し孔はすべて円形で、第2段、第4段にそれぞれ2か所づつ、上下で交差する位置に穿たれている。このように各個体間では、突帯数・透し穴の穿孔位置などの基本的要素は概ね統一されている。

法量 復元径を含めた統計では、口径22～30cm（平均25.8cm）、底径17～22cm（平均19.5cm）、器高は概ね50cm前後を測る。なお、口縁・底部径は水平面との接地点での計測値である。器壁厚は平均1.7cmである。突帯間幅は7.5～12.5cmと均一でない。また、第1段目の突帯位置についても個体間でかなりのばらつきがあり、低い位置のもの(42)では底部から6.7cmのところ、高いもの(29)は16.3cmのところであり、この間での規則性は認められない。

調整 外面調整は、1次調整のタテハケのみで、底部調整を除き2次調整は基本的には施されない。タテハケの単位は、センチ当たり8～11条とほぼ近似しているが、センチ当たり5条の粗い原体を使用するものがわずかに認められた。ハケの起点は比較的そろっている個体が多い。ハケの動きは、同幅・同方向にそろっている個体(5～9・11～14)と、不定方向もしくは動きの幅が一定でない個体(1・3・10)がある。

内面調整は、縦もしくは斜め方向のナデが基本であるが、余り丁寧ではなく粘土接合痕を残す個体もある。例外的に、胴部に縦方向の板ナデが施されているもの(18・27)が認められる。

口縁部の調整と形態 口縁部端部内面には、全体的な調整であるナデの後、ヨコハケを施すもの(3~11・13・14)、ヨコハケとヨコナデを施すもの(1)、ヨコナデのみのもの(12)がある。また、口縁端部にはほぼヨコナデが施されている。また、端部外面では次調整のタテハケの後に横ナデを施すものがある。

口縁部の形態は、概ねの個体が直線的に外傾しつつ広がり、端部は単純に収まるものであり、個体差は少ない。ただし、強い端面の横ナデによって端部が外側に開く個体(6・7)がある。

底部の調整と形態 底部外面には、上述の調整に加えて2次的な調整が加えられているものが多い。またそれらの手法にはバリエーションが認められたのでここで述べておく。

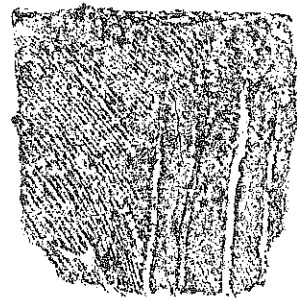
外面には1次調整であるタテハケの後に2次調整が、A：施されるもの、B：施されないもの、があり、さらにAには、Aa：タテハケ→板ナデ(32・36・37・43・44)、Ab：タテハケ→板押さえ(26・27・35)、Ac：タテハケ→板ナデ+板押さえ(34)、の3種が認められる。また、Bには1次調整のタテハケの起点が、Ba：底部端からのもの(38・41・42)、Bb：やや上方から施されるもの(29・31・33・39・40)、があり、Bbにはその前段階の調整である板ナデが認められるものがある。また形態上も、比較的直線的に立ち上がるものと(25~29)、外傾気味に立ち上がるもの(2・4・30~44)がある。前者は第1突帯までの長さが長く、器厚が一定であるものが多い。後者は第1突帯までの長さが一定しないが、なかでも短いものが多い。器厚も一定しない。また、器体の重量によって内彎気味に歪んでいるものもあった。

なお底面には、木目や藁など繊維質の圧痕を顕著に持つものが含まれていた。

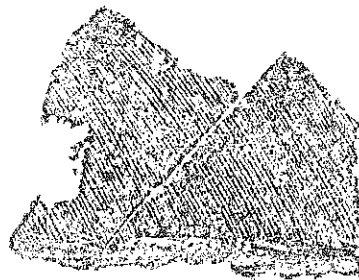
突帯 突帯の形態は多様である。断面形は、台形のものや三角形気味のものがあり、突出度も高いものでは1.2cm、低いものでは0.5cmと差がある。突帯端部の幅は1.2~0.9cmとあまり差はないが、突帯を構成する粘土帯の幅は3.2~2cmと一定でない。概して認められる点は、突帯下端の接合がきちんと行われておらず、粘土帯の接合痕を残す個体が多いことである。これは、器壁へ粘土帯をナデ付けた後に、突帯の上面と端面に指を当ててナデたためとみられる。そのため、突帯下端がつぶれてしまっているもの(26・31)もある。また、貼り付けについても、比較的平行なものやうねるように付けられているものがある。

突帯間隔にも幅があり、器高を一定幅で割り付けているものと(1・3)、そうでないもの(2)がある。タテハケが上下段で突帯を越えて連続していることから、全体成形と外面調整後にすべての突帯が貼り付けられたと考えられるが、この際に、正確な割り付けを行うことに強い意識はなかったらしい。

焼成 すべて窯で焼成されたものであり、黒斑を持つものはない。焼成度合いは須恵質化したものを含み、硬質~軟質の様々なものがあった。概ね硬質であるが、土中での



A



B

第20図 ヘラ記号拓本(1/2)

埋没状況により器面の遺存状態に差がある。概ね、淡褐色～橙褐色のものが多い。

ヘラ記号 2点あるのみで、いずれも口縁部外面端部付近に施されている。1点は縦方向に4条以上の平行する直線を施すもの(A)、1点は斜め方向に1条の直線を施すもの(B)である。

b. 朝顔形埴輪(図版15・写真図版23; 22~24)

形態 底部から口縁部まで完全に接合する個体はなく、全体形は不明である。ただし、肩部+2段が残る24では、肩部直下の段に透し孔が認められることから、この段が円筒埴輪の第4段目に相当する可能性が高い。また、口縁部には1段の突帯が巡る2段構成である。したがって朝顔形埴輪は、体部5段(底部から円筒部4段・肩部1段)と口縁部2段で構成されるものと推測される。

体部3・4段目までの形態は円筒埴輪とほぼ同様で、肩部になると頸部に向けて外傾接合により、徐々に径を狭め、口縁部からは大きく外反気味に広がってゆく。口縁径は円筒部最大径を上回る。

法量 円筒部最大径24.0cm、頸部径15.5cm、口縁部突帯径19.5cm(突帯幅含まず)を測る。口縁部突帯が口縁長の中央にあると仮定すれば口縁部径は27cm前後となる。器高は、先述の構成案に沿うと65~70cm程に復元できる。円筒部法量も、4段目まではほぼ円筒埴輪と等しい。

調整 外面は1次調整のタテハケのみであり、円筒埴輪と同様である。タテハケの単位はセンチ当たり7~9条で、ハケの起点や動きは概ねそろっている。内面は、縦もしくは斜め方向のナデによって仕上げられている。

突帯 突帯の形態は概ね断面台形を呈し、全体にほぼ平行になるように比較的丁寧に貼り付けられている。個体数が少ないため直接的に円筒埴輪と比較はできないが、ハケの動きが一定な個体群と近似する。なお、突帯の位置によって断面形態がやや異なっており、頸部の突帯は、円筒部のものに比べて幅・突出度ともに大きい傾向が認められる。また、ほぼ台形に成形されている。これに比べて円筒部の突帯は、やや下方がつぶれ三角形気味である。

突帯間隔は第4段目10cm、肩部10.5cm、口縁部第1段目8.5cmであり、円筒部については比較的等しく割り付けられている。

口縁部の成形と調整 口縁部は、頸部内面に粘土を貼り足しつつ内傾接合によって作り足されている。口縁部は頸部から端部まではほぼ直線的に延びる形態をしているが、突帯までの高さで一次口縁を完成させた後に二次口縁をつくり足す、いわゆる擬口縁をつくることによって成形している。両工程間には一定の乾燥期間がもたれている。

なお、二次口縁をつくり足す際には、内外面に大きな刻目を施している特徴がある。ただし22の外面では省略されている。この刻目を入れた後、擬口縁上に粘土板を乗せ、内外面に薄く粘土を貼り足している。また、一次口縁成形後にはヨコハケが施されているが、二次口縁成形後には施されない。

焼成 すべて窯で焼成されている。焼成度合いは須恵質化したものを含み、硬質・軟質両者がある。淡褐色～橙褐色を呈する。

ヘラ記号 朝顔形埴輪にヘラ記号を持つものは認められなかった。(吹田)

C. 陶 棺

今回の調査では、土師質亀甲形陶棺片が整理箱に約9箱出土した。すべてが破片化して周濠内などから出土したものであり、原位置をとどめるものはない。陶棺は、周濠内に埋没する際に破壊を受けたりして大半の部分が失われている。そのため、全体の形状を復するだけの破片量はなかったが、複数個体が含まれていることは破片の差異から明らかであった。

整理の結果、陶棺片は、突帯の形態によって大きく2型式に分類することができた。これらが大分類としてA類・B類とする。このうちの一型式の、棺身受け部の鏝（以下鏝）破片間には形態に差が認められるため、さらに小分類が可能であった。これに大分類B類をあて、Ba類、Bb類とする。この大小3型式間では、破片の胎土・焼成度・色調が異なるため、個体差に読み替えることが可能である。別個体が組み合わせられて1棺となる例もあるが、概ね本墳には3棺の陶棺が埋葬されていたとみることができる。

以下に各個体の特徴を述べたい。

a. 陶棺A（図版18・写真図版19；1～14）

特 徴 土師質亀甲形の陶棺である。棺身・棺蓋外面には縦横の直交する突帯が付加されている。この突帯の幅が狭く、突出度が高いことがAを最も特徴づけている。器壁も全体的に薄い。棺身受け部は、断面長方形の鏝と上方への短い突出によって構成されている。鏝幅はBa・Bbに比べ半分以下と薄く、突帯状を呈している。棺蓋には円形の透し孔を2か所以上持つ。また、赤色顔料の塗布が内・外面にはっきりと残っている。胎土には1～3mmの砂粒を含む。灰白色で、焼成は硬質である。

法 量 全長・幅・器高は不明である。器壁厚は、棺蓋2.2～2.5cm、棺身2.9～3.1cmと棺身が若干厚く作られている。棺身鏝の突出長は8.3cm、端部幅は2.4cmである。また、脚部片は残存していなかったため脚長は不明である。棺身・棺蓋突帯の形状・法量はほぼ等しく、棺蓋突帯の幅は0.5～1.0cmで、厚みは0.5～1.2cmである。棺身の突帯幅は0.9～1.5cmで、厚みは0.6～0.9cmである。

成形・調整 棺身・棺蓋ともに全体成形し、鏝・突帯を付加した後、中央部で切断されている。壁体内外面には左上がりおよび横方向のナデが施されており、単位まで顕著に残る。ナデが最終調整である。突帯は、基本的には横方向の突帯が先に付加され、縦方向の突帯が後から付けられている。そのため、縦突帯は断続的に通っている。

1は棺蓋頂部の破片である。頂部横方向の突帯幅は1.9cmと他の横突帯に比べて広い。2～4は棺蓋側面の破片である。3の内面、4の内外面には右上がりのナデが施されている。また、4の突帯接合の順は、右半分の横突帯→上半分の縦突帯→下半分の縦突帯→左半分の横突帯となっており、横突帯すべてが必ずしも先に貼り付けられたのではないことがわかる。5は棺蓋側面もしくは棺身の破片である。内外面には、左上がりのナデを施している。縦突帯の上端付近が少し盛り上がっていることから、横突帯との接合部近くであったと考えられる。6は棺蓋下端部の破片である。下端から5.0cm上方に横方向の突帯が巡る。内面には横方向のナデを施している。突帯上部には円形の透し孔をもつ。透し孔外面側の小口は面取りされ、内面側では、円形にそって

ナデが施されている。また、棺下端面には、藁状の植物繊維圧痕がみられる。7は6と同様棺蓋下端部の破片である。内外面には左上がりのナデが施されるが、内面下端付近のみヨコナデが認められる。突帯は、横・縦の順で付加されるが、この破片では、この後さらに接合部に粘土が付け加えられている。円形透し孔が認められる。棺の下端面には、藁状の植物繊維圧痕がみられる。8は、棺蓋中央分割部の破片である。外面には弱いヨコナデが、内面には左上がりのナデが施されている。

9は棺身受け部であり、横断面のカーブから側面隅部にあたると考えられる。受け部鏝は、上端面から1.7cm下方に付加されている。壁体内面には左上がりのナデが、外面には左上がりおよび縦方向のナデが認められる。鏝の上面・下面にも複数のヨコナデが施されている。受け部上端の内面では面取りを施している。また、側面最端にあたる縦突帯の始点は、他の突帯と異なり受け部鏝に接している。10は、9同様棺身受け部にあたる。縦突帯の始点は、鏝に接していない。11は棺身もしくは棺蓋の破片である。断面に緩やかなカーブが読み取れることから、隅付近にあたると考えられる。内面には、左上がりのナデ調整を行っている。12は、棺身側面の破片である。短・長側面のいずれにあたるかは不明である。内・外面ともに、左上がりのナデを施している。13は、棺身中央分割部にあたる。分断面は、切断後ナデが施されている。壁体内面には、ヨコナデが施されている。14は、棺身受け部の破片である。受け部鏝はほとんど残っていない。内・外面ともに、ヨコナデが施されている。

b. 陶棺 Ba (図版19・写真図版20; 15~21)

特 徴 土師質亀甲形の陶棺である。突帯は陶棺Aとは異なり幅が広く、突出度が低いことが特徴的である。器壁も全体的に厚い。棺身・棺蓋外面には縦横に突帯が付加されるが、横方向もしくは縦方向の突帯は互い違いに付けられているものがある。棺身受け部は、断面台形の鏝と上方への短い突出からなる。鏝幅は陶棺Aの2倍程とこれも厚い。棺蓋については、破片が少なく全体像は明らかでないが、端部付近に横方向の突帯を持たないことが陶棺Aとは異なる。なお、Baでは外面に赤色顔料塗布痕跡が認められる。胎土には、1~6mmの砂粒を含む。浅黄白色、焼成は軟質である。

法 量 全長・幅・器高は不明である。器壁厚は、棺蓋2.3~2.6cm、棺身4.1~5.0cmで、棺身の方が厚い。脚部の破片は残存していないが、棺底部片から直径14cmほどのものであったと推測される。棺蓋の突帯幅は3.8~4.2cm、厚みは1.0~1.3cm、棺身の突帯幅は2.7~4.7cm、厚みは0.4~0.7cmである。

成形・調整 壁体内外面には、所々に縦・斜め方向の指ナデが認められるが顕著ではない。ナデが最終調整である。棺身突帯は、基本的には横方向に通っていると考えられ、その間の縦突帯は左右にずらして付加されている(18)。なお、1片ある棺蓋(15)の縦横突帯は直交している。

15は、棺蓋頂部の破片である。内面には、縦方向のナデを行っている。縦・横方向の突帯の接合部は、横突帯の後に縦突帯がつけられている。16は、棺蓋下端部にあたるが端面は欠損している。内面側に端部が肥厚している。壁体外面には左上がりのナデが、内面には、ヨコナデが施さ

れている。

17は棺身受け部にあたる。鏝は端部下1.8cmのところにつけられており、端面には繊維質の用具を用いたナデ痕跡がみられる。なお、縦方向の突帯は、鏝直下より付されている。18・19は棺身側面の破片である。18の内外面には横方向にナデが、19の内面には縦方向のナデが、外面には右上がりのナデが施されている。20は棺身側面および棺底部にあたる。内面には、長辺方向に平行するナデが施されている。突帯は、横方向のものを付けた後に縦方向の突帯をつけている。棺身側壁は直立せず、壁体端部を内彎させて傾斜させ棺底部上に接合している。棺底部は、基本的には2枚の底板からなっており、底板の底面側に円筒脚部を開けて円筒脚部を接合した後、もう一枚の板をかぶせて棺底内面としている。円筒脚部内側には、さらに粘土板が付加されて接合強度の保持が図られている。21は、棺身側面の破片である。外面にヨコナデが認められる。内面の調整は、不明である。

c. 陶棺 Bb (図版19・写真図版20 ; 22~28)

特 徴 円筒形脚を持つ棺身と棺蓋からなる土師質亀甲形の陶棺である。棺身・棺蓋外面には縦横に突帯が付加されるが、縦方向の突帯は互い違いに付けられているものと、直交するものがある。

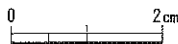
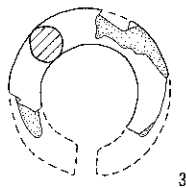
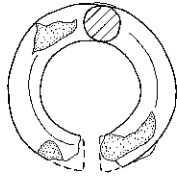
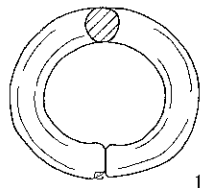
突帯は、陶棺Baに近い形態である。幅が広くより厚めであり、Baより丁寧に成形されている。受け部は、断面台形の鏝と上方への短い突出からなる。鏝幅は、Ba同様に厚い。棺蓋については、残存していない。なお、陶棺Bbでは赤色顔料塗布痕跡は認められないが、剥落している可能性はある。胎土には、1~3mmの砂粒を含む。黄橙色で、焼成は軟質である。

法 量 全長・幅・器高は不明である。器壁厚は、3.2~4.4cmと厚めに作られている。棺身の突帯幅は2.4~3.0cmであり、厚みは約0.7cmである。また、脚部片が1片あり、ここから底径9.8cm、長さは8.0cm程度と小振りであったことがわかる。

成形・調整 壁体内外面には、ほとんど調整単位が認められず、わずかに指ナデが認められる。突帯の接合順序は、破片数が少なく確定できない。

22・23・25は、棺身側面の破片にあたる。23の突帯は、縦下方突帯→横突帯→縦上方突帯の順で付加されている。24は、棺身受け部である。外面には、横方向のナデを施している。縦方向の突帯は、鏝の下部から1cm下方に始点がある。棺身は外面にむけて緩やかにカーブしていることがわかる。26・27は、棺底部にあたる。両者ともに側壁との接合痕跡を残している。なお棺底部と側壁とは、Baでは棺底上で接合していたが、Bbである27では棺底粘土板の側面で接合している。棺底部の製作方法はBaとはほぼ同じであるが、底面側の底板が厚く、円筒脚部との接合面が大きい。28は、円筒脚部である。法量がやや小さいが、胎土・焼成度合いからはBbに伴うものと推定される。破片は端部から8.0cm付近で大きく外反して広がり、棺底部との接合部分となる。外反部分の内面には横方向のハケが施されている。円筒部内面および外面は、ナデのみである。

(西田)



第21図 金環実測図

D. 金属製品 (第21図・写真図版26; 1~3)

金環が3点と鉄製品の破片があるが、鉄製品は小破片であり原形は不明である。金環はいずれも銅芯に金を施したもので、中実である。

1は鮮やかな黄金色を呈し、金の剥離がほとんどない完形品である。径は2.3×2.5cmを測り、他の2点に比べてやや大型である。平面形態は、開き部を下として横下方がやや長い蒲鉾状を呈する。開き部の両端は接しているため、隙間はほとんどない。断面はほぼ円形である。墳丘上SK01から出土。

2は開き部両端を欠き、金の剥離が部分的に認められる。全体的に錆化している。径2.2cm。平面形態はやや横長の円形で、断面は円形を呈する。Ⅱ区西墳丘上出土。

3は3分の1を欠損しており、金がめくれて銅芯の一部が露出している。金の剥離が進み銅芯の錆化が激しい。径は2.2cmを測り、2とほぼ同じ大きさである。断面は円形であるがやや角を持つ。Ⅱ区墳丘上出土。

E. 土器類 (図版20~23・写真図版25・26; 1~74)

a. 古墳時代の土器 (1~42)

須恵器・土師器があり、土師器はすべて甕・壺の体部片である。須恵器の器種には、杯蓋、杯身、有蓋高杯、ハソウ、直口壺、台付壺、器台、大型甕がある。

杯蓋(1・4・7)の形態は、いずれも天井部と口縁部とを分ける稜線は認められず、口縁端部も単純に収まるものである。1・7の天井部は膨みを持ち、頂部にはヘラケズリが施されている。口径には10.8cm(1)、13.0cm(4)、13.4cm(7)と差がある。身(2・3・5・6・8・9~12)はいずれも立ち上りが低く、器高も浅くなったものである。口縁端部はすべて丸く収まっている。また、底部下半にはヘラケズリが施されている。底部はやや尖り気味のもの(3・5)とほぼ平坦なものがある。口径は12.0~14.6cmと2を除けば近似している。2は口径10.4cmと他のものに比べて小さく、底部が丸い特徴がある。

有蓋高杯(13~16)は脚部を欠くものもあるが、すべて長脚2段透し高杯と考えてよい。杯部口径は14.0~16.0cmと法量がほぼ一定しており、いずれも杯底部下半にはヘラケズリの後にカキ目が施されている。立ち上りの形状は杯身とほぼ同様であるが、口径平均は14.9cmと一回り大きい。脚部は直径14.8cmと比較的太く、裾部は大きく広がる形態である。2条の沈線により上下に画されている。透しは3方に穿たれている。なお、上段の透しはいずれも長方形であるが、下段は長方形のもの(15)と三角形のもの(16)がある。また、15の内面には顕著なしぼり目が認められるが、16はナデにより平滑に仕上げられている。

ハソウ(17~19)は4個体あり、ほぼ同じ法量とみてよい。完形の18では、器高14.2cm、口径13.2cm、体部最大径10.0cm、頸部径4.9cmを測る。口頸部長と体部長比は概ね9:7と口頸部の割合が上回る。口頸部は外反しつつ上方に延び、段を持って口縁端部に至る。端部はナデにより面を持つ。体部に沈線を持つもの(18)と持たないもの(17・19)があり、下半にヘラケズリを施す

もの(18)とそうでないもの(17・19)とがある。

直口壺(21・25・26)には大小がある。21と25は、胴部上半に最大径を持つ体部と内彎気味に直立する口縁部の形態は似るが、口縁端部の収め方や調整が異なる。21は口径9.0cm、器高13.1cmを測るほぼ完形のもので、口縁端部はナデによって平端面を持つ。底部は平底である。体部下半にはヘラケズリが施されている。25は口径14.4cmで、口縁端部は単純に収められている。

体部に装飾が施されている小型の壺(22～24・27・28)が5個体以上あり、いずれも台付壺であると考えられる。体部上半に最大径を持つもの(20・24・27)と、ほぼ中央に持つもの(22・23)があるが、概ね玉葱形を呈する。文様は、沈線と櫛目文あるいは串状工具による斜行文からなる文様帯で構成されるが、カキ目のみで無文のもの(27)もある。28は台付壺脚部で、径14.4cmを測る。大きく広がる裾部下端は段を持ち、端部には面を持つ。

器台(29～36)は4個体以上あるが、全体のわかるものはない。29・32・33は器台杯部である。口径27.1～28.8cmで浅い皿状を呈する。底部から杯中央部までは内彎気味に立ち上がるが、途中で屈曲し、ここからは外反しつつ立ち上がる。29・32の口縁端部は、外面上下に肥厚し厚みを持つ。また、口縁直下には串状の工具による斜行文と屈曲部付近に沈線を施す。32下半の内外面にはタタキが残る。33の口縁部も外面に肥厚するが突出度は低い。櫛目文と沈線を施す。30は脚部との接合部の破片で、タタキの後に接合を行っており、両者は別作りであったことがわかる。31・34～36は器台脚部である。31は杯部との接合部から裾近くまでを一応1個体として図化した。下半も同一個体であるか否か不確定ではある。脚部は少なくとも5段以上で、4段目までは一列に並ぶ長方形透しを、裾部には三角形透しを穿つ。カキ目の後に櫛目文を施している。34は裾部付近で、長方形透しを段ごとに位置をずらして穿つ。カキ目の後に波状文を施している。35も裾部付近の破片であるが縦方向のミガキの後に沈線を施す。36は裾端部の破片で、径19.6cmを測る。施文は見せかけ上、櫛状施文工具を断続的に器面左方向に移動させている。

37～42は大型の甕である。38・39・41は7世紀に下る可能性がある。42は口径43.8cm、器高83.4cmと突出して大きい甕で、底部には焼成前の穿孔がある。体部上半に最大腹径があり、底部に向けて尖り気味となる。底部は緩やかな平底風である。外面にはタタキ目が残るが、内面はきれいにナデ消されている。また、焼き台とみられる須恵器片が底部に窯着している。

以上これらの須恵器は、杯蓋・身、高杯、ハソウなどの特徴から、概ね陶器TK43型式に併行するものと判断できる。

b. 奈良・平安時代の土器(43～53)

須恵器(43～53)と土師器がある。須恵器には杯、壺、甕などがあるが、破片化したものが多く完形のものはない。土師器もほとんどが甕片である。

44・45・48は壺A。48は肩部が鋭く尖り底部には高台を持たない。46は壺の底部で外底面に糸切痕が認められる。47は壺A蓋、49は壺Qである。50はかえりを持つ杯B蓋である。復元径16.3cm。51は杯B、52・53は壺Kである。これらは8世紀代を中心として、7世紀後半から9世紀代までのものがある。

(吹田)

c. 中世の土器 (54~74)

54~68は土師器皿。クリーム色の色調を呈し、胎土は砂粒を少量含むものが多い。ナデ調整は底部を一方向ナデしたのち、口縁部内外面をヨコナデするという手法が基本であるが、全体的に非常に不明瞭である。54~57は「て」字状口縁の皿。口径11.0cm前後のものが多い。54は口縁部がわずかに肥厚し、端部の形態はあまりはっきりしない。口縁部外面のナデはデフォルメされてつけられる。55は口径10.6cm、器高1.5cm。体部のたちあがりは非常になだらかであり、シャープさに欠ける。56は口径10.6cm、器高1.4cm。たちあがり、端部の形態など非常に不明瞭であり、明瞭な「て」字状口縁の実現は意識されていない印象を受ける。57も同様で、「て」字状口縁のフォルムのくずれはより顕著である。58はコースター状の受け皿。砂粒を多く含み、ざらつきのある胎土。口縁端部は押しつぶされたような平たい形状をなす。59は口径9.6cm、器高1.5cm。丸みを帯びてたちあがり、口縁部外面には二段ナデが施される。60は口径9.6cm、器高1.5cm。比較的明瞭に2段ナデが施される。61は口縁部外面に二段ナデが施され、ナデの境界部分は屈曲が強い。底部中央を外側から親指で押しくぼめる。62は口径8.8cm、器高1.4cmと浅身の皿。体部がゆるやかに内彎しつつたちあがる。内外面の調整は非常に弱い。63は内彎気味にたちあがる形態。器表が荒れていて調整は不明であるが、端部の形態からみて一段ナデと思われる。64は口径13.0cm、器高1.5cm。直線的に体部がたちあがる。65は口径12.4cm、器高1.3cm。橙白色で精良な胎土と、ほかの土師器とは異なる。底部は平たく、直線的に短く体部がたちあがる。器壁が荒れておりはっきりとはわからないが、ロクロ成形の土師器皿である可能性もある。66は口径12.8cm、器高1.8cm。わずかに外反し、端部は丸みを帯びる。胎土は砂粒が多く、ややざらつく。67は直線的にたちあがる体部をもち、口縁端部がわずかに外反する。胎土は赤色粒子を多く含む。内面に煤が付着する。器壁も0.5cm前後と、ほかの資料と比べてやや厚い。68は口径17.0cm、器高3.4cmを測る大皿。茶灰色を呈する。直線的に体部がたちあがる形態。一段ナデ。69・70は羽釜。69は口径20.4cm、口縁部が外反する大和型。橙褐色であるが、砂粒を極端に多く含む。70は胴部径25.2cm。砂粒を多量に含み、ざらつきのある胎土。長さ1.5cm、幅1.3cm程度の極端に厚い鏝がはりつけられる。河内産か。71は黒色土器A類碗の底部。底径7.6cmを測る。断面三角形の高台をはりつける。見込み部分をヨコナデする。72~74は白磁碗。72は底径6.4cm。73・74は玉縁状の口縁をもつタイプ。いずれも口径16.4cmを測る。淡緑白色の釉が厚く施釉される。土師器の多くは一段ナデをおこなうもので、おおむね13世紀後半から14世紀にかけてのものと考えられる。「て」字状口縁の皿など古い形態のものも含まれているが、これらは前代での模倣が在地化してのこったものであろう。12世紀代の所産とみるには京都産土師器との隔たりが大きい。また黒色土器A類碗や白磁など古いものも混じっており、本資料群にはある程度の時期幅がみとめられるが、遺物の主体は13世紀後半から14世紀とみて大過ない。

F. 石製品 (図版23・24・写真図版27 ; 75~85)

75~77は滑石製の石鍋。鏝の下半部に煤が付着する。いずれも鏝の下部にのこる痕跡から、幅1.0cm前後の平たい金属製工具によって、体部外面が下から上へと密に削られていることがわか

る。みな断面台形状に鑿を削り出すタイプであるが、77は形状が非常にシャープである。

78～80・82は砥石。研ぎ減りが著しい。78・80は泥岩製で短冊形の形状をなす仕上げ砥石。幅3.5cm、厚さ1.0cm程度。ともに二面を使用し、表面に細かい擦痕がのこる。78は面の形状からやや幅広の刃物を研ぐのに使われたらしい。79は直方体の形状をなす中砥石。四面を使用する。かなり使い込まれたらしく、細くなっている。流紋岩製か。82は明灰白色の砥石。他とは異なる石材を使用する。先端が丸みを帯びた形状で、表面に茶色の物質が斑状に付着する。漆用など別の用途に使われた可能性がある。81は滑石製の石鍋の底部を再加工したもの。長さ15.8cm、厚さ2.0cmほどで、1か所を穿孔するとともに、ほか3～4か所に穿孔を試みた形跡がある。約566.0gと温石としてはやや重すぎるか。

83は石錘。幅5.5cm、厚さ2.0cm程度。中央に幅0.5cmほどの溝がある。84は磨石。長さ8.0cm程度の楕円形をなす。中央部がわずかにくぼむ。85は不明石製品。中央部分に4条ほど溝がはしる。

(中井)

G. 石器剥片・未成品 (第22図・写真図版27; 1～4)

1は材質はチャートで明瞭な調整痕を持たない。重量4g。Ⅱ区墳丘上出土。2はサヌカイトで重量4g。周濠Ⅴ区くびれ出土。3もサヌカイトで重量14g。周濠Ⅱ区出土。4はサヌカイトで重量7g。Ⅱ区くびれ墳丘肩出土。

(吹田)

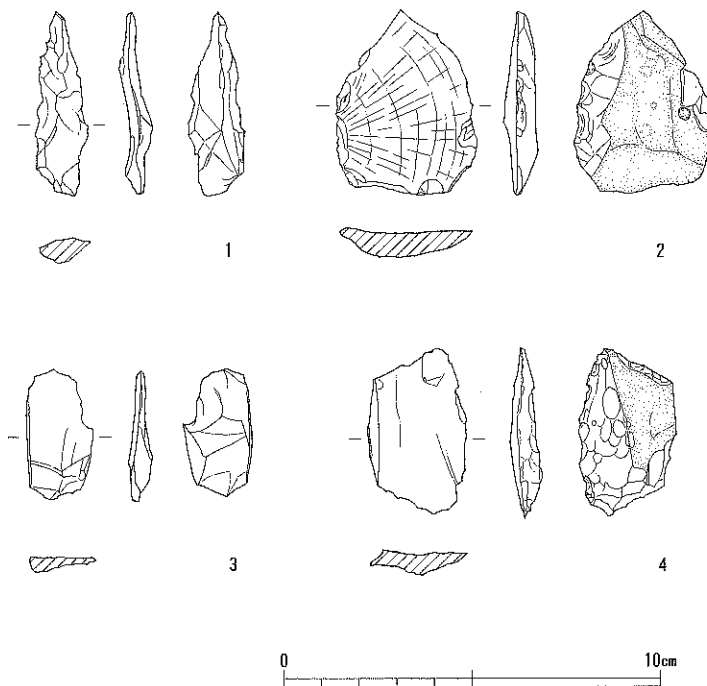
H. 瓦製品 (図版24・写真図版26; 86)

層塔の最上段の笠部であると判断される。全体のほぼ半分が残存し、軒先は2面確認できる。露盤の上面部は剥離し、相輪部の状況は不明である。軒出の反りは、わずかながら認められる。軒先には宝相華文を持つ面がある。宝相華文の表現は、平安時代後期河内系の瓦当文様に類似¹⁾がある。底部の円形の嵌め込み部には「七」と読み取れるへら状工具で記した記号状のものがある。

これを「七」とすると、七重の層塔であったこととなる。

製作時期については、管見の限り類例が見あらず定かではない。ただし、前述した宝相華文表現の類似例から平安時代後期を想定しておきたい。なお、下居遺跡(宇治市下居)²⁾では宝塔の塔身部に仏を範押した瓦質塔が見つかっている。宇治では、類例の少ない瓦質の塔が散見される。

(浜中)



第22図 石器剥片・未成品実測図

第4節 菟道遺跡の遺構

A. トレンチの概略

M-IVトレンチは、門ノ前地区開発予定域の東南部に設定した調査溝である。トレンチ軸は北から東に20度ほど偏す。規模は幅9m、長さ20mを基本とし、必要に応じて部分的に拡張している。このトレンチの設定場所は、当該開発区域の中でも地形的に高い部分であり、トレンチ軸は平坦面（畑）の形にあわせている。発掘面積は197㎡である。

トレンチの土層は、最上層に厚さ20cm程の畑の耕作土があり、その下に厚さ10～20cm程の漸移層が存在しその下に黄褐色粘質土の地山が広がる。漸移層とは、耕作などの掘削行為、植物あるいは鉄分・マンガン沈着などの自然現象が土層に影響を与え、層位が垂直方向にグラデーション的に変化・変質した部分を指す。本トレンチの漸移層は黄褐色の地山土に耕作土が斑紋状に入りこみ、この層上面での遺構確認は困難な状況にあった。発掘調査は、耕作土・漸移層上部を機械力で排除し、その後は人力で掘削を行いながら、遺構検出をクリアな地山面で実施した。本トレンチの遺構検出面標高は概ね海拔31.9mであり平坦である。

B. 検出遺構の概要（図版25・写真図版28）

検出遺構の内訳は、柱跡約140個、溝5本、土壌約20か所、落ち込み2か所、石敷き1か所となっている。当該地域の一般的状況に比べて遺構密度は濃い。出土遺物の年代は、大きく7世紀後半から8世紀代と12世紀末から14世紀前半とに分かれる。以下に主要遺構の概略を記す。

a. 柱跡

柱跡と思われるピットはトレンチ全体からまんべんなく見ついている。しかしその様相は溝SD0011より北側と南側ではやや異なる。北側の柱跡は、一辺が20～30cmほどの方形のものが多数を占めるのに対し、南側では一辺30～40cmほどの方形掘方のも、直径20～30cmほどの円形掘方のもなどが混在している。これらの柱跡は、いくつかにおいて数個が直線あるいはL字形に結べる箇所が存在するが、さらに規則的に連結でき家屋として提示できるものは現状では検索できなかった。遺物の出土が少ないため年代を確認できないが、埋土などの状況からはその多くは13世紀代を中心とする中世期に所属するものと考えられる。

b. 溝

溝跡については所属年代を確定する遺物にめぐまれないが、埋土などの状況からは中世期の遺構と考えてよい。年代については、SK0006・0007との重複関係より13世紀代に所属するものと想定される。

SD0008 幅40cmほど、長さ7.5mほど、深さ10cmほどの素掘り溝。各溝の中で最も新しい。

SD0011 幅50cmほど、長さ4.5m以上、深さ20cmほどの素掘り溝。各溝の中で最も古い。

SD0013・0014・0015 主溝SD0013とそこに直角に接続する枝溝SD0014と0015からなる遺構である。SD0013は幅1mほど、長さ6m以上、深さ25cmほどの素掘り溝であり、SD0014より東では幅を減じる。SD0014はSD0013の南縁に取り付くL字形の溝で、幅60cmほど、深さ25

cmほどを測る。S D0015はS D0013の北縁に取り付く溝で、幅40cmほど、深さ25cmほどを測る。

c. 土壌

土壌の中では、中世鍛冶に関係すると思われるS K0004・0006・0009が興味深い。これらは最も新しい遺構の一群である。

S K0002・0003・0005 トレンチ北端部で密集して見つかった方形土壌。S K0003は上層から、S K0005では底部から完形に近い土師皿が数枚出土した。13世紀後半から14世紀。

S K0004 東西2.3m、南北2mほどの隅丸方形形状の土壌で、その中央の東西1.3m、南北1.2mの方形範囲に礫が集積する。礫は人頭大から拳大ほどの割石が主体を占め、土師器皿・陶器片などが少量混じる。埋土中からは砂粒やスサを含む焼壁状塊が十数個出土した。礫部の北西隅と南西隅に直径10cmほどの柱穴が認められる。西辺の中程が攪乱され遺構線が乱れる。

S K0006 直径2mほど、深さ40cmほどの不整円形土壌。下層に割石がまとまって存在したが、旧状を保つものではない。14世紀前半。

S K0007 長軸が1.4mほどの楕円形土壌で、東半部の底で土師質羽釜を正置状態で検出した。羽釜の中には数枚分の土師皿片が落ち込んでいた。墓の可能性もある。14世紀前半。

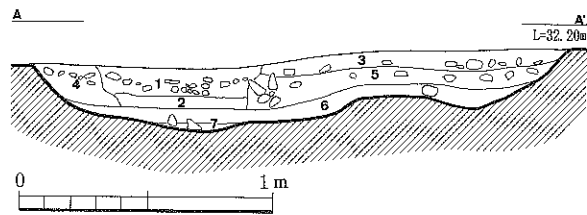
S K0009 東西2m、南北1.8mほどの隅丸方形形状の土壌で、上層に河原石や拳大の割石が集積する。埋土中からは砂粒やスサを含む焼壁状塊が出土した。

S K0012 直径3mほどのスリ鉢状不整円形土壌。下層部から完形を多く含む須恵器群がまとまって出土した。7世紀第3四半期に相当する。上層に13世紀代の遺構が重複する。

d. 落ち込み・石敷き

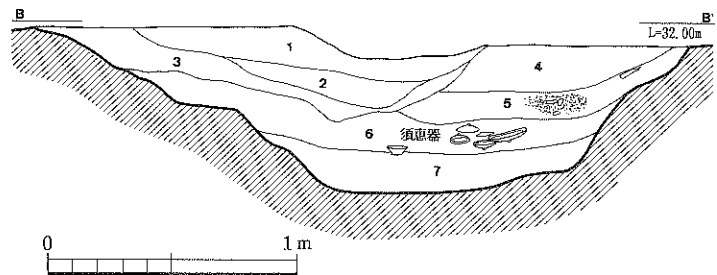
S X0001 不定形な落ち込み。北半部には中世期の浅いくぼみが重なっていたようであるが、表面での遺構判別が困難であったため調査中には両者を区別できていない。もともとの落ち込みをa、重複する中世期をbとする。S X0001 aは自然流路状の落ち込みで、底部分には8世紀の須恵器や礫の散乱がみられた。S X0001 bの正確な範囲は不明。鉄滓が数個出土しているが、S X0001 bに所属する可能性がある。

S X0010 15cmほどの偏平な河原石を8個ほどづつ3列に、やや弧を描きながら配置した遺構。表土層直下で検出された。石の間と周囲には炭が認められた。伴出遺物なし。状況的に中世期の鍛冶関係遺構の可能性が高い。(杉本)



1:黄褐色土(礫・瓦・地山土含) 2:黒褐色土 3:黄褐色土(地山土含)
4:暗灰褐色土 5:黒褐色土(礫・地山土多含) 6:黒灰褐色土(地山土含)
7:淡灰色シルト

第23図 S K0009土層図



1:黄灰褐色土(中世) 2:暗褐色土(中世) 3:暗黄褐色土(中世)
4:暗灰褐色土 5:暗灰褐色土(炭・焼土含) 6:暗褐色土(須恵器含)
7:暗褐色土(大粒の鉄分含)

第24図 S K0012土層図

第5節 菟道遺跡出土遺物

M-IVトレンチ出土遺物は整理箱に約10箱ある。ほとんどが土器類で他に少量の鉄滓がある。土器類は7世紀～18世紀に至るものであるが、大きくは飛鳥～奈良と中世に分かれる。

A. 土器類

a. 飛鳥～奈良時代の土器（図版26・写真図版29；87～117）

87～105はS K0012から出土した須恵器で、ほぼ一括の遺物群である。器種には、杯G/A、同蓋、杯B蓋、杯蓋、高杯、壺Kがある。杯蓋の多くと杯身の半数が完形であり、蓋の数がより多い特徴がある。なお、図化したものの他に高杯脚部1、杯G 3片、杯G蓋3片があるが、いずれも小片である。87は杯Gもしくは杯H蓋である。底部と体部の境を明瞭に持たず、口縁部は内傾気味に立ち上がる。底部はヘラ切りのままである。口径8.6cm。88～90は杯Aで、口縁部は直線的に立ち上がり、底部はヘラ切りのままのもの(88・90)と、ヘラ切りの後ナデているものがある。口径9.8～11.0cm。91は椀Aで、やや径が大きく、丈が高い。口径12.0cm、器高5.1cm。92～103は杯蓋で、いずれも定型化した宝珠つまみと内面にかえりをもつが、法量に4種ある。92～96は口径10.3～10.8cmと最も小型で、杯G/A蓋と考えられる。かえりは短くほとんどのものが口縁より内側に収まり、端部は鋭利である。天井部はナデが最終調整である。97～99・101は、口径12.4～13.2cmと、杯G/A蓋より一回り大きい。形態と調整は杯G/A蓋と同様である。杯B蓋か。100・102は口径15.4cmと前者よりさらに大きい。形態と調整は前2者と同様である。杯Bあるいは皿蓋か。103は口径16.7cmと最大で、宝珠つまみが偏平である。皿かあるいは異なる器種に伴う蓋か。焼け歪みでゆがんでいる。104は無蓋高杯である。口径9.4cm、脚部には透し孔を持たない。105は壺Kで高台の剥離痕を持つ。S K0012出土土器群はこのような諸特徴から、飛鳥Ⅲ期に併行する土器群と理解できる。

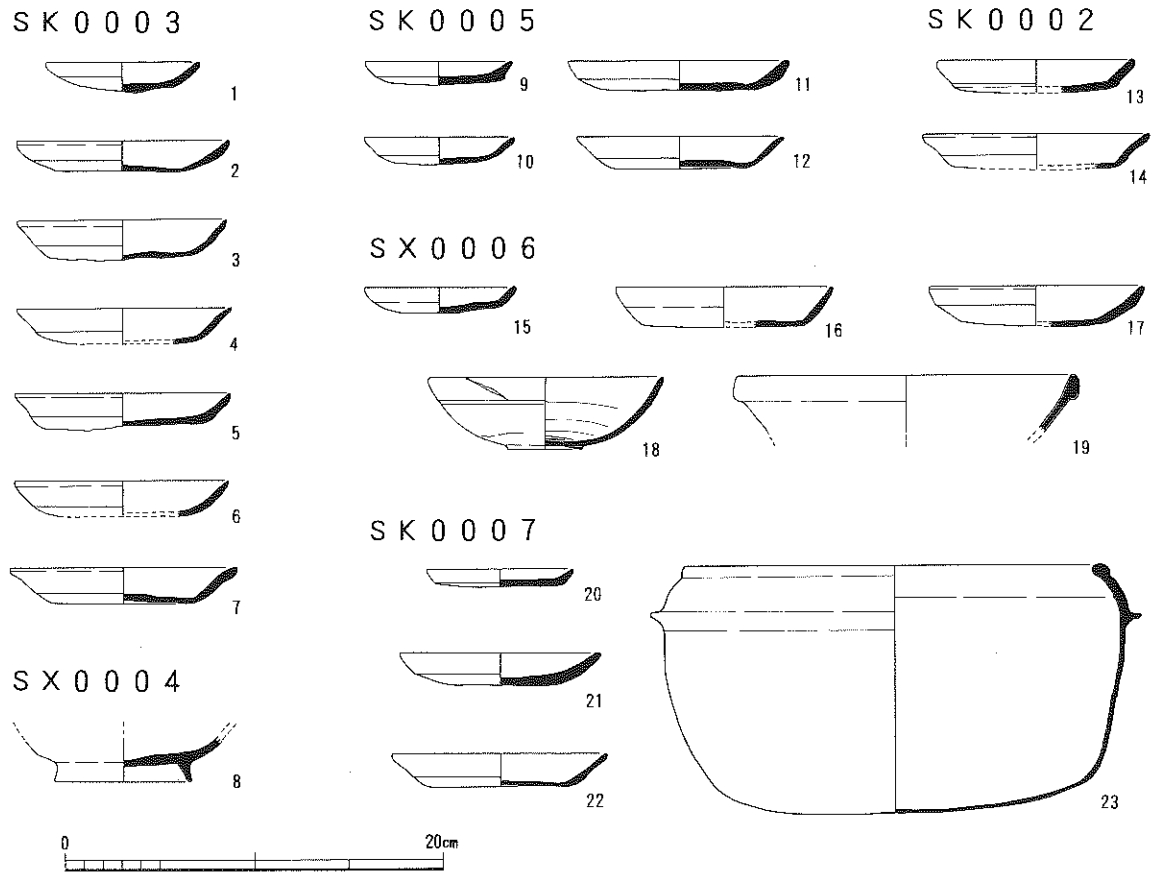
106～117はS X0001から出土した須恵器である。器種には杯G/A蓋、杯B、同蓋、鉢A、鉢D、平瓶、甕C、甕があり、図化したものの他にも須恵器壺A蓋、小型の平瓶、高杯脚部、天井頂部にヘラケズリを持つ杯B蓋、甕、土師器甕口縁片などがある。106は杯G/A蓋である。宝珠が完全に定型化していないもので、S K0012出土のものより小振りであり、最大径からのすぼまりが浅い。天井部はナデが最終調整であり、ヘラ切りによる切り離し時の段差を残す。口径8.0cm。107は内面にかえりを持たない杯蓋で、宝珠は偏平である。口径15.6cm。108～112は杯Bである。口径は順に13.2、15.2、15.8、15.8、17.6cmを測る。器高は108～111が3.8～4.1cmと概ね等しく、112が6.7cmと大型で深い。なお、外面にはカキ目が残る。113は平瓶で、口縁部を除き完形である。底部はヘラ切りのままであるが、体部と底部の境にはヘラケズリの後ナデを施す。114は鉢Aで尖り気味の平底を持つ。底部はヘラ切りのままである。115は口縁が頸部より直線的に立ち上がる甕で、端部には面を持つ。116は鉢D、117は甕Cである。それぞれ口径34.0cmと54.0cm。以上から、S X0001出土の土器は一定の時間幅を持つ土器群と考えてよく、概ね7世紀中頃から8世紀後半代までの幅が想定できる。

(吹田)

b. 中世の土器 (第25図1~23)

遺物の大半は土師器皿である(1~7・9~17・20~22)。色調は赤色系から白色系までまちまちであるが、胎土は砂粒や赤色粒子などを多く含み、ざらつきのある傾向がみられる。ナデ調整は底部内面を一方向ナデしたのち、体部内面から口縁部外面の範囲をヨコナデするという手法をとるものが多い。これは京都で流通する土師器(京都産土師器)と共通するが、全体的に弱く痕跡が不明瞭な点がこれらの特徴である。

1~7はS K0003より出土。1は口径8.0cm、器高1.5cm。外面のナデは一段で比較的明瞭だが、内面はほとんど確認できない。2は口径11.2cm、器高1.6cm。淡赤褐色で精良な胎土。口縁端部はわずかに屈曲するが、面取りの結果かどうかは判断しがたい。内外面のナデ調整は丁寧に施される。3は口径11.0cm、器高2.1cm。底部を一方向ナデしたのち、口縁部をヨコナデするが、そのあとで再び底部の一部分を一度ナデる。口縁部端部は非常に弱い面取りがなされるが、水平方向から工具をあてて施される。底部外面にスノコ状圧痕がのこる。淡茶灰色。4は体部がわずかに外反する形態。ナデ調整は非常に弱めである。口縁部が若干肥厚する。5は口径11.4cmで淡赤褐色。口縁部外面を一段ナデしたのち、端部を弱く面取りする手法が確認できる。6は口径11.2cm、器高2.0cm。外面は一段ナデののち、水平方向から端部をあまく面取りする。体部の内外面のナデは比較的是っきりしている。7は口径12.0cm、器高1.9cm。器壁は0.3cm程度と薄い。平たい底部から外反気味に体部がたちあがる。橙灰色。内外のナデははっきり施される。一段ナデ。8は底径8.5cmを測る灰釉陶器の椀。残存する範囲では施釉はみとめられない。底部糸切り後、高さ1.0cmの高台をはりつけて成形する。見込み部分はロクロナデ。H72³⁾ 窯式あたりの資料か。10世紀後半から11世紀の所産。SK0004出土。9は体部が直線的にたちあがる浅い器形。たちあがりの部分に接合痕があり、底部と体部を別々につくってはりあわせるという成形技法をとる。胎土も砂粒や赤色粒子が非常に多く、赤褐色の色調などほかの土師器皿と異なる点が多い。10は口径8.0cm、器高1.5cm。体部がゆるやかにたちあがる器形である。ナデ調整は全体的に非常に弱く、痕跡はほとんど確認できない。橙褐色で精良な胎土。11は口径11.6cm、器高1.6cm。外面は一段ナデののち、面取りを施すが、水平方向から工具をあてられたために幅広になっている。赤褐色で、ざらつきがきつい。12は平たい底部から外反して体部がたちあがる。胎土には砂粒が多く含まれる。外面のナデは一段ナデ。以上はS K0005出土。13・14はS K0002から出土した。13は口径10.4cm、器高1.8cm。淡黄白色で胎土は精良である。ナデ調整は全体的に弱めであるが、体部外面に一段ナデを施している。14は口径12.0cm、器高1.9cm。器壁は0.3cm程度と本資料群のなかでは薄手である。ナデは明瞭な一段ナデで、口縁部は外反する。7と同タイプと考えられる。口縁部内面に一箇所煤が付着する。15はくすんだ茶灰色を呈し、胎土には黄銅鉱を多く含む。ナデ調整は内外ともにほとんど確認できず、器形もいびつである。16は口径11.4cm、器高2.1cm。器壁は0.3~0.4cmとやや薄手につくられている。クリーム色で、精良な胎土。内外面のナデは非常に弱く、痕跡は判然としがたい。底部は平たく、たちあがりも比較的シャープである。17は口径11.4cm、器高2.2cm。内彎気味にたちあがる器形。くすんだ淡茶灰色を呈する。底部外面に接



第25図 出土土器実測図

合痕がのこり、粘土紐を右回りに巻き上げて成形したことがわかる。18は瓦器碗。口径12.4cm、器高3.8cmを測る。口縁部をヨコナデし、内面にまばらにヘラミガキが施される。体部外面に接合痕が跋行するようにのこる。底部は断面三角形の低い高台が貼り付けられる。炭素の吸着は総じてあまく、内面にはほとんどない。楠葉型Ⅲ-3期⁴⁾か。19は玉縁状の口縁をもつ白磁碗。口径8.9cm。これらはSK0006より出土。20は口径7.8cm、器高0.9cm。底径が極端に大きく、体部が直線的かつ短い形態。見込み中央付近から口縁部外面にかけてをヨコナデするなど、ほかの資料と調整技法を異にする。淡黄橙色。21は口径に比して器高は小さい。ゆるやかに内彎して立ち上がる。ナデ調整は非常に弱い。22は口径11.4cm、器高1.8cm。淡赤褐色で胎土のざらつきはきついが、器壁は0.3cmと薄い。口縁部がわずかに外反し、端部が肥厚する。あるいは面取りを水平方向から施すか。器壁の荒れがひどく、調整はよくわからない。23は大和型の羽釜。口径22.3cm、器高13.1cmを測る。口縁部が内彎し、端部は玉縁状に折り曲げられる。14世紀前半代か。20～23はSK0007から出土した。

出土遺物にはある程度の時期幅がみとめられるものの、遺構単位で比べるとあまり時期差はない。各遺構は同じような時期に形成されたのであろう。年代の把握しやすい土師器でみると、おおむね13世紀後半から14世紀の京都産土師器の特徴がみいだせるものが多く、また瓦器や土師器羽釜の年代観も勘案すれば、資料群の大半はその頃に比定できる。 (中井)

第IV章 谷下り地区の調査

第1節 検出遺構

本章で報告する谷下り地区は概ね130m四方が発掘範囲となっており、地区内の4か所にⅠ～Ⅳトレンチを設定した。面積はそれぞれ830㎡、900㎡、1570㎡、2300㎡である。

地区周辺の地形 谷下り地区近辺の現在の地形は、北西方向に緩かな傾斜を持つ平地である。自然地形を基本的に踏襲しているもので、北へやや傾斜するのは北側を流れる戦川の開析谷の反映である。なお、この戦川は流路を幾度か変えているらしく、Ⅳトレンチでは更新世と思われる流路跡を検出している。また、Ⅰトレンチで検出した不明遺構S X 1002は土堤状遺構であるが、さらに北側へ延長し戦川を横断する可能性がある。

地区北東部では、大きな段差で地形が高くなっているが、これは現代の盛り土であり東へは緩傾斜が続くことがわかっている。また地区西側では、主要地方道京都・宇治線を境に急激な段差があるが、これは段丘崖である。

層序 谷下り地区では場所によって差があるものの、表土から地山上までに約15cm～60cmの土層が堆積している。層序は、最近の水田耕作土である表土（暗灰色砂質土：10～40cm厚）、古い水田耕作土（灰色シルト：10～20cm厚）、床土（暗褐色シルト：10～30cm厚）、遺物包含層（暗茶褐色砂質土：10～40cm厚）、地山（黄色粘質土～灰褐色砂質土）の順である。

大半の遺構は地山上で検出できたが、Ⅰ・Ⅳトレンチでは地山よりも10～20cm上面で平安時代遺構を検出した場所もあり、遺物包含層と判断した層位中には部分的に文化面が存在しているところがある。包含層には古墳時代前期から室町時代までの遺物を含んでいる。包含層上層の水田層の下限時期を特定することは難しいが、古くても近世のものと考えられる。表土の水田耕作土は調査直前まで使われていたものである。

以下、各トレンチごとに遺構の説明を行うこととする。なお、溝の土層図の肩に付されている小文字アルファベットは、巻末図版の各トレンチ平面図と対応している。

A. Ⅰトレンチ（図版28・写真図版30・31）

Ⅰトレンチは、谷下り地区では最も北に位置する東西約45m、南北約18mの調査区である。

検出した主な遺構は、奈良から平安時代の遺構群（堰状遺構、土壇など）と、それ以降で時期不明の遺構群（溝、しがらみ、土壇）がある。堰状遺構の上流側には湿地状のくぼみ地形があり、この肩口の土壇S K 1001からは土器類や銭貨が集中して出土している。

遺構の多くは標高25.3～24.7mの地山面で検出しているが、約10cm上面の暗茶褐色土から輪郭が見えはじめたものもあり遺構面としては複数あることは間違いないが、調査上これらを分層して発掘することはできなかった。付近は南側のⅡ～Ⅳトレンチに比べて1mほど低く、上層遺構面は人為的な盛り土ではなく、自然に土砂堆積が進行する場所で土地利用が継続されたとみるべ

第1節 検出遺構

きだろう。暗茶褐色土は遺物包含層で、奈良時代の遺物を含んでいる。なお、湿地状のくぼみ地形は埋没後も湿潤な環境にあったらしく、地山そのものがグライ化していた。

遺構は、ほとんどが東半部に展開し、西半部ではみられない。西半部は表土下15cmと遺構面が浅いため、すでに削平された可能性が高い。また、東半部南側では多数の定型・不定形土壌が存在するが、建物等になるものは認められなかった。概ねが奈良～平安時代に属するとみられる。なお、炉壁とみられるスサ入りの粘土塊小片が整理箱に半分ほど出土しており、付近で小鍛冶が行われていた可能性がある。

a. 土 壙

S K1001 5×3mの南北に長い楕円形土壙である。深さ約50cmで皿状である。くぼみ地形肩の延長上にあたる可能性がある。埋土内には礫の円形集積部があったほか、完形の緑釉皿や紐で繋がれていたと思われる9枚の隆平永寶が出土している。9世紀から10世紀頃であろう。

b. 溝

S D1003 幅0.8m、深さ30cmの北西方向の溝である。出土遺物はない。

S D1004 a・b 幅0.4m、深さ10cmの東西方向の溝である。溝S D1004 bの南肩沿いには、前後2列で直線的に多数のしがらみが施設されている。S D1005よりも後出の遺構である。

S D1005 幅1.8m、深さ15cmで、東西方向に流路をとる溝である。溝底の高さは両端でほとんど変わらない。溝の南肩沿いには、S D1004 b同様前後2列でしがらみが巡っている。出土遺物がなく時期確定はできないが、SD1004・SD1006に先行する遺構である。

S D1006 幅2m、深さ20～50cmの南北方向の溝である。埋土の状況からは、溝そのものは近現代に掘削されたとみられるが、古い時期のものが重複していた可能性はある。

c. 不明遺構

S X1002 礫を多く含む堤状の遺構である。調査範囲内では片側の斜面部のみ検出している。傾斜面は、約3mの幅で比高差が約40cmほどの緩いものである。斜面の表面に河原石が多くみられた。特に並べられた様子はない。石の大きさは拳大から人頭大まであり、形は丸味を帯びつつも角の張った河原石が多用されている。この河原石面からは、白鳳期の軒丸・軒平瓦や丸・平瓦とともに8～10世紀の土器類も出土している。

遺構東側には湿地化したくぼみ地形が広がる。東西20m内外、南北12m以上で、深さは約40cmと比較的浅い。調査区内では遺構南半の一部を検出したにすぎず、平面形や範囲など全容は明らかでない。

埋土には有機質の堆積はみられないが、土壌そのものがかなりグライ化している。くぼみ南側の肩口にあたる土壌S K1001からは、土器類が比較的まとまって出土しているが、底部からはほとんど出土していない。

なお、調査終盤においてS X1002の範囲を確認するため、北側へ約10m、幅2mのトレンチ拡張を行っている。ここでは遺構はほぼ直線的に続くことが確認できており、この先を流れる戦川へと向かう状況となっている。

B. II トレンチ (図版29・写真図版32~34)

II トレンチは、谷下り地区ではほぼ中央に位置する南北90m、東西10mのトレンチである。

検出した遺構は、竪穴住居・掘立柱建物・土壇などの古墳時代中期の遺構群と、飛鳥後半～奈良時代の溝に大別できる。

遺構はすべて表土下約0.5mの黄褐色粘質～シルト質の地山上で検出しており、その標高は概ね26.0mではほぼ平坦である。なお、6m北側のI トレンチでは標高約25.0mと大きく下降しており、本トレンチ北辺付近が地形の変換点であることがわかる。

遺構の遺存状況は比較的よいが、竪穴住居の遺存状況からは、少なくとも0.3m程度は上面削平を被っているものとみられる。また、トレンチ南北を縦断する近現代耕作溝が遺構の一部を破壊している。遺構密度は南側では低く北側で高い。

a. 竪穴住居

S B 2001 一辺5.0×4.0m以上の方形竪穴住居である。深さは約0.2m遺存していた。

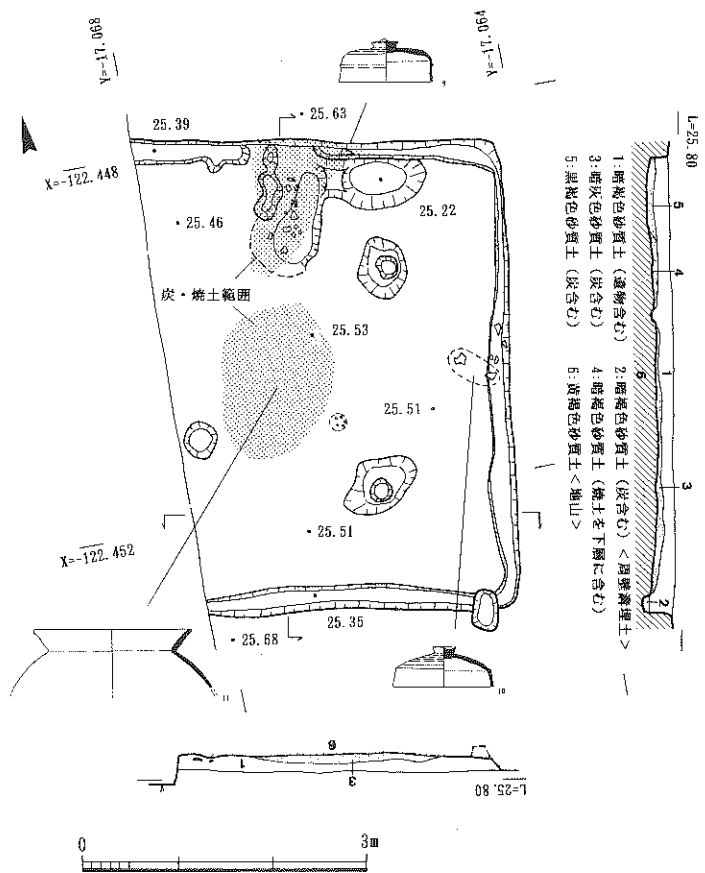
住居の土層は大きくは2層で、上から暗褐色砂質土、暗灰色砂質土で地山となる。前者は遺構埋土である。後者は、後述するカマド跡と推測される炭・焼土がこの面から密に分布することや、周壁溝埋土とは異なっていることから、貼り床である可能性が高い。

住居には、ほぼ中心部と北壁中央付近の2か所に、炉跡・カマド跡とみられる炭・焼土分布範囲が存在する。2か所ともに地山面まで被熱により赤変している。

2か所のうちの前者は、南北に長い楕円形に炭・焼土が分布しており、長辺側は約1.5mを測る。床面下約0.15mの地山面では赤変範囲が直径約0.6mの範囲で存在する。ただし、地山面には掘削は及んでいない。

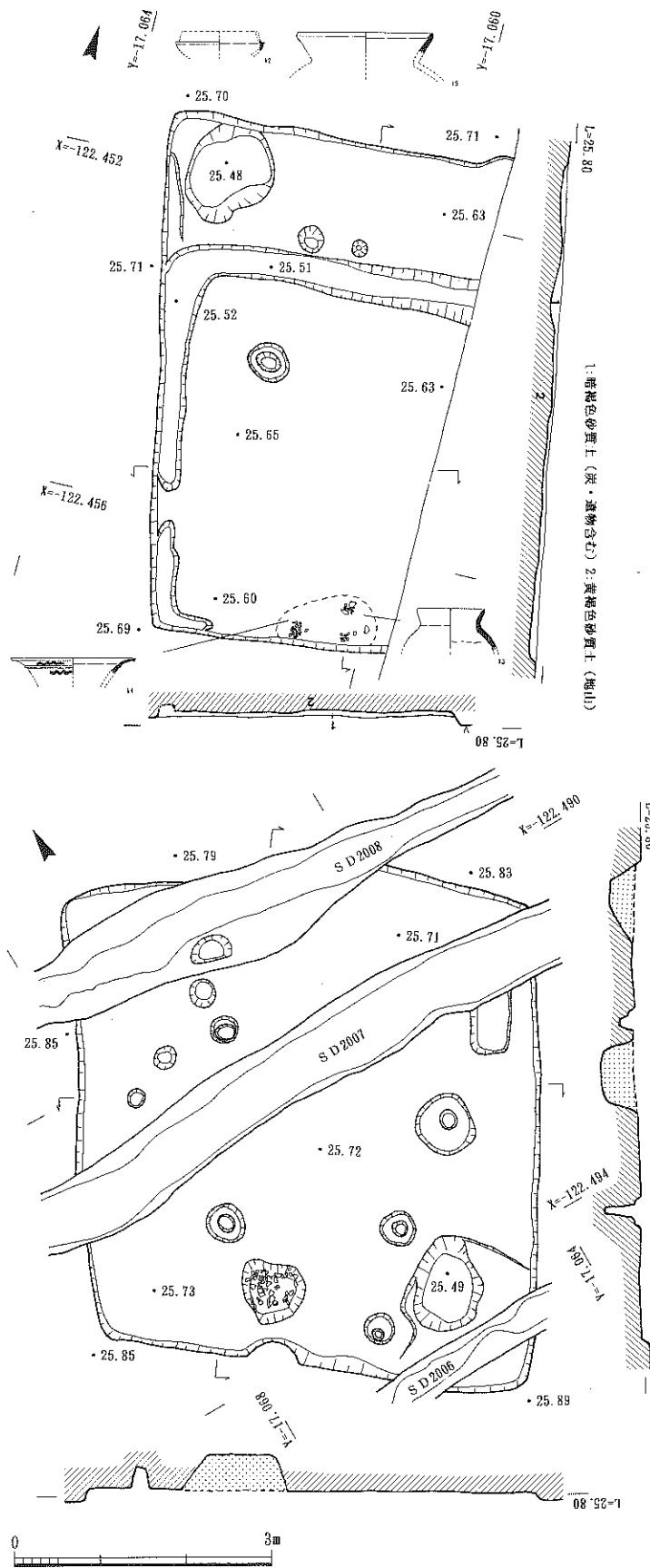
後者は、北壁から1.5×1.0mの範囲で半島状に炭・焼土が分布している。約0.15m下の地山面では赤変範囲が直径約0.5mあり、面は土壇状に掘りくぼめられている。この土壇とその北東の2か所の土壇はつながって北壁東隅へ伸びている。煙道となるものか。なお、土壇と周壁溝とはつながっていない。前者が炉、後者はカマド跡と推定できる。

周囲の3壁沿いには周壁溝が巡っている。幅0.2m、床面から深さ約0.2



第26図 S B 2001実測図

第1節 検出遺構



第27図 S B 2002・2003実測図

mである。北壁では、炭・焼土範囲（カマドか）の部分のみ溝がとぎれている。

また、支柱穴を3か所で確認している。柱痕跡は直径0.2m、深さ0.6mである。

出土遺物は土師器・須恵器がある。床面上、炭・焼土下、周壁溝埋土内などから出土している。5世紀。

S B 2002 一辺4.0m以上×6.0mの方形竪穴住居である。深さは約0.15m遺存していた。

住居の土層は単層で、暗灰色砂質土である。遺構そのものの深度が浅いため、この土層が貼り床となるか埋土となるかは判断できない。

西壁沿いには、周壁溝とみられる溝が巡る。この溝は、南西隅から4.5m付近で東側に折れて延長している。状況的には、住居の拡張が行われたようにもみえる。北西隅には、直径0.1m、深さ0.1mの皿状の土壌が存在する。

住居内には柱穴が1か所ある。支柱穴のひとつである可能性が高い。柱痕跡は直径0.25m、深さ0.2mである。

出土遺物は、土師器・須恵器の土器類がある。多くが土師器甕体部片であった。S B 2001とはほぼ同時期で、5世紀のものである。

S B 2003 一辺5.2m×5.2mの方形竪穴住居である。深さは約0.1

～0.2m遺存していた。支柱穴を3か所で確認している。

この住居でもカマドや炉の痕跡は確認できなかった。ただし、重複する溝によって失われている可能性は考えるべきである。柱痕跡は直径0.2m、深さ0.6mである。

住居西壁付近には、土師器片を含む皿状の土壌があった。1～2個体分の甕体部片と高杯片であった。他にも住居内遺物には土師器や須恵器があるがいずれも小片である。5世紀。

b. 掘立柱建物

本トレンチでは、総数5棟の掘立柱建物を確認している。これら建物群の柱掘方はそろって円形であり直径も小さく、小屋的な建物であったことが推測できる。どの柱穴からも時期を特定できる遺物は出土していない。遺構状況からは、奈良時代掘立柱建物とは併存しない可能性が高く、竪穴住居と併行する古墳時代中期のものと考えられる。

SB2004 桁行3間(4.0m)以上×梁間2間(3.5m)の東西棟建物である。建物東辺はトレンチ外へ続くものとみられる。柱掘方直径は約0.3mである。柱痕跡は確認していないが、桁行梁間とも柱穴は直線的に通っている。

SB2010 桁行2間(3.5m)×梁間2間(3.0m)の東西棟建物である。柱掘方は直径0.3m、深さ0.2～0.3mである。南辺中央の方形掘方は、奈良時代遺構が重複している可能性がある。

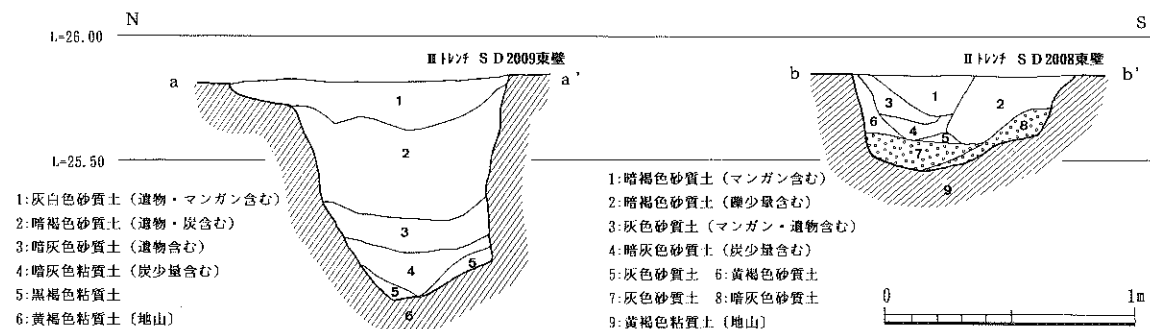
SB2011 桁行2間以上(3.5m)×梁間2間(4.2m)の東西棟建物である。梁間距離が桁行距離より長い点が他の建物とは異なっている。本来は2×2間の建物で、桁行と梁間が逆転するのかもしれない。柱掘方直径約0.5m、深さ0.2mである。柱筋(柱穴)は概ね直線的に通る。

SB2012 桁行1間以上(1.8m)×梁間2間(3.5m)の東西棟建物である。全ての筋に柱が立つ総柱建物であり、2×2間規模になると推測される。桁行と梁間の距離はほぼ等しい。柱掘方直径約0.4m、深さ0.4mである。

SB2013 桁行3間(5.2m)×梁間1間以上の南北棟建物とみられる。ほとんどが調査地外となる。柱掘方直径約0.5m、深さ0.2mである。

c. 溝

本トレンチでは4条の溝を検出している。後述するように、これらはIVトレンチで検出している飛鳥後期から奈良時代溝群(SD4006・4007・4008・4009)の延長上であり、IIIトレンチ溝群(SD3006・3007・3008・3009)へとつながるものである。どの溝も土器類を含んでおり、7世



第28図 SD2008・2009土層図

第1節 検出遺構

紀後半から8世紀にかけて機能していたと考えられる。

S D2006 幅0.6~1.0m、深さ0.5mの東西溝で、断面はU字状である。

出土遺物には、須恵器・土師器があるが少量である。

S D2007 幅1.0m、深さ0.3mの東西溝である。他の3条に比べやや浅く、断面は緩やかなU字形を呈する。

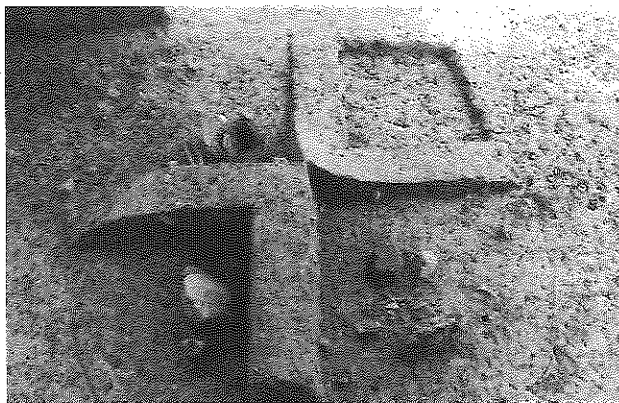
出土遺物には、須恵器・土師器があるが少ない。

S D2008 幅1.0m、深さ0.4mの東西溝である。やや西北西に向かうため、Ⅲトレンチ付近でS D2009と合流する可能性がある。埋土は、土色に小差が認められるものの、基本的には暗褐色系の砂質土で埋没している。

出土遺物には、土師器・須恵器がある。溝底部にほぼ接して須恵器甕(61)が、土圧で割れつつも完形で出土している。溝底部に接しているが、口縁部を横にしているため投棄されていたものと考えられる。ただし体部最大径40cmの甕は溝をほとんど塞いでしまうため、廃棄時には機能していなかった可能性が考えられる。

S D2009 幅1.0m、深さ0.6mの東西溝である。埋土は5層に分層できるが差異は少ない。4条の中では、一番遺物を多く含んでいる。

出土遺物には、土師器・須恵器がある。これらは、溝の上層から底部にかけて出土しているが、特に上層での集中が認められた。この集中部間で接合する破片が多く、溝がある程度埋没した後に廃棄された可能性がある。このような埋没状況は後述するS D3009と類似しており、集中部ま



第29図 S K 2005検出状況

では比較的短期間で埋まったのではないかとみられる。それ以下では、比較的小片が疎らに出土する状況であった。なお、底部からは、完形の須恵器甕(82)が61同様、口縁部が横になった状態で出土している。

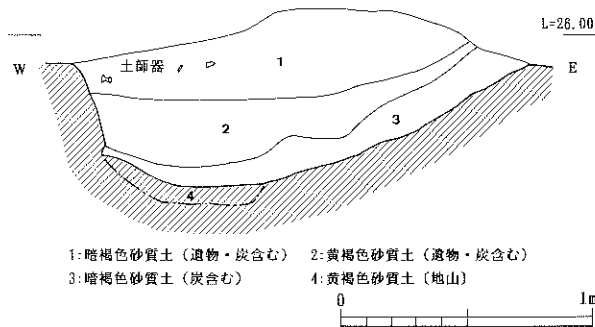
d. 土 壌

S K 2005 直径1.8m、深さ0.7mの隅丸方形の土壌で、調査区最南端の遺構である。

土器類を多く含んでいたが、どれも破片化しており、完形になるものはなかった。

埋土には炭が少し含まれていたが特段の特徴はみられない。

出土遺物には土師器・須恵器がある。5世紀。



第30図 S K 2005土層図

- 1:暗褐色砂質土(遺物・炭含む)
- 2:黄褐色砂質土(遺物・炭含む)
- 3:暗褐色砂質土(炭含む)
- 4:黄褐色砂質土(地山)

C. III トレンチ (図版30・31・写真図版35～40)

III トレンチは、谷下り地区では最も西に位置する南北90m・東西10～25mの調査区である。

検出した主な遺構は、古墳時代中期の竪穴住居と、飛鳥後期から奈良時代の掘立柱建物、溝、土壇、柵列、不定形土壇などの遺構群である。なお奈良時代の遺構については、谷下り地区中で最も遺構密度の高い場所である。

遺構はすべて表土下0.6mの黄褐色粘質からシルト質の地山上で検出した。検出標高は概ね25.0～25.3mであり、北に向かって緩やかに下降する平坦地である。

遺構の遺存状況は、谷下り地区のトレンチの中では良好であるものの、包含層に多くの遺物が含まれていることから、一定の削平を被っていることは間違いない。また、トレンチ南北方向に縦断する近現代の耕作溝によって遺構の一部が破壊されている。遺構分布状況は、II トレンチ同様南側は稀薄で北側では密集している。

なお、トレンチ北側では、時期や性格が判断できなかった柱穴・土壇が約200か所存在した。これらの多くは、状況的には掘立柱建物群と併行する奈良時代あるいは古墳時代中頃に属するものと思われる。包含層に含まれる遺物は、9割以上が7～8世紀の遺物で占められており、あとは古墳時代前期の布留甕や中・後期の須恵器類、中世の瓦質火鉢などの破片が認められる。

a. 竪穴住居

S B 3001 一辺3.5m×3.2mの方形竪穴住居である。深さは約0.3mである。住居のほぼ中央部には炭・焼土が存在した。炉跡とみられる。分布範囲は直径0.6mである。炉跡は地山面より0.15m上面で検出したが地山面には痕跡はない。この状況から、住居には貼り床が行われていたことが推定される。また、被熱による地山の顕著な赤変は確認されず、炉の使用回数が少なかったか、もしくは高温とならなかったとみられる。

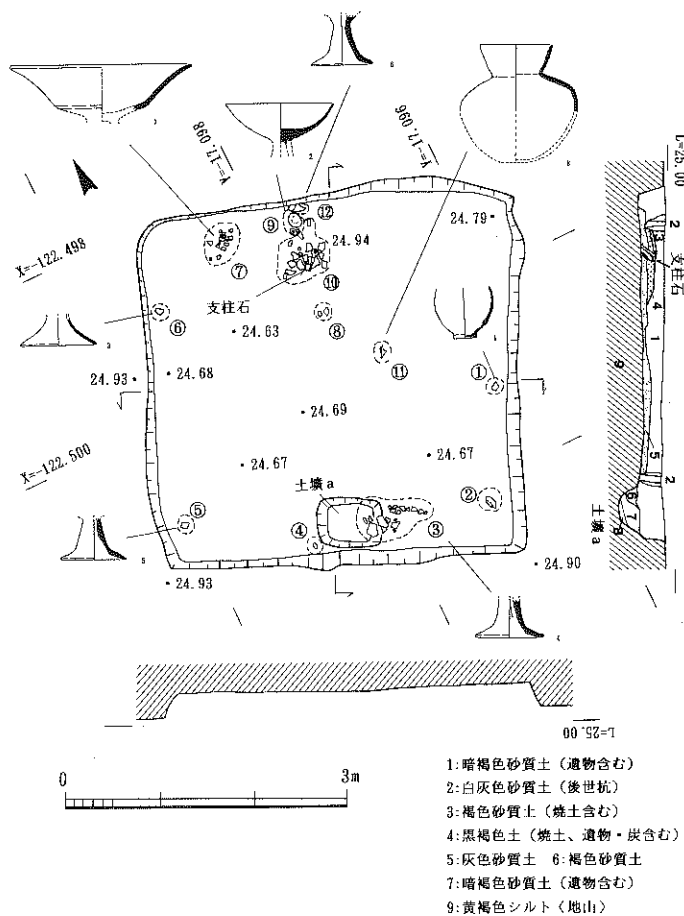
この住居では支柱穴跡は確認できなかった。そのため、小屋組を支える柱は掘方を伴わないか、もしくは貼り床の床厚範囲のごく浅い埋め込みであったと考えられる。

遺物には須恵器甕片が数片あり検出面付近から出土しているが、時代を特定できるものではない。後述のS B 3002・S B 4014と規模や構造・方位などに類似性が認められることから、同時期の5世紀代の遺構である可能性が高い。

S B 3002 一辺4.1m×4.0mの方形竪穴住居である。深さは約0.4m。住居内の土層は大きくは2層で、上層より暗褐色砂質土、灰色砂質土で地山面となる。灰色砂質土にはカマド支柱とみられる立石が埋め込まれているため、この層は貼り床であると理解できる。また、土層壁をみると北壁沿いではこの層が途切れ、上層の埋土が落ち込んでいる状況があるため、平面的には検出できていないが周壁溝を巡らしていたものと判断できる。

住居北壁中央付近には、炭・焼土が南北0.8m、東西0.6mの範囲で分布していた。灰色砂質土上面で検出しており、その厚さは約0.1mである。支柱石の存在よりカマド跡と考えられるが、粘土壁や煙道などの構造物は検出していない。加えて炭・焼土の範囲自体が住居の北壁から離れている点に着目したい。この状況は通常の作り付けカマドの構造を示すものではなく、炉のよう

第1節 検出遺構



第31図 SB3002実測図

S B 3003 一辺5.0m×4.8mの方形竪穴住居である。深さは約0.3m遺存していた。埋土は単層で、床面は地山である。住居北壁中央付近には、カマド跡とみられる炭・焼土の分布がある。範囲は南北1.1m×東西0.9mで、北壁から南へ舌状に張り出すような形である。周囲は被熱赤変していない。ここでも粘土壁や煙道などカマド構造物の検出はなく、支柱石も遺存していなかった。

この住居では4か所に支柱穴が存在した。掘方直径には大小あるものの、柱痕跡は直径約0.2mで深さは約0.2~0.5mである。また、住居のほぼ中心の柱穴もこの住居に伴う可能性がある。

東西南の3壁沿いには周壁溝が存在する。幅は平均0.4mであるが、東側でやや膨らみを持つ。深さは床面から約0.15mと比較的浅い。埋土に遺物はなかったが、住居埋土との差異は認められないため、廃絶後に埋まったものとみられる。なお、溝が北側に巡らないのは、カマドの存在によるものと考えられる。また、南壁中央には、入り口とみられる半円状の張り出しが存在する。この部分では周壁溝がとぎれ、床面が突出部までなだらかにつながっている。

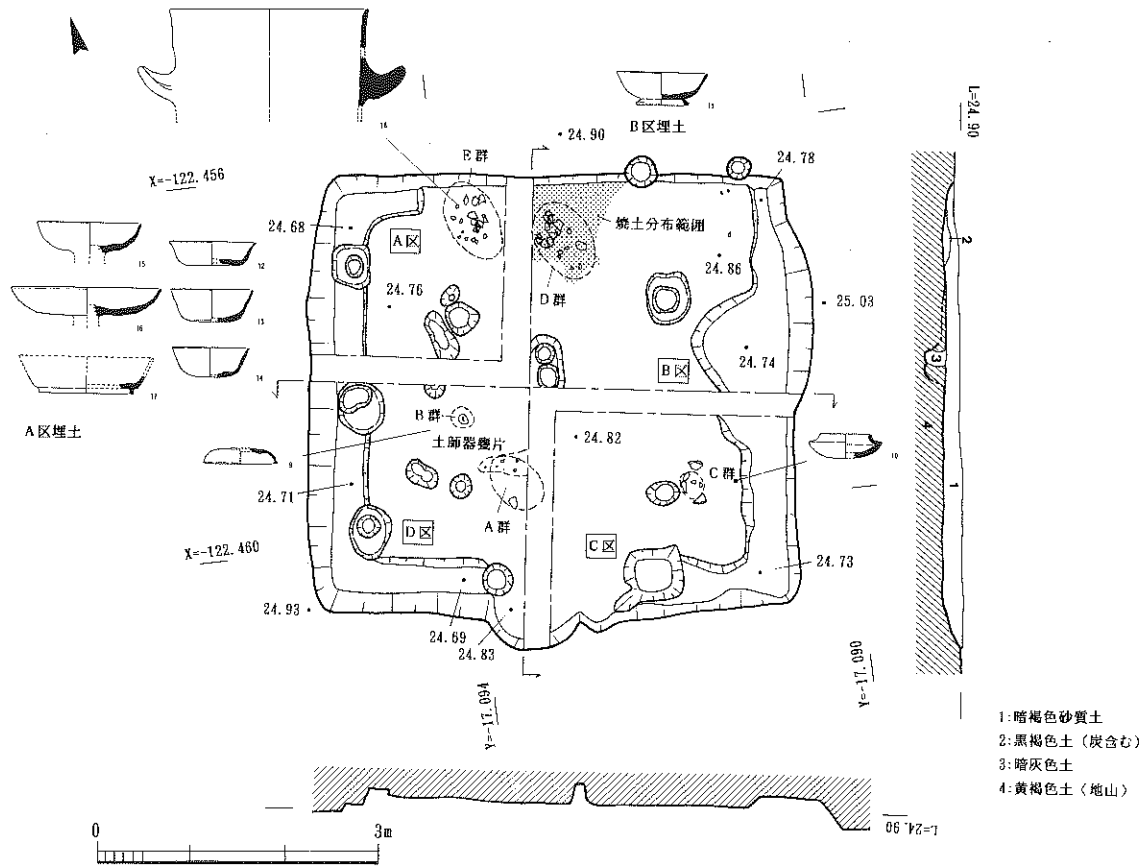
出土遺物は、須恵器・土師器が整理箱にして2箱あり7世紀中葉から後葉のもので占められる。各遺物は、住居内を4区画に分けて取り上げ、床面上にまとまって存在したものはA~E群として取り上げを行った。土器類は概ね床面上で出土しており、この住居は7世紀中葉に廃絶した蓋然性が高い。なお、遺物中には内面に横方向のヘラケズリを持つ土師器甕が1点含まれており、古墳時代前期に溯る遺物である可能性を含んでいるが、先の判断を重視し、これは混入物である

な構造のものか、移動式カマドの痕跡の可能性が想定できる。また、周囲は被熱赤変していないため、使用頻度は低い。

住居南壁中央には、貯蔵穴とみられる隅丸方形の土壇を検出している。0.8×0.5mで、深さは貼り床面より0.4mである。埋土には細片化した遺物がまんべんなく含まれていた。

またS B 3001同様、この住居でも支柱穴痕跡が確認できなかった。

出土遺物には、土師器、須恵器がある。概ね地山より0.1~0.2m上面で検出しているため、ほぼ床面上の遺物群と理解してよい。各々は、住居内にまとまりをもって散在しているが、炭・焼土範囲上に特に集中していることが指摘できる。5世紀中葉。



第32図 S B 3003実測図

としておきたい。

b. 掘立柱建物

本トレンチでは、総数7棟の掘立柱建物を検出している。このなかでも、トレンチ北方に集中する6棟は、一辺約1mの方形から隅丸方形の柱掘方を持つ共通性がある。

これらトレンチ北方の各掘立柱建物の柱掘方には須恵器や土師器片が含まれており、概ね奈良時代のものであることが認められるが、時間幅を限定できるような遺物は出土していない。そのため、トレンチ中央の溝S D 3006～3009の包含遺物の時間幅である7世紀後葉から8世紀が、建物群の機能していた期間と考えたい。なお、この6棟以外にも、まだ数棟存在する可能性は残している。

トレンチ中央付近のS B 3016にも、柱穴掘方には遺物は含まれていないため、正確な時期は不明である。ただし、S D 3008に先行するため、トレンチ北方建物群とは時期を異にしよう。

S B 3010 a S B 3010は、ほぼ同じ場所で2棟の建物が重複している。建て替えが行われた可能性が高い。先行するものをS B 3010 a、後出のものをS B 3010 bとする。

S B 3010 a は桁行3間(6.5m)×梁間2間(4.0m)以上の南北棟建物である。柱痕跡は確認できなかったが、掘方心々間距離は概ね平均しており、桁行2.2m、梁間2.2mを測る。掘方は一辺1mの隅丸方形で、深さは0.15～0.25mである。建物東側は調査外へ続くが、S B 3010 bの規模と比較すれば、梁間は2間で収まる可能性が高い。

第1節 検出遺構

S B3010 b 桁行4間(8.6m)×梁間2間(4.3m)の南北棟建物である。S B3010 aより桁行が1間分大きく、谷下り地区では最も大きな建物である。

柱間は、桁行2m、梁間2.2mではほぼ平均し、かつ柱筋は一直線上に通っている。柱痕跡の径は0.2~0.4m、深さ約0.4mで、掘方は一辺1mの方形である。

S B3011 桁行3間(5.5m)×梁間2間(3.5m)の南北棟建物である。柱痕跡はいずれも掘方のほぼ中心で検出しており、柱筋は一直線上に通っている。柱間も桁行2m、梁間1.8mではほぼ平均している。柱痕跡は直径0.3mで、深さは0.5mである。掘方は一辺0.7mの隅丸方形である。

S B3012 桁行2間以上×梁間2間(3.5m)の南北棟建物である。ほとんどの部分が調査区外となる。掘方心々間は、梁間で1.5mと2.0mでありやや異なっている。掘方は一辺0.7mの隅丸方形で、深さは約0.5mである。

S B3013 桁行3間(4.5m)×梁間2間(3.5m)の南北棟建物であるが、柱筋にすべて柱が立つ総柱建物であり、他の南北棟建物と構造が異なっている。S B3014に先行する建物である。柱痕跡は確認できなかったが、掘方は一辺0.6mの隅丸方形で、深さは0.3mである。掘方心々間は桁行で平均1.4m、梁間で同1.5mを測る。この建物では、桁行柱筋はほぼ直線的に通るが、梁間柱筋は通らないことがわかる。

S B3014 桁行3間(4.8m)以上×梁間2間(4.3m)の東西棟建物である。S B3013に後出する建物で、西側へ続くことを考慮すれば最も大きな建物の一つとなる。

柱間は掘方心々間で桁行2.5m、梁間2.2m、柱痕跡直径は0.2~0.4m、深さは約0.6mである。掘方は一辺1.2mの方形で、調査区でも大型建物である。

S B3015 桁行3間(6.0m)×梁間2間(4.3m)の南北棟建物である。S B3011とほぼ同一方位軸をとる。柱間は桁行き両端が2.4m、中央が2.0mとやや不均一であるが、対の柱間も同幅であり、中間の梁間筋に柱を通して直線上にのる構造となっている。柱痕跡は直径0.3mで、深さは0.4mである。掘方は一辺0.8~1.0mの方形である。

S B3016 桁行2間×梁間2間の正方形総柱建物である。遺構図上では、建物南東隅柱穴は溝S D3008を切り込んで表現されているが、溝の埋土との差異が明瞭でなく逆の可能性が高い。掘方心々間は平均1.8mで、形状は一辺0.7mの隅丸方形を呈する。深さは約0.5mである。

S B3017 桁行2間(4.2m)×梁間2間(3.3m)の南北棟建物である。S B3011・3015とほぼ同一方位軸をとる。柱間は桁行で2.2m、梁間で1.5mではほぼ平均しており、柱筋も通っている。柱痕跡は直径0.2m、深さは約0.4mである。掘方は他の建物群と比べて規模が小さく円形である。直径0.5m。

c. 柵列

S A3018 南北方向に並ぶ9か所の柱穴状ピットである。柵列としたが、柱筋は直線的に通らない。掘方心々間距離は平均0.7mと比較的密である。直径0.15m、深さ0.2mの柱痕跡を2カ所で検出している。掘方は直径0.35mの楕円ないしは円形である。

d. 溝

このトレンチでは6条の溝を検出しているが、このうち北側の4条（SD3006・3007・3008・3009）は、IV・IIトレンチで検出している飛鳥後期～奈良時代溝群（SD4006-2006・SD4007-2007・SD4008-2008・SD4009-2009）の延長上にあるものである。

ただしこれら4条の溝は、後述するようにそれぞれ単純にはつながらないようで、SD3008と3009が途中で合流していることがわかる。そのため、東側からの流路は、SD2008と2009が合流して再び分岐する可能性と、SD2009が2条に分岐しSD2008・2007が合流してSD3007となる可能性の2者が想定できるが、前者の方が蓋然性が高い。また、SD3007もトレンチ外でSD3008に合流する可能性がある。

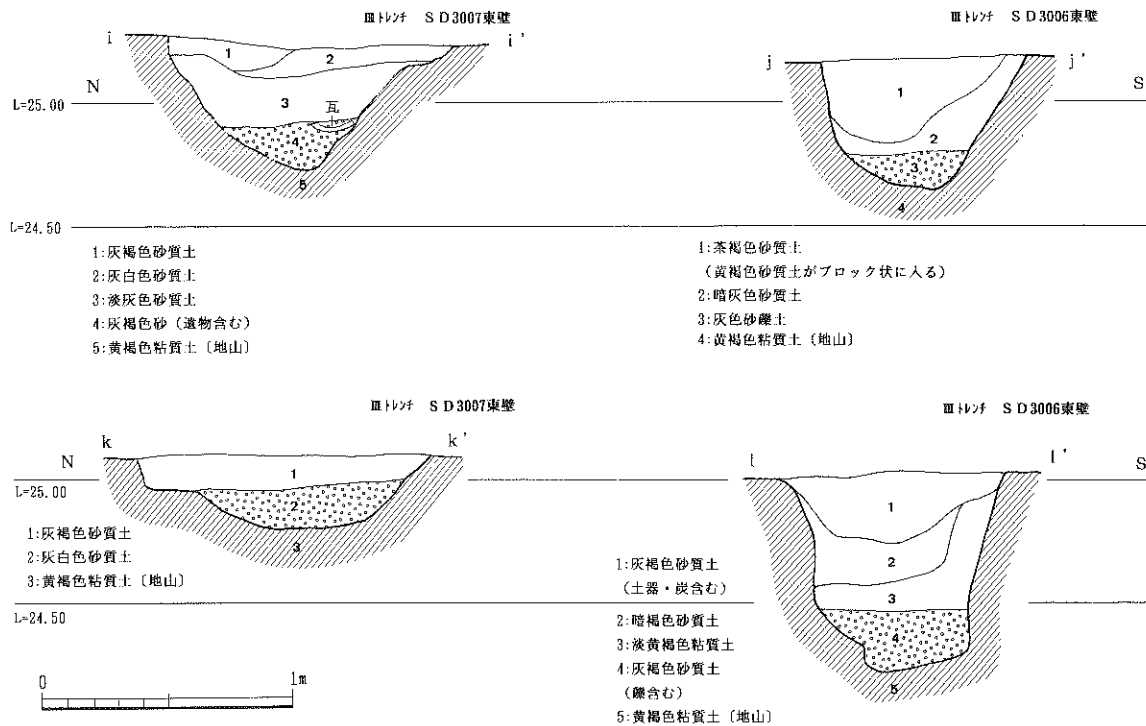
SD3004 幅0.4m、深さ0.1mの浅い東西溝である。地山よりも上層から遺構の掘り込みが認められるため、近世～近代に属するとみられる。遺物の出土はない。

SD3005 幅0.4m、深さ0.1mの浅い東西溝である。SD3004同様、比較的新しい時期に掘削されたものとみられる。埋土からは土錘が1点出土している。

SD3006 幅1.0m、深さ0.4～0.7mの東西溝である。断面U字状で間口が狭く深い印象を与える。水の影響を受け、溝底や側面は凹凸が著しい。

埋土は概ね3層で、最下層には粒子の粗い砂礫が堆積している。上層の2層は分層しているものの質はほぼ近似しており、砂礫層以上は黄褐色土をブロック状に含みつつ堆積している。短期間に埋まったとみられ、人為的に埋め戻された可能性がある。

出土遺物には、土器類・瓦類・磚がある。土器類は完形に近いものが含まれている。これらを



第33図 SD3006・3007土層図

第1節 検出遺構

含め、遺物はほとんど溝の底に接して出土している。7世紀後葉から8世紀中葉。

S D3007 幅1.2~1.8m、深さ0.3~0.5mの東西溝である。断面は皿状で、S D3006と比べ底や側面はなだらかである。

埋土は大きくは2層で、最下層には粒子の粗い砂礫が堆積している。遺物は主に溝の底からこの砂礫層にかけて含まれているが、肩口付近からも出土している。

出土遺物には7世紀後葉の土器類があるが、量は少なく破片化している。

S D3008 幅0.8m、深さ0.3~0.7mの北東から西南方向へ流れる溝である。トレンチ東付近でS D3009から分岐している。断面はU字状で、底や側面は比較的凹凸が少ない。

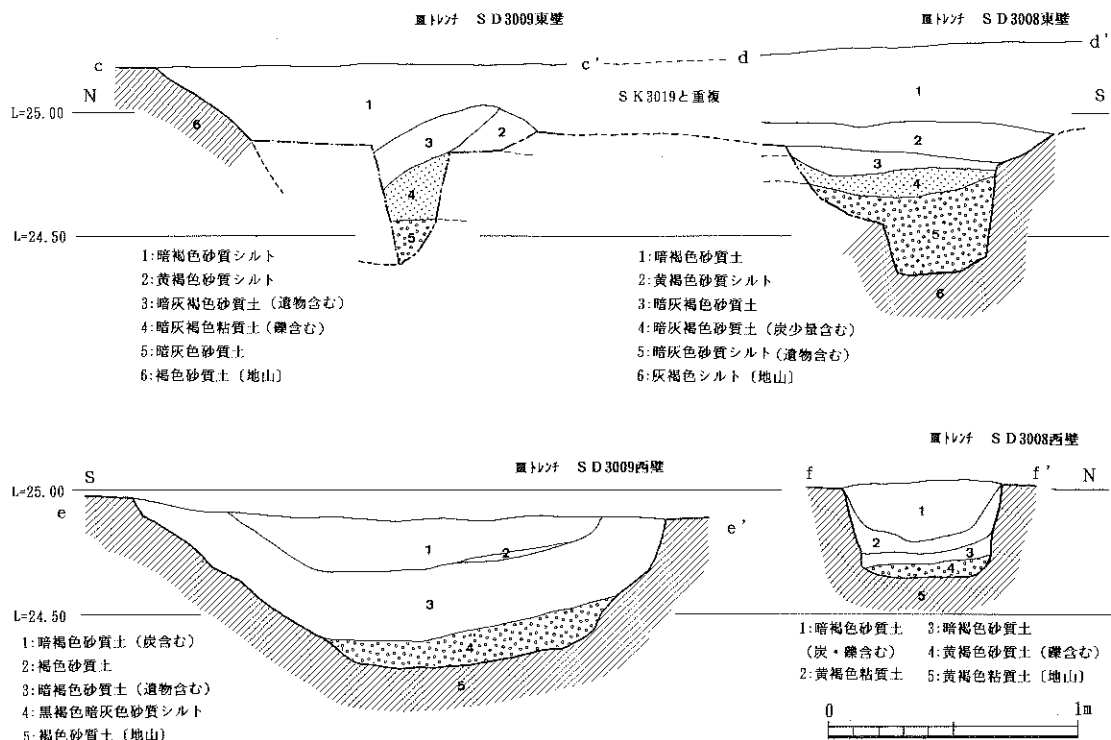
なお、この分岐点付近では、方形土塼S K3019と重複しており、溝の北側肩ラインを明瞭に検出することができなかった。S D3009との合流部分が若干広がる可能性が高い。

埋土は最下層の粗い砂礫と、遺物を含む砂質土の2層である。遺物は溝の底から須恵器杯Bが2点、その他は肩口付近から出土している。

出土遺物には7世紀後葉の土器類がある。包含量は少ない。

S D3009 幅1.2~2.5m、深さ0.5mの東西溝である。断面はU字状である。この溝には、多量の遺物が含まれていた。なお、この溝の東端は、南へ広がってS D3008と合流している。この合流部には、他所では認められない碎石状の小石が密集していた。この範囲はさらに南側へ広がっている。

溝埋土は、全体では概ね3層である。最下層には粒子の粗い砂質土、直上に角礫・遺物を含む粘質土、遺物を含む砂質土の順に堆積している。遺物は、下層から上層までいずれの層位にも含



まれていた。

遺物は、層位ごとの取り上げは行えなかったが、まとまって出土した段階で出土地点と標高を記録しつつ取り上げた。それを立面図に転換したものが第35図である。ここからは、遺物は中位に集中する状況が読みとれ、溝が一定埋没した後に集中して投棄された様相が窺える。

トレンチ東端～半ばに分布する角礫群は、溝の中位にあたる標高24.7m付近で密集している。礫間には土が詰まっていたが、礫同士の密度は高い。ただし、並べられている状況にはなかった。また、トレンチ東端では溝底付近まで密に詰まっているが、西側では中位付近にのみ包含されている。状況的には礫群は主にトレンチ東外側に分布しており、その一部がS D3009内で検出されたものと考えられる。なお、この礫群が構造物の部材であったか否かについては判断できない。

礫は、円礫が割れて角張ったものがほとんどであり、被熱によって赤変しているものが含まれる。なお、礫群の赤変原因は不明であるが、礫群の範囲に接した西側には、ほぼ完形に復したカマド片が集中している状況にあった。

出土遺物には、7世紀後葉～8世紀代の土器がある。須恵器類が多く土師器は少ない。完形に近い遺物も含まれている。

e. 土 境

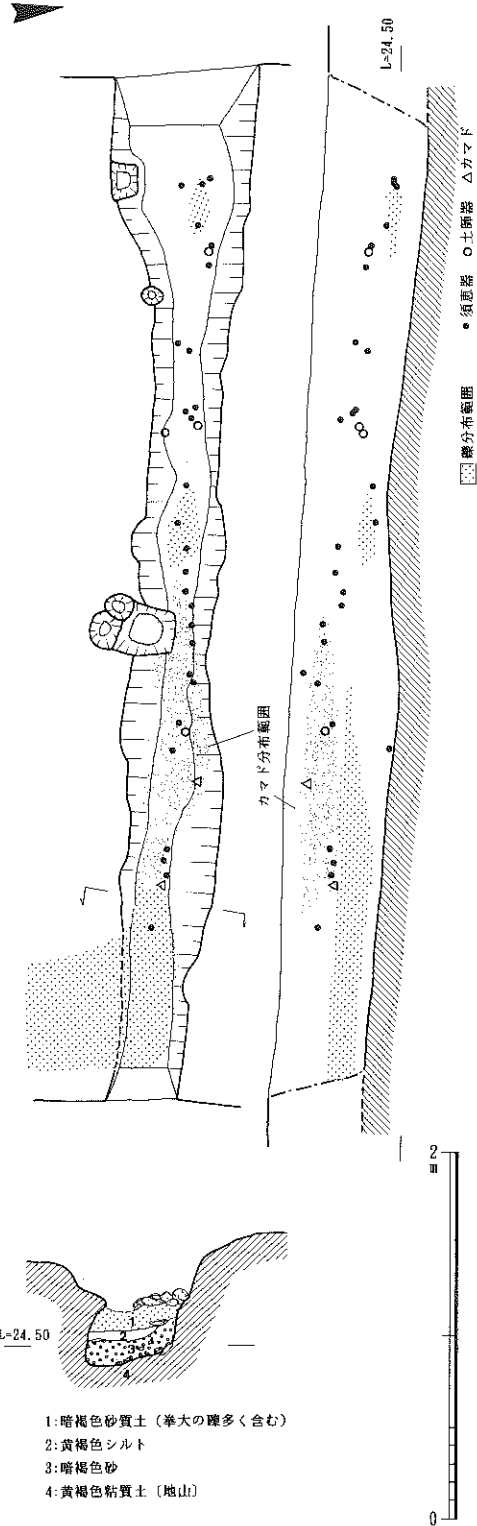
S K 3019 一辺6.0m×5.0m以上の方形土境で、S D3008・3009に先行する遺構である。竪穴住居の可能性はある。

S K 3067・3068・3070・3073 直径1.2～1.5m、深さ0.7mの比較的大きな土境が重複している。

埋土には細片化した遺物を含むが、少量である。また、有機質などを顕著に含む様子もみられない。7世紀後葉から8世紀代か。

D. IVトレンチ（図版32・写真図版41～50）

IVトレンチは、谷下り地区では最も東に位置する、南北55m、東西45mの調査区である。



第35図 S D 3009実測図

- 1: 暗褐色砂質土（礫の種多く含む）
- 2: 黄褐色シルト
- 3: 暗褐色砂
- 4: 黄褐色粘質土（地山）

第1節 検出遺構

検出した主な遺構は、古墳時代中期の竪穴住居、古墳時代後期の円墳（菟道谷下り古墳群）、溝、掘立柱建物、土壙、不定形土壙、不明遺構、土器溜りなどの飛鳥後期から平安時代に至る遺構群、そして鎌倉時代の墳墓などである。谷下り古墳群は、本調査で初めて存在が明らかになった後期群集墳で、今回の調査で3基を確認している。また、古墳時代から鎌倉時代にかけての遺構群からは、集落の具体的な消長を知ることができた。

遺構は多くを黄褐色粘質土の地山面で検出したが、一部は地山より約10～20cm上面の遺物を含む黒褐色土上で輪郭が見え始めた。状況的には、地山から掘削されている遺構と、黒褐色土から掘削され地山に達している遺構があり、部分的に複数の遺構面が存在したとみられる。トレンチ西部のSD4012付近、南部の菟道谷下り1号墳付近でその状況が顕著であった。なお、地山の標高は26.9～26.1mで、北西方向へ緩傾斜する地形にある。

遺構の遺存状況は、近現代の削平を深くまで受けており、全体的に良好でなかった。表土層下では、地山までの間にわずか10～30cm（黒褐色土の遺物包含層）を残す程度であった。また、遺存状況は一様でなく、トレンチ東西ではさほど差はないが、南北では北側で浅く南側で比較的深く残っていた。この状況は、南から北へ低くなる旧地形の有様とは逆の現象である。各時代の整地や造成が反映しているためと思われる。

遺構の分布状況は、北東部分に稀薄なところがあるが、全体的に密である。北半部には掘立柱建物群とともに、構造・機能・時期など判断できなかった柱穴や小土壙が集中している。これらの多くは直径50cm未満の円・方形柱穴である。中には掘立柱建物や柵列になるものを含んでいる可能性はあるが、炭や土器細片が高い密度で詰まっていたものもあり、一様には理解できない。概ね奈良～平安時代に属するとみられる。

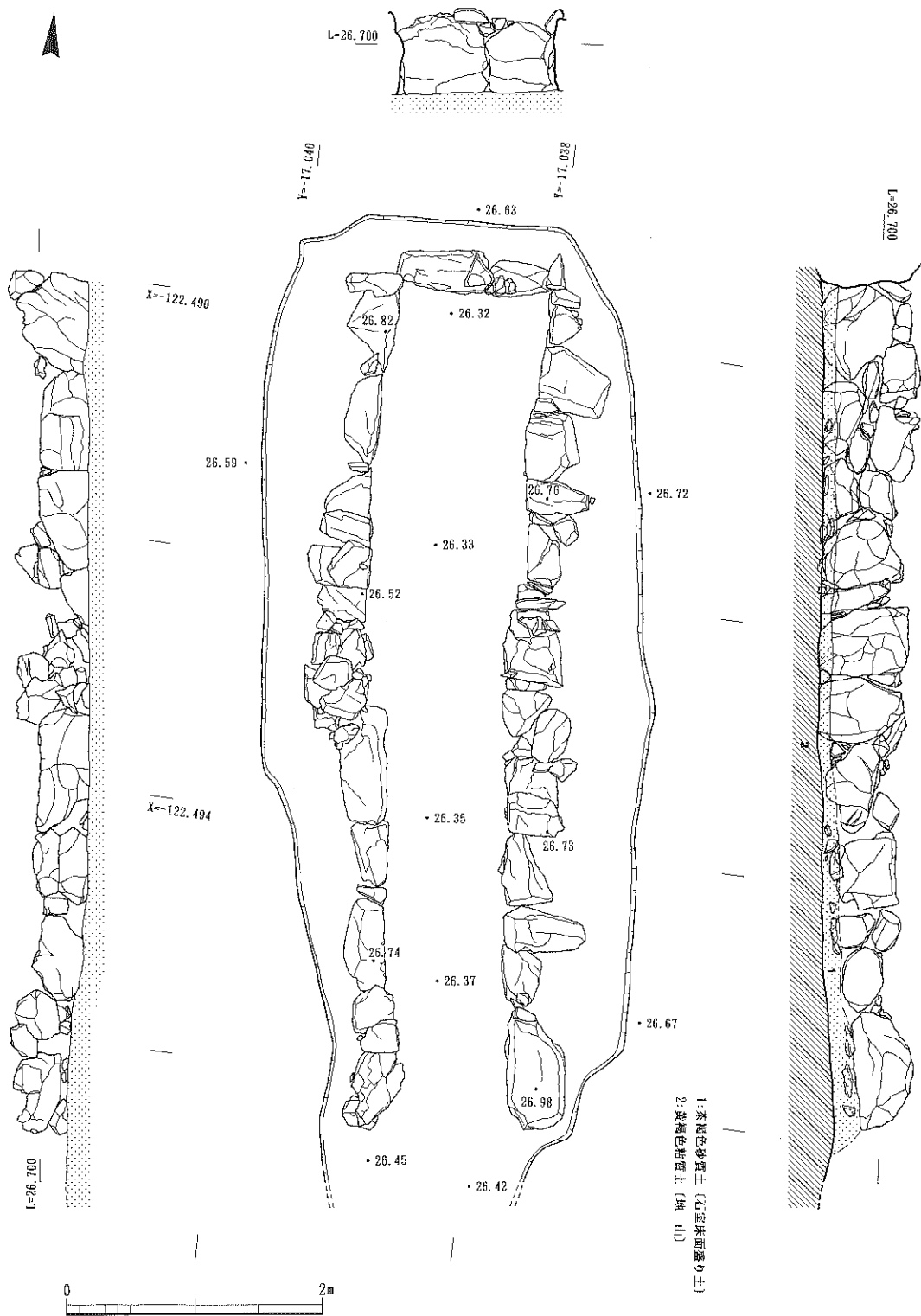
なお、遺構名には、5000番台のものと4000番台のものがあるが、調査時に北半部の遺構については5000番台を、南半部については4000番台を付したことによるものである。例言で述べたように、整理作業の段階で変更したものがあるが、基本的には調査時の遺構名を優先している。

a. 古墳

菟道谷下り1号墳 主体部に横穴式石室をもつ直径13mの円墳である。周囲には周濠がめぐる。墳丘の大部分が削平されており、石室も最下段の1～2段を残すのみであった。

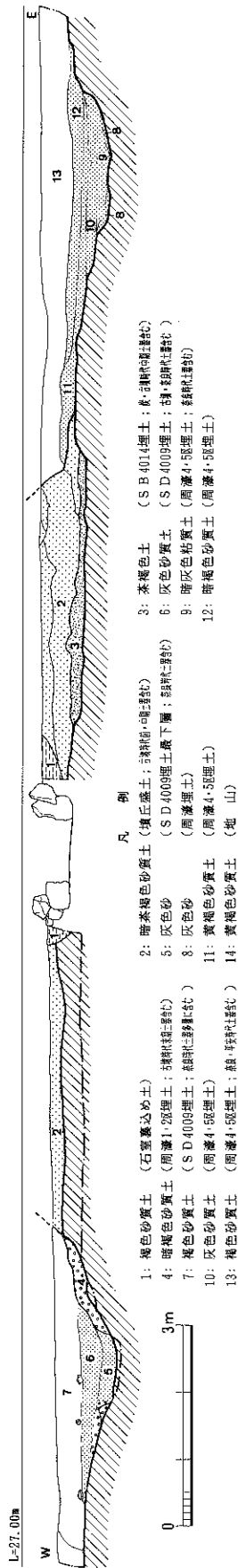
墳丘は平面がほぼ円形で、石室が南寄り中央に存在する。古墳は平坦地に築造されており、多くが盛り土であったことがわかる。墳丘は周濠底から約0.8m、周辺地盤から約0.3mほど残っていた。墳丘の土層は大きく2層で、黒褐色土の盛り土と、基盤となる黄褐色粘質土の地山からなる。前者には、古墳時代前～中期の土器類および炭を多量に含んでいた。盛り土作業の単位である土堤や土塊などは観察できなかったが、墳丘への盛り土を行った後に石室掘方を掘削していることが確認できた。

前庭部は、石室最南端から南へ3m、幅1.5～3mの範囲で、周濠の一部を掘り残して確保されている。埋土からは須恵器数片と碧玉製管玉が1点出土しているが、位置そのものは攪乱され移動している。



第36図 菟道谷下り1号墳石室実測図

周濠は幅3m、深さ50cmで、前庭部を残して周囲を巡る。埋土は大きくは2層で、暗褐色砂質土の周濠埋土と、7世紀後半に溝として再掘削された後の埋土である灰褐色粘質土である。周濠埋土は、肩口から底にかけて約15cm堆積しているため、周濠は溝の掘削までにある程度埋没していたことがわかる。周濠埋土からは、2単位ほどのまとまりで7世紀初頭頃の土器が出土してい



第37図 菟道谷下り1号墳墳丘土層図

る。葬送に伴う遺物である可能性が高い。また、金環が1点出土している。

なお墳丘は、削平面に営まれている中世墓SX5005から、13世紀末頃までに失われたことがわかる。また盛り土下の地山から、古墳時代中期の竪穴住居(SB4014)を検出している。

石室形態は、南に開口する右片袖式の横穴式石室である。主軸は座標北から西へ5度偏する。石室の全長は6.6m、奥壁幅は1.2mを測る。平面形は、両側壁がわずかに円弧を描いて左側に膨らむ特徴がある。玄室は長さ3.6m、幅は1.2mではほぼ一定である。玄門幅は1.0mと玄室幅よりわずかに短い程度で、袖の出は少ない。羨道は長さ3.0m、幅は1.0mで一定である。

壁石材には、0.06~0.3立法mの小振りで角がやや取れた粘板岩や砂岩を使用している。付近の小河川上流で採取されたものとみられる。据え付けには、平滑な面を壁面とするほかに規則性はなく、長短辺を様々に使っている。なお、加工痕をもつものはなかった。

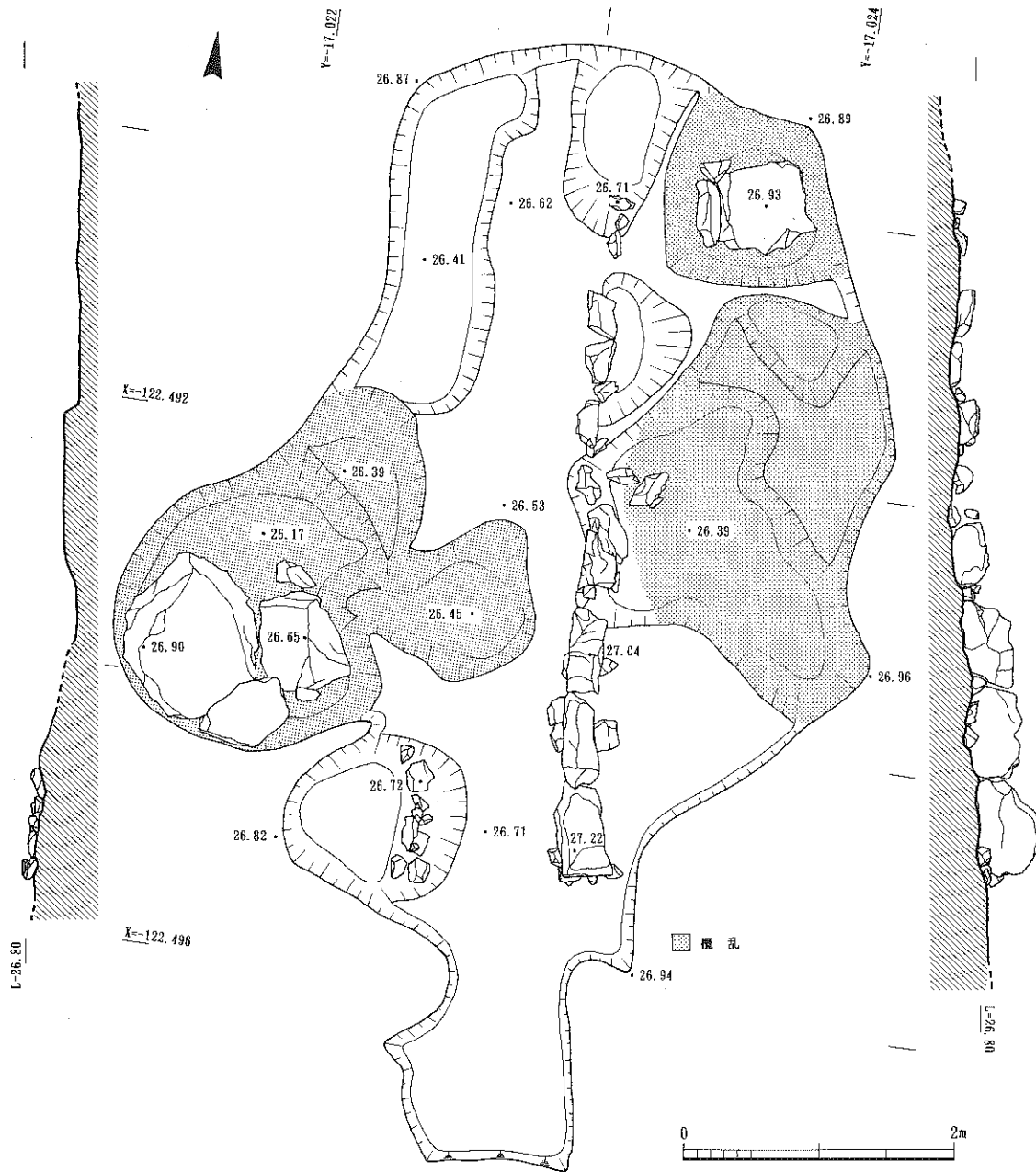
石室内土層は、概ね2層で、埋土(暗茶褐色砂質土)、石室床面盛り土(茶褐色砂質土)で地山(黄褐色粘質土)となる。埋土は埋葬前後のものと、古墳削平以降の流入土とを分層することができなかった。床面上の遺物は少なく、大きく攪乱されていると考えられる。遺物は、埋土中に須恵器3点、床面上に鉄製品片4点が残されているのみであった。須恵器は6世紀末から7世紀初頭頃のものである。ほかに7世紀後半の土器小破片・瓦があったが、削平後に混入した可能性が高い。

菟道谷下り2号墳 主体部に横穴式石室をもつ、直径15mの円墳である。周囲には周濠がめぐる。1号墳よりも地山の標高が高いためか、遺存状況はさらに悪く、墳丘の大半が削平されている。石室石材も、部分的に基底石が残るのみであった。

墳丘は平面的にはやや角が張った円形を呈し、石室が南寄り中央付近にある。墳丘はほとんど盛り土によって構築されていたとみられるが、残されていたのは地山以下であった。残存高は、周濠底から約60~70cmで、周辺地盤とは同一高である。

前庭部は、羨道端部からほぼ平坦に広がる南へ3m、幅1~1.5mの範囲でやや地山を掘りくぼめてある。周濠は全周している。

周濠は西側4分の1を除いて、7世紀後半に掘削された溝と重複している。1号墳よりも墳丘規模は大きいわりに、周濠幅は2~2.5mとほぼ半分である。深さは70cmで断面は皿状を呈する。なお、1号墳

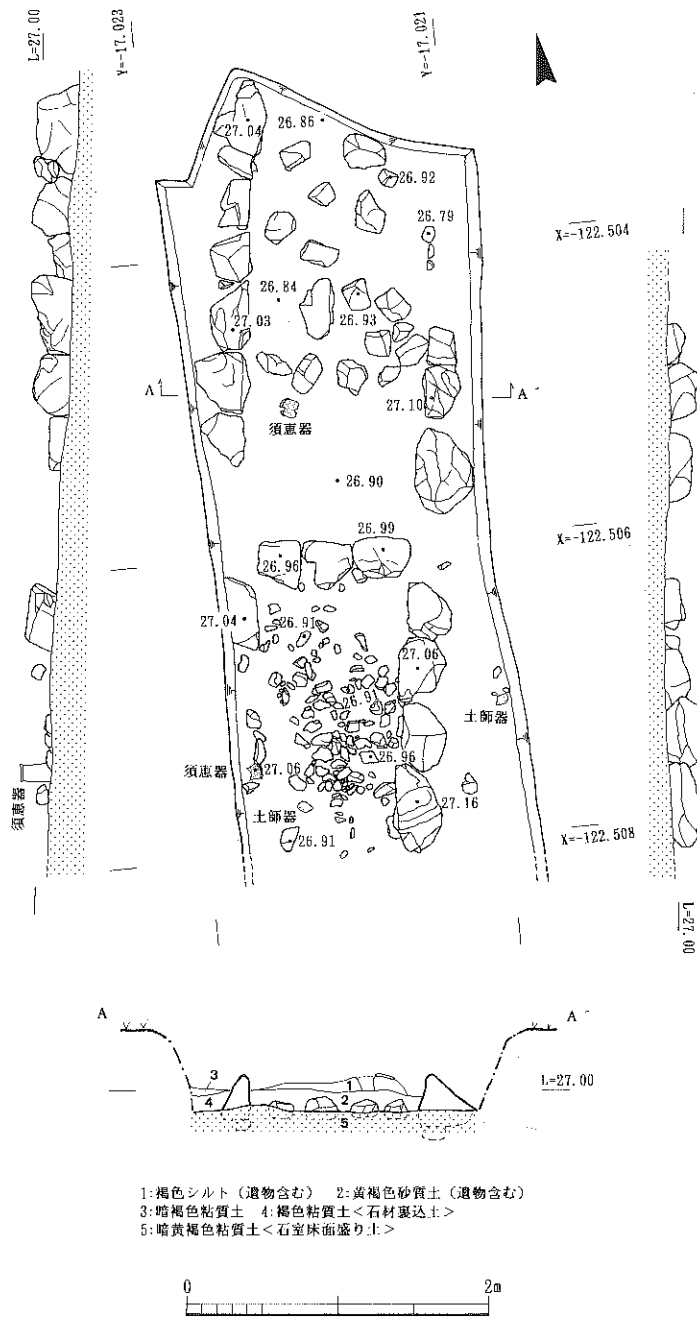


第38図 菟道谷下り2号墳石室実測図

周濠とは近接しているものの、間は土手状に地山が掘り残してあり共有していない。出土遺物は細片の土師器・須恵器が少量ある程度である。

石室は、南に開口する横穴式石室である。主軸は座標北から西へ5度偏する。西壁の大半と東壁の北半分を失っているが、基底石の根石の一部と、石材の据え付け時の掘方とみられる小土壌が遺存しており、石室規模は全長約5.8mになるものと推測できる。

また、側壁石材が残存している付近を境に床面が南に向けて高くなっており、ここが玄門になると推定できる。ここからは、概ね玄室長3.0m、同幅1.0~1.2m、羨道長2.8m、同幅1.0mと推測できる。これらの数値は1号墳のもの、ほぼ同規模である。



第39図 菟道谷下り3号墳石室実測図

があり、1・2号墳とは構造や構築方法が異っている。

墳丘は形・規模ともに不明である。周濠はもたない。墳丘はほとんど盛り土によって構築されていたとみられ、地山に痕跡は残っていなかった。ただし、2号墳周濠とは重ならない範囲であると考えられるため、概ね直径10mほどの規模であると推測される。

石室は南に開口する横穴式石室である。主軸は座標北から東へ4度偏する。石室の全長は5.3m以上を測る。玄室は長さ3.1m以上、幅は1.2mである。なお羨道幅は1mであることから袖を持つことがわかる。袖石そのものは失われているが、東壁は玄門・羨道にかけて直線的に通るため西壁側に袖をもつ右片袖式と推定できる。1号墳同様、袖の出は少ない。羨道は長さ1.7m以

壁面の石材も1号墳同様に、0.2立法m程度の角がやや取れた粘板岩・砂岩を使用しており、加工痕をもつものはなかった。周囲には、削平時に石材処理のため掘削されたとみられる攪乱があり、中には1.2~0.6立法mの大きな砂岩が4個残されていた。これらは側壁石材に比べてかなり大振りで、奥壁や天井石として利用されていた可能性が高い。

石室内には、全く遺物は残されていなかったが、西側の攪乱壊から金環が1点出土している。古墳の時期は1号墳とほぼ同時期と考えられる。

菟道谷下り3号墳 主体部に横穴式石室をもつ古墳である。この古墳は、当初トレンチ南壁で石材の一部が露出したため発見したが、周濠を持たず墳丘盛り土も遺存していなかったため、墳形は不明である。調査は石室部分のみを拡張して行った。遺存状況は、基底石の1段を残すのみであった。なお、3号墳の石室は玄門に框石、玄室に棺床石、羨道に敷石をもつ特徴

上、幅は1.0mである。西壁の南端はトレンチ外となるが、地表面からボーリングを行ったところ石材は確認できなかった。

壁面の石材には、0.1立法mほどの小振りで角がやや取れた粘板岩や砂岩を、主に長辺側の平滑面を使用して据えている。加工痕をもつものはない。また断ち割りにより、こぶし大の根石が壁面石材各々に2～3個、整然と添えられていることがわかった。

玄室と羨道の間には上面が平らな3個の石材(約40×30×10cm)が、玄室側に面をそろえて並べられている。框石と考えられる。また、玄室内には上面が平らな礫(約30×20×15cm)がやや疎らに、羨道には小礫(10×5×5cm)が比較的密に存在する。前者は棺底石、後者は敷石とみられる。框石・棺底石は、厚さ3cm程度は床面より突出していた可能性が高く、敷石も露出していたと考えられる。

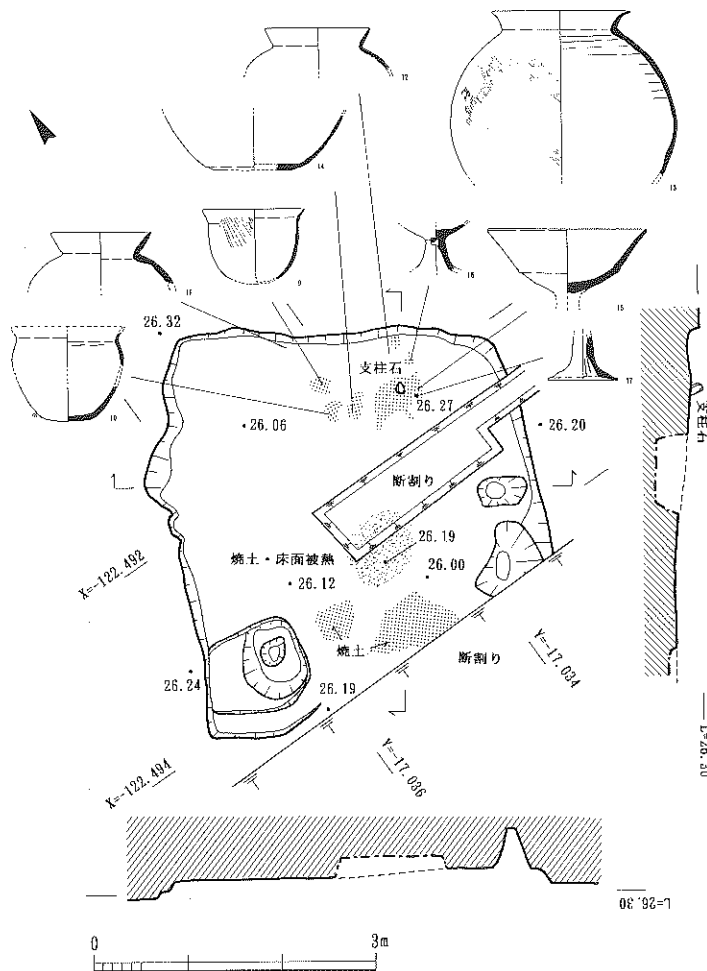
石室内の土層は大きくは3層である。上層から埋土(褐色シルト)があり、框石・棺床石・敷石が埋め込まれている床面盛り土(暗黄褐色粘質土)がある。さらに石室石材・根石の据え付けのための整地土(小礫を多く含む暗褐色粘質土)が施され、地山(灰褐色粘質土)となる。埋土からは、完形に近い須恵器が2点出土しており、削平以前に堆積した土層である可能性が高い。

遺物は、流入土中より須恵器が7点、床面盛り土内からは土師器片が数点出土している。須恵器は7世紀初頭のものである。

b. 竪穴住居

S B4014 一辺4.4m×4.0mの方形竪穴住居である。菟道谷下り1号墳の墳丘下で検出した。深さは約15cmで、かなり削平されている。

住居のほぼ中心には、炉跡とみられる炭・焼土の分布が直径70cmの範囲で存在した。被熱による赤変が地山にまで達しており、直上は焦げた炭が特に密に分布していた。さらに住居北壁中央にも、炉跡とみられる炭の分布が存在した。範囲は直径60cmほどである。中央には、カマド支柱石とみられる立石の埋め込みがあった。ここでは被熱による地盤の赤変はなかった。また周囲で粘土塊などのカマド構造は発見できなかった。



第40図 S B4014実測図

貼り床は確かめられなかったが、支柱石は地山へは3cmほどしか埋まっていなかったこと、概ねの遺物が地山より10cmほど高い地点から出土していることから、施されていた可能性が高い。なお、周壁溝や支柱穴痕は検出できなかった。

出土遺物には土師器がある。特にカマド周辺に集中する傾向が認められる。5世紀中葉。

S B4015 一辺4.7m×2.5m以上の方形竪穴住居である。深さは13cmであった。支柱穴が2か所で残っている。直径0.4~0.5m。炉・カマド跡、周壁溝などは検出しなかった。また、直近のS X5004（奈良~平安時代）を、住居を覆っていた黒褐色土上で検出しているため、削平はこの頃までに行われたと想定できる。出土遺物は土師器が数片あるのみである。古墳時代か。

c. 掘立柱建物

本トレンチでは、7棟の掘立柱建物を検出している。顕著な重複はないが、方形掘方と小型円形掘方を持つものがあり、複数期のものが存在すると考えられる。各々からは時期の特定できる遺物は出土していないが、概ね前者が奈良時代、後者が奈良から平安時代に想定できる。

S B4016 桁行3間（5.3m）×梁間2間（3.8m）の南北棟建物である。方形から隅丸方形の柱掘方（一辺0.5~0.6m）を持つ。2か所の掘方内では直径0.2mの柱痕跡を検出しているが、柱筋は直線的でない。また、梁間中央柱穴がやや内側にあるが、この建物に伴うものであろう。柱穴間は桁行1.5~2.0m、梁間1.5~2.0mである。

S B4017 桁行2間（4.2m）×梁間2間（3.2m）の南北棟建物である。概ね一辺0.5mの方形掘方をもつ。桁行柱穴間は2.5mと1.7mで不揃いである。

S B4018 桁行3間（5.5m）×梁間2間（4.0m）の東西棟建物である。一辺0.7mの方形掘方をもつ。柱穴間は桁行2m、梁間2mでほぼ平均している。柱筋もほぼ直線的に通る。

S B4019 桁行2間（3m）以上×梁間2間（4m）の南北棟建物である。直径0.4mの円形掘方をもつ。ほとんどが調査地外となる。

S B4020 桁行3間（3.5m）×梁間1間（2.3m）の東西棟建物である。直径0.4mの円形掘方をもつ。柱穴間は比較的短く桁行1.2m、梁間1.0mで、梁間は2間となる可能性がある。

S B4021 桁行2間（3.2m）×梁間2間（3.1m）のほぼ正方形建物である。総柱建物となる可能性がある。柱穴は直径0.5mの円形掘方を持つ。柱穴間は概ね1.7mである。

S B4022 桁行3間（6.7m）×梁間1間（3.5m）の南北棟建物である。一辺0.5mの方形掘方をもつ。桁行柱穴間は2mとほぼ平均している。

d. 溝

本トレンチでは、遺構番号を付けた溝が13条あるが、このうちのS D4001~4011は、流末でつながっているものがあり、総てが独立した溝ではない。ただし、現地での遺物取り上げをこの遺構区分ごとに行っており、対応関係の混乱を避けるため、そのまま説明を行いたい。

各々の溝のつながりは次の通りで、S D4004がS D4006・4007に、S D4005がS D4008・4009にそれぞれ分岐する。また、この4条は、Ⅱ・Ⅲトレンチで検出した奈良時代溝群（S D2006-3006、S D2007-3007、S D2008-3008、S D2009-3009）へとつながって行く。

どの溝からも、7世紀後葉から8世紀代の遺物が出土しており、溝は概ねこの間に機能していたと考えられる。また、一部の溝上層からは9世紀の土器類が出土しているが溝の埋没過程で投棄されたものとみられる。溝そのものはこの頃には機能していなかったと考えてよい。

SD4001 長さ1.5m、幅0.7m、深さ0.5mの南北小溝である。SD4002と1号墳周濠間にある土手状の地山掘り残し部を、バイパス状に貫通させている。遺物は出土していない。

SD4002 幅1.3~1.5m、深さ0.8mの東西溝である。わりに深く、断面形はU字状である。SD4003を再掘削している。埋土最下層は粗い砂層で、遺物のうちの残りの良いものはほぼこの層から出土している。SD4007につながる可能性が高い。

SD4003 幅1.8~2.3m、深さ0.4m以上の東西溝である。SD4002よりも比較的浅く、断面形は皿状である。1号墳周濠とは重複しない。SD4006につながる可能性が高い。

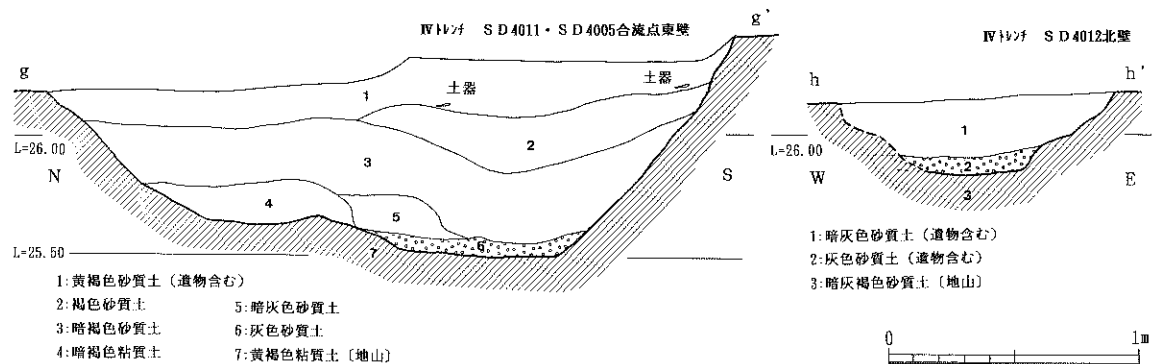
SD4004 幅1.8~2.7m、深さ0.4~0.7mの東西溝である。2号墳周濠とはほぼ重複している。流れは1号墳周濠東部付近で、1号墳周濠に沿って北西へ向かう方向(SD4004A)と、SD4002・4003へつながる西方向(SD4004B)との2方向に分岐している。また、後者は、南壁が階段状に2段になっており、再掘削されていることがわかる。先行するものをSD4004Ba、後出のものをSD4004Bbとする。したがってSD4004は、2度の再掘削が行われていることがわかる。順序は、SD4004Aの底部が若干SD4004Baよりも高く、SD4004A→SD4004Ba→SD4004Bbであると考えられる。なお、SD4004A・SD4004Baが併存していた可能性はある。

SD4004A・B間は、地山を掘り残した堤状の高まりによって隔てられている。その東先端は現状では岬状に突出しているが、盛り土などによって2号墳墳丘とつながっていた時もあったと考えられる。また突出には補強のためか、人頭大の礫が添えられている。

SD4005 幅1.5~2.0m、深さ0.8mの東西溝である。1・2号墳周濠を貫通させて、流れを下流へと導いている。周濠との重複部分では溝底の方が深く、掘り直しが行われている。

SD4006 幅0.7~1.0m、深さ0.4mの東西溝である。SD4003とつながる可能性が高い。

SD4007 幅1.2m、深さ0.5mの東西溝である。SD4002とつながる可能性が高い。SD4008との境を接しているが、この間はわずかに高まるのみである。そのため、同時に流れていたとは考えにくく、重複のあることを想定したが、埋土が土色や土質ともにほぼ同じで確かめることが



第41図 SD 4011・4005合流点、SD 4012土層図

第1節 検出遺構

できなかった。また、西へ行くほど両者は離れる。

S D4008 幅1.2m、深さ0.5mの東西溝である。S D4010とつながっている。土器類とともに瓦製土馬が出土している。

S D4009 幅1.0m、深さ0.7mの東西溝である。1号墳周濠西端でこの溝とS D4010とが分岐している。どちらが先行したかは不明であるが、S D4010流末のS D4008底よりも、S D4009の底部高の方が低いため、後から掘削されたと理解しておきたい。

S D4010 幅1.5m、深さ0.5mの溝である。S D4005とS D4008をつないでいる。

S D4011 幅1.5m、深さ0.6mの北東から南西方向へ流れる溝である。S X5001からS D4005へとつながっている。土器類のほかに、陶棺の底部が出土している。

S D4012 幅2.0m、深さ0.2mの北流する南北溝である。断面形は浅い皿状を呈する。端部は1号墳付近である。S D4009とはわずかにつながっているが、S D4012底部の方が高いためS D4009からの水流があったとは考えがたい。東西方向の溝群とは断面形状などの様相が異なっていることから機能上の関連性は薄いとみられる。なお、埋土は大きく2分され、溝は下層埋土に含まれる遺物の時期に機能していたと考えられる。ここには、土器類のほかに帯金具（丸鞆・巡方）や土馬が含まれている。7世紀後半～8世紀。

また、溝の埋没後、上層に9～10世紀の土器・瓦・礫を含む包含層が形成されている。この包含層は溝上層埋土と明確に分層できるものではなかった。状況的には溝埋没後、くぼみ状に残っていたところが包含層に覆われたと考えられる。なお、包含層は、直下の前代遺構の残存状況から整地層である可能性がある。上層埋土を含む包含層は、IVトレンチ北西端に東西5m、南北17mの範囲で存在するものである。特にS D4012と重なる範囲では、帯状に小礫が集積した状況を検出した。礫の集積範囲については、第69図にスクリーントーンで示した。当初は溝の埋土中に礫が落ち込んでいるものと考えていたが、約2.0m西側から同様の礫の集積を検出したため、一帯が西側に向けての段差を持つ地形にあり、そこに遺物や礫が集中したものと考えられた。

礫は、相互が重なりあう状況にあった。分布には粗密があり、面がそろえられている状況ではない。丸みの取れた10～20cm大の砂岩・粘板岩が主体である。

礫の間には土器類・瓦類などの遺物を含んでいた。瓦は7世紀後半の平瓦・軒平瓦があるが、土器類は9世紀から10世紀のものが多く、この時期に構築されたと考えられる。ほかにも鉄製品が出土している。

また、Iトレンチで検出した不明遺構S X1002とは時期的に併存するほか、位置的にもほぼS X1002の真南にあたり、一連の道路状遺構となる可能性がある。

S D4013 幅1m、深さ0.2mの溝である。浅く断面形皿状で、流末はS D4012につながる。図化可能な遺物はなかったが、7世紀後半から8世紀代に機能していたと考えられる。

e. 土 壙

S K4023 直径0.7m、深さ0.1mの浅い皿状土壙である。1個体分の甕体部片を含んでいた。

S K5281 直径0.3m、深さ0.4mの小土壙である。多量の炭とともに細片化した土器が詰まっ

ていた。10世紀。

S K 5383 一辺0.3m、深さ0.3mの隅丸方形を呈する小土壇である。S K 5281同様、炭とともに細片化した土器類を含んでいた。10世紀。

S K 5325 直径0.6m、深さ0.3mの小土壇である。8世紀の杯Aを含んでいた。

f. 土器溜り

S X 4024 削平された1号墳の墳丘の一角から、6世紀末から7世紀初頭の土器がまとまって出土した。ちょうど水田境の段差の下端部にあたり、水田造成に伴って移動したものと考えられる。状況的に1号墳に伴う遺物群である可能性が高い。

S X 5001 6×10m以上の範囲で広がる落ち込みに、多量の土器が投棄されていた。土器の分布範囲は肩口から3mまでに集中しており、東に離れるにつれて出土しなくなった。土器類は完形のもの皆無で、接合するものも少なく、多くの個体の遺存率は50%以下であった。

なお、落ち込みそのものは深さ0.3mと浅いもので、S D 4011はここに取水口を開いている。また、埋土や地山がグライ化していたため、常時湿潤な環境にあったことがわかる。このような状況からは、すぐ東を北西方向に流れる戦川が形成した氾濫原か、もしくは、その流れを塞ぎ止めたためにできた湿地であった可能性が高い。

遺物は9世紀のものが多いが、10世紀のものや古墳時代陶棺片を少量含む。

h. 瓦溜り

S X 5004 IVトレンチの西側付近で、完形に近いものも含む比較的大きな破片の平瓦7片が集中して出土した。周囲に掘方はもたない。平瓦は、すべて格子タタキ目をもつ7世紀後半のものである。ただし、投棄された時期は、S D 4012上層に形成された包含層と同時期であると考えられる。

i. 不定形土壇

S X 5002 5×4mの平面半円形を呈する浅い土壇である。細かくなった土器片が多く含まれていた。自然のくぼ地の可能性もある。土器片は概ね7世紀後半から8世紀のものである。

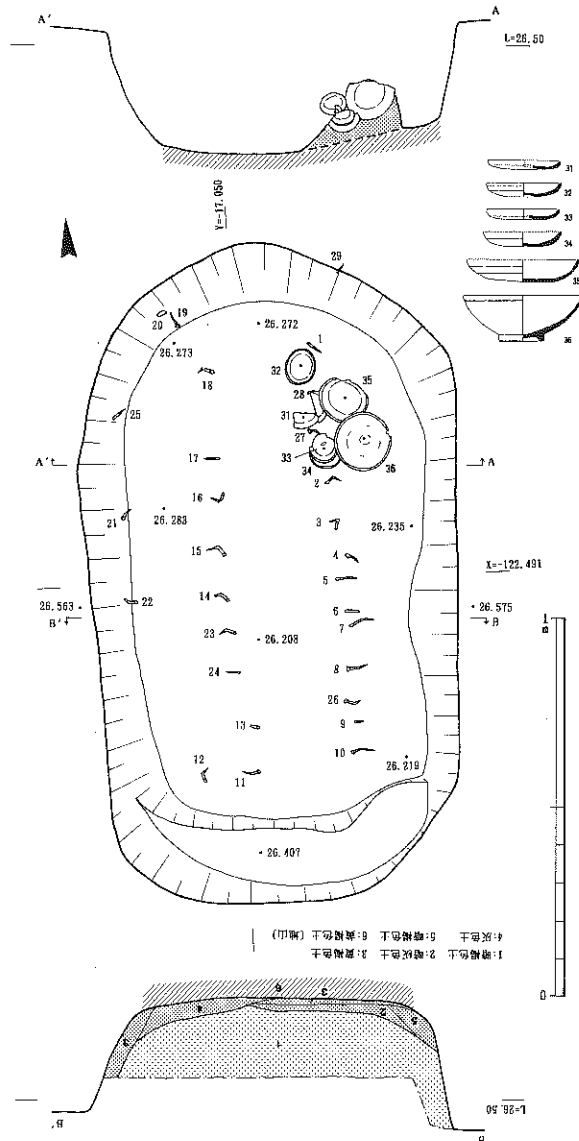
(吹田)

j. 中世墓

S X 5005 苑道谷下り1号墳の墳丘削平面で検出された土壇墓である。土壇墓が形成された基盤面は、1号墳の盛り土である黒褐色土層上にあたる。土壇墓が形成された当時の古墳の姿は、マウンドはすでに削平を受けて平坦となり、内部の石室も同様に壊されていたらしく、土地利用に影響を与えないところのみ、地中に埋もれていたようである。

土壇墓の輪郭は、隅丸長方形状にくっきりとあらわれた。輪郭は南北1.75m、東西0.95m程の大きさである。土壇墓の埋土は、大きく5層に分別された。最上層は暗褐色土で、以下順に暗灰色土、黄褐色土、灰色土、暗褐色土に分けられた。最上層の最も厚く堆積する暗褐色土以外の土層は、土壇と棺との隙間を埋めるために用いられた土と想定される。暗褐色土は、土壇全体を埋めた際に使われた土と解される。検出面から底面までの深さは約30cmほどを測る。

第1節 検出遺構



出土した遺物は、土師器・陶磁器・鉄釘である。土師器皿5枚、白磁碗1枚は土壌北東端部でまとまって出土した。土師器皿は13世紀代後半のものである。いずれも北東側から南西側に向かって傾いており、土層との位置関係から棺蓋上でその北東隅に置かれ、埋められたものと判断される。

墓壇底からは鉄釘が30本出土した。鉄釘は、概ね磁北方向にほぼ2列（西側をA列、東側をB列）をなして釘の頭部を内側、前端部を外側に向けて並んでいた。2列の間隔は、25 cm程である。レベル的にもほぼ同一で、26.30 m程の数値を示す。鉄釘の存在から、木棺が想定され、また土層の状況から、鉄釘は木棺の蓋を打ち付ける際に使用されたものと思われる。蓋部以外の木棺の構造は、鉄釘が認められないことや、棺は別の場所から担いで運び込まれたであろうこと等から、底板・側板いずれも存在し、その構成は、組み合わせ式か、もしくは一木造り式であったかのどちらかが想定される。おそらく前者の方が理解として妥当ではないかと思われる。

これらの鉄釘が棺の埋葬後に、どのような過程を経て出土した状態に至ったのかがはっきりとしないため、木棺の詳細復元にまでは至らなかった。今後の課題である。なぜ棺蓋部においてだけ鉄釘が使用されたかが問題となる。この点は一概に解決しえないが、現代でも亡き人との別れ際に、棺に蓋を打ち付けるために、石で釘を打つ風習との関連性を考

No.	出土高(m)	No.	出土高(m)	No.	出土高(m)	No.	出土高(m)
1	26.350	9	—	17	26.271	25	26.317
2	26.278	10	26.368	18	26.315	26	26.326
3	26.281	11	26.304	19	26.434	27	—
4	26.279	12	26.323	20	26.413	28	—
5	26.286	13	26.281	21	26.396	29	26.521
6	26.306	14	26.278	22	26.366	30	—
7	—	15	26.265	23	—	*下線は棺床より上層から出土したものを示す	
8	26.326	16	26.280	24	—		

第42図 S X5005実測図と鉄釘出土高表

慮する必要がある。

また、中世墓周辺では、柱穴が想定されるようなピットは認められず、耕作地かもしくは荒蕪地のようになっていたものと考えられる。しかしながら、耕作地内に直截に墳墓が造営されるのは考え難いため、中世墓辺りは耕作地の中の余地あるいは残地のような景観にあったと推察したい。

(浜中)